

IBM DB2 Information Integrator



マイグレーション・ガイド

バージョン 8.2

IBM DB2 Information Integrator



マイグレーション・ガイド

バージョン 8.2

ご注意！

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、105 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： SC18-7360-01
IBM DB2 Information Integrator
Migration Guide
Version 8.2

発 行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2004.8

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 1998, 2004. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2004

目次

本書について	v
--------	---

第 1 章 DB2 Information Integrator 移行の概要

DB2 Information Integrator への移行の概要	1
サポートされる移行機能および関数	2
サポートされるデータ・ソース	2
移行されたオブジェクト	3
DataJoiner の移行の制約事項	4
サポートされる DataJoiner のバージョン	5
DataJoiner Classic Connect データ・ソース	5
DB2 UDB ランタイム・クライアントのサポート	5
ストアード・プロシージャ	5
2 フェーズ・コミット・トランザクション	6
LONG データ・タイプ	6
レプリケーションの制約事項	8
ニックネーム	8
無効なデータ・タイプ・マッピング	9
無効なサーバー・オプション	9
データベース・パス・ロケーション	9
Microsoft SQL Server データ・ソース	10
Sybase サーバーのオプション	10
抽象データ・タイプおよび拡張索引	10
空間データ	10
コード・ページ・サポート	11
SQL DDL 構文の変更点	11
DB2 バージョン 7 フェデレーテッド・システムの移行の制約事項	12
サポートされる DB2 Universal Database のバージョン	12
Sybase サーバーのオプション	12
LONG データ・タイプ	12

第 2 章 移行の考慮事項

移行の制約事項	15
移行に関する推奨事項	16
移行スペースに関する推奨事項	18
逆移行の制約事項	20

第 3 章 移行の前に

DB2 の移行の前のデータベースのバックアップ	21
DB2 の移行前のシステム構成設定の記録	22
移行前のデータベース情報の記録	23
移行前のインスタンス情報の記録	24
DB2 移行前の診断エラー・レベルの変更	25
DB2 レプリケーション使用時の DataJoiner サーバーの移行準備	25
DB2 Information Integrator への移行の準備をする	26
構成設定のコピー	26

LONG および LOB データ・タイプの書き込み操作をアプリケーションから除去または変更する	27
WITH CHECK OPTION 文節を使用して作成されたローカル・ビューをドロップする	27
DataJoiner PTF レベルの検証	28
AIX バージョン 4.1 の DataJoiner の移行	28
データベースが移行できる状態にあることの確認	28
移行のために DB2 UDB バージョン 6 または バージョン 7 サーバーをオフラインにする	29

第 4 章 DB2 Information Integrator への移行

DB2 Information Integrator に移行するためのインストール手順	31
UNIX オペレーティング・システム上でインストールおよびデータベースを移行するためのインストール・シーケンス	31
Windows オペレーティング・システム上でインストールおよびデータベースを移行するためのインストール・シーケンス	32
Windows サーバーの移行	34
DB2 UDB の移行 (Windows)	34
UNIX サーバーの移行	35
DB2 UDB サーバーの移行 (UNIX)	36
インスタンスの移行 (UNIX)	37
DB2 Administration Server (DAS) の移行	38
64 ビット DB2 バージョン 8 への移行 (UNIX)	39
UNIX 32 ビット・システムの DataJoiner 2.1.1 から UNIX 64 ビット・システムの DB2 UDB バージョン 8 への移行	40
Explain 表の移行	42
アプリケーションの DB2 バージョン 8 への移行	43
データベースの移行	44
新規システムへのデータベースの移行	46

第 5 章 移行の後に

DB2 Information Integrator に移行後の作業	49
DataJoiner 構成設定の復元	50
DB2 UDB バージョン 7 フェデレーテッド・システムの構成設定の復元	50
データ・ソースのバージョンの変更	50
タイプ 1 索引からタイプ 2 索引への変換	50
DB2 ファミリー・データ・ソースへの接続の再作成	51
パッケージの再バインド	51
データ・ソースへのアクセスに使用されるラッパーの変更	52
DB2 Information Integrator 移行後の XML データ・ソースへのアクセス	55

DB2 Information Integrator への移行後のラージ・オブジェクト・データ・タイプに対する書き込み操作の許可	56
DB2 Information Integrator に移行後の DB2 ファミリーのデータ・ソースへのアクセス	58
DB2 Information Integrator 移行後の Informix データ・ソースへのアクセス	60
DB2 Information Integrator 移行後の Microsoft SQL Server データ・ソースへのアクセス	63
DB2 Information Integrator 移行後の ODBC データ・ソースへのアクセス	65
DB2 Information Integrator 移行後の Oracle データ・ソースへのアクセス	67
DB2 Information Integrator 移行後の Sybase データ・ソースへのアクセス	70
DB2 Information Integrator 移行後の AIX 上の Teradata データ・ソースへのアクセス	72
DB2 Information Integrator に移行後の Documentum データ・ソースへのアクセス	74
第 6 章 DataJoiner バージョン 2.1.1 からの移行参照情報	77
一般的な移行参照情報	77
DataJoiner の用語およびそれに相当する DB2 Information Integrator の用語	77
DataJoiner カタログの変換	78
DB2 ファミリーのデータ・ソースについての移行参照情報	80
DB2 ファミリー・データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点	81
DB2 for z/OS and OS/390 データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点	81
DB2 for iSeries (AS/400) データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点	82
DB2 for Linux, UNIX, Windows データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点	83
DB2 for VM and VSE データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点	84
Oracle データ・ソースについての移行参照情報	85
Oracle データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点	85
Oracle SQLNET のデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点	86
Oracle NET8 のデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点	87

Informix データ・ソースについての移行参照情報	88
Sybase データ・ソースについての移行参照情報	89
Microsoft SQL Server データ・ソースについての移行参照情報	90
Microsoft SQL Server データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点	91
ODBC データ・ソースについての移行参照情報	92
ODBC データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点	93
Teradata データ・ソースについての移行参照情報	94

第 7 章 DB2 バージョン 7 からの移行参照情報 97

DB2 バージョン 7 の移行参照情報	97
ラッパー・ライブラリー名の変更点	97
DB2 バージョン 7 と DB2 Information Integrator との間のデータ・タイプ・マッピング	97

DB2 Information Integrator technical 技術文書 99

DB2 Information Integrator の資料	99
リリース情報およびインストール要件	100
DB2 Information Integrator ドキュメンテーション・フィックスパック	101

アクセス支援 103

キーボードによる入力およびナビゲーション	103
キーボード入力	103
キーボード・ナビゲーション	103
キーボード・フォーカス	103
アクセスしやすい表示	104
フォントの設定	104
色に依存しない	104
支援テクノロジーとの互換性	104
アクセスしやすい資料	104

特記事項 105

商標	107
--------------	-----

索引 109

IBM と連絡を取る 113

製品情報	113
資料についてのコメント	113

本書について

本書では、以下のものから DB2 Information Integrator バージョン 8.2 に移行する方法を説明します。

- DB2 DataJoiner、バージョン 2.1.1
- DB2 Universal Database for Linux、UNIX、Windows バージョン 7
- DB2 Information Integrator バージョン 8.1

本書は、以下のような内容を含みます。

- 移行の考慮事項と制約事項
- 移行前に実行する作業
- 移行の手順
- 移行後に実行する作業
- 移行参照情報

本書は、以下から DB2 Information Integrator バージョン 8.2 への移行作業を実行するシステム管理者、データベース管理者、セキュリティー管理者、およびシステム・オペレーターを対象としています。

- IBM DB2 DataJoiner バージョン 2.1.1
- IBM DB2 Universal Database for Linux、UNIX、Windows バージョン 7 フェデレーテッド・システム (DB2 Relational Connect または DB2 Life Sciences Data Connect を使用するフェデレーテッド・システムを含む)

本書の読者には、以下に関する知識が必要です。

- DB2 Universal Database
- DataJoiner (DataJoiner から移行する場合)
- 標準的なデータベース用語
- データベース設計およびデータベース管理
- ユーザー固有のアプリケーション、およびアクセスするデータ・ソース

第 1 章 DB2 Information Integrator 移行の概要

この章には、以下のトピックがあります。

- 『DB2 Information Integrator への移行の概要』
- 2 ページの『サポートされる移行機能および関数』
- 4 ページの『DataJoiner の移行の制約事項』
- 12 ページの『DB2 バージョン 7 フェデレーテッド・システムの移行の制約事項』

DB2 Information Integrator への移行の概要

移行プロセスによって、既存のデータベースおよびデータベース・インスタンスが IBM® DB2® Information Integrator に変換されます。UNIX®、Linux、および Windows® システム上で、IBM DB2 DataJoiner® バージョン 2.1.1、または IBM DB2 Universal Database™ バージョン 7 から移行することが可能です。

以下のいずれかの方法で、DB2 Information Integrator に移行できます。

- 移行コマンド **db2ckmig**、**db2imigr**、および **db2 migrate database** を発行する
- DB2 Information Integrator および DB2 Universal Database for Linux、UNIX、Windows バージョン 8 をインストールする

通常は、手動でファイルをコピーしたりリンクを作成したりする必要はありません。

DB2 Universal Database バージョン 7 から移行する場合、DB2 Relational Connect および DB2 Life Sciences Data Connect もまた移行プロセスに含まれます。DB2 Universal Database バージョン 7 から DB2 Information Integrator に移行した後、明示的に DB2 Relational Connect および DB2 Life Sciences Data Connect への移行作業を行う必要はありません。

DataJoiner または DB2 Universal Database から移行するには、以下のような作業を完了する必要があります。

1. 移行の準備。サポートされる移行機能および関数について理解すること、データベースのバックアップ、システム情報とデータベース情報の記録などの作業が含まれます。
2. 必要なソフトウェアのインストール。
3. オブジェクト (インスタンス、データベース、Explain 表、アプリケーションなど) の移行。
4. **DataJoiner for AIX®** および **Solaris ユーザーの場合**: パッケージの再バインド。
5. **Oracle** および **Sybase ユーザーの場合**: データ・ソース用のラッパーの変更。この作業はオプションです。
6. データ・ソースへのアクセスのセットアップ。

関連概念:

- 31 ページの『DB2 Information Integrator に移行するためのインストール手順』
- 2 ページの『サポートされる移行機能および関数』
- 4 ページの『DataJoiner の移行の制約事項』
- 12 ページの『DB2 バージョン 7 フェデレーテッド・システムの移行の制約事項』

関連タスク:

- 26 ページの『DB2 Information Integrator への移行の準備をする』

サポートされる移行機能および関数

DB2[®] ファミリーのデータ・ソース、Informix[®] データ・ソース、または OLE DB データ・ソースだけにアクセスする場合、DB2 Information Integrator をインストールする必要はありません。DB2 Enterprise Server Edition に移行してインストールすれば、これらのデータ・ソースにアクセスできるようになります。

DB2 Information Integrator バージョン 8.2 は、以下の製品からの移行をサポートします。

- DB2 DataJoiner[®] バージョン 2.1.1。
- DB2 Universal Database[™] (Linux 版、UNIX[®] 版、Windows[®] 版) バージョン 7 のフェデレーテッド・システム。移行サポートは、DB2 Relational Connect または DB2 Life Science Data Connect を使用するフェデレーテッド・システムも対象です。

DB2 DataJoiner および DB2 Universal Database (Linux 版、UNIX 版、Windows 版) バージョン 7 のフェデレーテッド・システムでサポートされる機能および関数は、特に注記されない限り、DB2 Information Integrator でもサポートされます。

また、バックアップおよびリストア・ユーティリティーを使用してシステムを移行することもできます。DB2 Universal Database のバックアップおよびリストア・ユーティリティーを使用すれば、アーキテクチャーやオペレーティング・システムが異なるシステムでもデータベースのリストアが可能です。バックアップとリストアによる方法は、移動元の 32 ビット DataJoiner バージョン 2.1.1 データベースと移動先の 64 ビット バージョン 8 データベースが、AIX[®] と Solaris オペレーティング環境のどのような組み合わせであっても可能です。

サポートされるデータ・ソース

DB2 DataJoiner、DB2 UDB バージョン 7、および DB2 Information Integrator でサポートされるデータ・ソースを以下の表に示します。

表 1. DB2 DataJoiner、DB2 UDB バージョン 7、および DB2 Information Integrator でサポートされるデータ・ソース

データ・ソース	DB2 DataJoiner	DB2 UDB バージョン 7	DB2 Information Integrator バージョン 8
DB2 Universal Database for Linux、UNIX、Windows	✓	✓	✓

表 1. DB2 DataJoiner、DB2 UDB バージョン 7、および DB2 Information Integrator でサポートされるデータ・ソース (続き)

データ・ソース	DB2 DataJoiner	DB2 UDB バージョン 7	DB2 Information Integrator バージョン 8
DB2 Universal Database for z/OS™ and OS/390®	✓	✓	✓
DB2 Universal Database for iSeries™	✓	✓	✓
DB2 Server for VM and VSE	✓	✓	✓
Informix	✓	✓	✓
ODBC	✓		✓
OLE DB		✓	✓
Oracle	✓	✓	✓
Oracle RDB	✓		
Microsoft® SQL Server	✓	✓	✓
Sybase	✓	✓	✓
Sybase SQL Anywhere	✓		
Teradata	✓		✓
BLAST		✓	✓
Documentum		✓	✓
Entrez			✓
Excel ファイル		✓	✓
HMMER			✓
IBM® Lotus® Extended Search			✓
KEGG ユーザー定義関数 (UDF)			✓
表構造ファイル		✓	✓
WBI			✓
Web サービス			✓
XML			✓

移行されたオブジェクト

インスタンスおよびデータベースが DB2 Information Integrator に移行される時、DB2 Information Integrator バージョン 8 フェデレーテッド・システムで正しく稼働するよう、一部のオブジェクトが更新されます。この更新には、クライアント・ライブラリーおよびファイル・パスの変更が含まれます。

インスタンスおよびデータベースが移行される時、以下のオブジェクトが移行されます。

- ラッパー定義
- サーバー定義
- ニックネーム

例外: ストアード・プロシージャ・ニックネームは DB2 Information Integrator バージョン 8.2 でサポートされないため、移行されません。

- 表
- ユーザー・マッピング
- ビュー

例外: WITH CHECK OPTION 文節を使用してニックネームから作成されたローカル・ビューは、移行後は作動不能になります。この構文はサポートされなくなりました。

- スキーマ名
- 列名
- 索引名
- データ・タイプ・マッピング

例外: DB2 Information Integrator でサポートされないデータ・タイプは、サポートされている別のデータ・タイプにマップされます。

- パッケージ名
- ユーザー定義関数
- 関数マッピング

例外: DB2 DataJoiner から移行するとき、DB2 SYSIBM または SYSFUN 関数をリモート関数にマップする関数マッピングは移行されません。

注: DB2 Information Integrator リレーショナル・ラッパーは、デフォルトの関数マッピングのセットを使用して、DB2 SYSIBM および SYSFUN 関数をリモート関数にマップします。

関連概念:

- 4 ページの『DataJoiner の移行の制約事項』
- 12 ページの『DB2 バージョン 7 フェデレーテッド・システムの移行の制約事項』

関連資料:

- 77 ページの『DataJoiner の用語およびそれに相当する DB2 Information Integrator の用語』

DataJoiner の移行の制約事項

このセクションには、移行の制約事項に関する以下のトピックが含まれます。

- 5 ページの『サポートされる DataJoiner のバージョン』
- 5 ページの『DataJoiner Classic Connect データ・ソース』
- 5 ページの『DB2 UDB ランタイム・クライアントのサポート』
- 5 ページの『ストアード・プロシージャ』
- 6 ページの『2 フェーズ・コミット・トランザクション』
- 6 ページの『LONG データ・タイプ』
- 8 ページの『レプリケーションの制約事項』
- 8 ページの『ニックネーム』
- 9 ページの『無効なデータ・タイプ・マッピング』

- 9 ページの『無効なサーバー・オプション』
- 9 ページの『データベース・パス・ロケーション』
- 10 ページの『Microsoft SQL Server データ・ソース』
- 10 ページの『Sybase サーバーのオプション』
- 10 ページの『抽象データ・タイプおよび拡張索引』
- 10 ページの『空間データ』
- 11 ページの『コード・ページ・サポート』
- 11 ページの『SQL DDL 構文の変更点』

サポートされる DataJoiner のバージョン

DB2[®] Information Integrator は、以下の製品からの移行をサポートします。

- DataJoiner[®] for AIX[®] バージョン 2.1.1
- DataJoiner for Solaris Operating Environment バージョン 2.1.1
- DataJoiner Windows[®] NT バージョン 2.1.1

DB2 DataJoiner バージョン 1.2 またはバージョン 2.1 をご使用の場合は、DB2 Information Integrator に移行する前に、DB2 DataJoiner バージョン 2.1.1 にアップグレードする必要があります。

DataJoiner Classic Connect データ・ソース

DB2 Information Integrator は、DataJoiner Classic Connect データ・ソース (IMS[™]、VSAM など) へのアクセスをサポートしません。ただし、DB2 Information Integrator Classic Federation for z/OS[™] を使用してこれらのデータ・ソースにアクセスすることができます。DB2 II Classic Federation for z/OS を使ったデータ・ソースへのアクセスについての詳細は、「*DB2 Information Integrator Classic Federation for z/OS Getting Started Guide*」を参照してください。

DB2 UDB ランタイム・クライアントのサポート

DataJoiner は、DB2 UDB バージョン 8 ランタイム・クライアントまたはサーバーからの接続をサポートしません。DataJoiner から DB2 UDB バージョン 7 ランタイム・クライアントまたはサーバーに接続する場合には、DB2 UDB バージョン 7 ランタイム・クライアントおよびサーバーを DB2 UDB バージョン 8 に移行する前に、DataJoiner を DB2 Information Integrator 8 に移行する必要があります。

ストアド・プロシージャ

ストアド・プロシージャをニックネームで呼び出すアプリケーションを DB2 DataJoiner から移行する場合は、アプリケーションを変更する必要があります。DB2 Information Integrator は、ストアド・プロシージャをニックネームで呼び出す機能を現在サポートしていません。

2 フェーズ・コミット・トランザクション

2 フェーズ・コミット・トランザクションを必要とするアプリケーションを DB2 DataJoiner から移行する場合は、アプリケーションを変更する必要があります。DB2 Information Integrator は、1 フェーズ・コミットのトランザクションのみをサポートします。

LONG データ・タイプ

DB2 Information Integrator では、LONG データ・タイプは現在サポートされていません。LONG データ・タイプを持つデータ・ソースは、デフォルトで DB2 UDB LOB データ・タイプ (CLOB、DBCLOB、および BLOB) にマップされます。

LONG データ・タイプ情報が DB2 Information Integrator に移行されると、フェデレーテッド・データベース・システム・カタログのローカル列データ・タイプが変更されます。

以下は、共通データ・タイプ・マッピング変更の例を示しています。

- LONG VARCHAR 列のローカル列データ・タイプは、CLOB データ・タイプに変換されます。
- LONG VARCHAR 列のローカル列データ・タイプは、DBCLOB データ・タイプに変換されます。
- LONG VARCHAR FOR BIT DATA 列のローカル列データ・タイプは、BLOB データ・タイプに変換されます。

LONG データ・タイプに対して挿入、更新、または削除操作を実行するアプリケーションは、DB2 Information Integrator に移行するとエラーを戻すことがあります。ローカル列データ・タイプは LOB データ・タイプに変換されますが、リモート・タイプが LOB で、LONG ではない場合、現在のところ Oracle Net8 ラッパーだけがこれらの列に対する書き込み操作を実行できます。

このようなローカル LOB データ・タイプに対して挿入、更新、または削除操作を行う必要がある場合には、データのサイズ、およびアクセスするデータ・ソースに応じて、これらの LOB データ・タイプを VARCHAR データ・タイプに変更することができます。

Oracle 表内の LONG データ・タイプへのアクセス

DataJoiner では、リモート・データ・ソースに表を作成できます。DB2 DataJoiner を使ってリモート表を作成すると、その表のニックネームも作成されます。この機能は DB2 Information Integrator でも使用可能で、透過 DDL と呼ばれます。

DB2 Information Integrator では、Oracle NET8 ラッパーが LOB 列に対する読み取りおよび書き込み操作をサポートします。ただし、DB2 Information Integrator に移行した後、LONG データ・タイプ列は読み取り専用になります。LONG 列に対する挿入、更新、および削除操作を実行したい場合には、Oracle ユーティリティを使用してリモート列データ・タイプを LOB に変更した後、ニックネームを再作成してください。

DataJoiner では、以下のデータ・タイプ・マッピングを適用できます。

以下の DB2 データ・タイプが Oracle LONG RAW データ・タイプにマップされます。

- VARCHAR([256-4000]) FOR BIT DATA
- LONG VARCHAR FOR BIT DATA
- BLOB

以下の DB2 データ・タイプが Oracle LONG データ・タイプにマップされます。

- VARCHAR([2001-4000])
- CLOB
- LONG VARCHAR

DB2 Information Integrator に移行すると、カタログ内のローカル列データ・タイプが変更されます。LONG VARCHAR 列のローカル列データ・タイプは、CLOB データ・タイプに変換されます。LONG VARCHAR FOR BIT DATA 列のローカル列データ・タイプは、BLOB データ・タイプに変換されます。リモート列は変更されません。

ラージ・オブジェクト (LOB) データ・タイプ

LOB データ・タイプにアクセスするアプリケーションには、以下の制約事項が適用されます。

LOB への読み取りおよび書き込み操作: サポートされているデータ・ソースの LOB データ・タイプ列に対して、すべてのリレーショナル・ラッパーを使用して、読み取り操作を実行できます。

Oracle データ・ソースの LOB データ・タイプ列に対しては、Oracle NET8 ラッパーだけを使用して、読み取りおよび書き込み操作を実行できます。

Oracle NET8 ラッパーを除いて、DB2 Information Integrator は、LOB データ・タイプ列に対する書き込み操作を現在サポートしていません。DB2 Information Integrator に移行した場合、アプリケーションが他のラッパーを使用して LOB データ・タイプ列に対して挿入、更新、または削除操作を実行すると、エラーが戻されます。

ローカル LOB データ・タイプ列に対して挿入、更新、または削除操作を行う必要がある場合には、データのサイズ、およびアクセスするデータ・ソースに応じて、これらの列のデータ・タイプを VARCHAR データ・タイプに変更することができます。

DB2 UDB (UNIX 版、Windows 版、z/OS 版) バージョン 7 データ・ソースの LOB 列へのアクセス: DB2 DataJoiner では、DB2RA プロトコルを使用することによって、DB2 Universal Database™ (UNIX® 版、Windows 版、z/OS 版) バージョン 7 データ・ソースの LOB 列に対して読み取りおよび書き込み操作を実行できました。DB2 Information Integrator は DB2RA プロトコルをサポートしません。DB2 Information Integrator は DRDA® プロトコルを使用します。DRDA プロトコルは、DB2 Universal Database (UNIX 版、Windows 版、z/OS 版) バージョン 7 データ・ソースにアクセスするときに、LOB データ・タイプをサポートしません。

DB2 Information Integrator に移行済みの DB2 DataJoiner アプリケーションが、DB2RA プロトコルを使用して DB2 Universal Database (UNIX 版、Windows 版、z/OS 版) バージョン 7 データ・ソースの LOB 列に対して操作を実行すると、エラーが戻されます。

レプリケーションの制約事項

DataJoiner でデータを複製するとき、以下の制約事項があります。

LONG および LOB データ・タイプのレプリケーション

LONG データ・タイプ情報が DB2 Information Integrator に移行されると、フェデレーテッド・データベース・システム・カタログのローカル列データ・タイプが、デフォルトで DB2 LOB データ・タイプ (CLOB、DBCLOB、および BLOB) に変更されます。ニックネームの列データ・タイプが LONG データ・タイプから DB2 LOB データ・タイプに変更された後には、DB2 レプリケーションによって LOB データを複製できません。

移行プロセスで LOB データ・タイプに変換されるローカル LONG データ・タイプを現在複製している場合には、DB2 Information Integrator への移行後に、ローカル LOB データ・タイプ列を VARCHAR データ・タイプ列に変換することができます。列タイプを VARCHAR データ・タイプに変更すれば、これらの列に対する挿入、更新、および削除の特権が DB2 レプリケーションに与えられ、これらの列の値を複製することができます。

DataJoiner システム・カタログのローカル列データ・タイプを検査することにより、ターゲット・データベース・オブジェクトのニックネームに LONG または LOB データ・タイプ列があるかどうかを判別できます。

DBLIB ラッパーを使用したレプリケーション

DB2 Information Integrator では、DBLIB ラッパーは読み取り専用です。DataJoiner でレプリケーションに DBLIB ラッパーを使用する場合は、DB2 Information Integrator に移行すると、データの複製ができなくなります。

DB2 Information Integrator に移行した後、Sybase データ・ソースにアクセスするには、DBLIB ラッパーではなく CTLIB ラッパーを使用してください。CTLIB ラッパーを構成するための適切な SQL ステートメントを実行する必要があります。

db2look コマンドを使用すると、正しい SQL ステートメントの生成に役立ちます。追加情報については、関連リンクを参照してください。

ニックネーム

DataJoiner バージョン 2.1.1 では、DB2 UDB 別名にニックネームを作成できました。DB2 Information Integrator バージョン 8 では、DB2 UDB 別名にニックネームを作成できません。

ニックネームを参照するトリガー

DataJoiner から移行するとき、ニックネームを参照する DataJoiner トリガーは DB2 Information Integrator に移行されません。これは、トリガー・アクションでニックネームを参照するようなトリガーが DB2 Information Integrator ではサポートされないためです。

無効なデータ・タイプ・マッピング

DataJoiner は、作成時にデータ・タイプ・マッピングが有効かどうかを判別するための検査を行いません。このため、無効なデータ・タイプ・マッピングを使用する透過 DDL ステートメントや照会は失敗します。ただし、タイプ・マッピングを使ってサーバー名を指定したり、既存のサーバー名に一致するサーバー・タイプを指定する場合には、マッピング作成時にデータ・タイプ・マッピングの有効性が検査されます。マッピングが無効であれば、DB2 Information Integrator がそのマッピングの作成を許可しないので、すぐに判別できます。

無効なデータ・タイプ・マッピングは、DB2 Information Integrator に移行する前に、DataJoiner でドロップしてください。

無効なサーバー・オプション

DataJoiner バージョン 2.1.1 では、すべてのラッパーのリモート・サーバーに関して DATEFORMAT、TIMEFORMAT、および TIMESTAMPFORMAT サーバー・オプションを使用できます。ただし、これらのオプションは、DB2 Information Integrator の ODBC ラッパーでのみサポートされます。ODBC ラッパー以外のラッパー用に作成されたリモート・サーバーでこれらのオプションが指定されている場合、移行する前に、これらをドロップする必要があります。ODBC ラッパーの場合、DB2 Information Integrator への移行後に、リモート・サーバーのこれらのサーバー・オプションをドロップできます。

データベース・パス・ロケーション

DataJoiner バージョン 2.1.1 データベースは、DB2 Information Integrator ではサポートされていないデータベース・パス規則を使用します。DataJoiner バージョン 2.1.1 パスは以下のとおりです。

```
user_specified_path/instance_name/SQLNNNNN
```

SQLNNNNN はデータベース・サブディレクトリーです。

DB2 Information Integrator のパス規則は以下のとおりです。

```
user_specified_path/instance_name/NODEXXXX/SQLNNNNN
```

NODEXXXX はノード番号、SQLNNNNN はデータベース・サブディレクトリーです。

すべての DataJoiner バージョン 2.1.1 データベースは、元のパスからこの新しいパスに再配置されます。データベース移行プロセス中に、データベースは自動的に再配置されます。データベース再配置は、以下のステップで構成されます。

1. データベース・トークンを新規データベース・パス・ディレクトリーに移動する。
2. 新規データベース・パス・ディレクトリーのデータベース項目をローカル・データベース・ディレクトリーにカタログする。
3. 元のデータベース・パス・ディレクトリーのデータベース項目をローカル・データベース・ディレクトリーから削除する。
4. ローカル・データベース・ディレクトリーに項目がない場合は、元のデータベース・パス・ディレクトリーからローカル・データベース・ディレクトリーを削除する。

Microsoft SQL Server データ・ソース

以下に、データ・アクセス・モジュールの命名規則、および Microsoft® SQL Server データ・ソース用にサポートされるドライバーを示します。

データ・アクセス・モジュール

DataJoiner for Windows では、Microsoft SQL Server のデータ・アクセス・モジュールのデフォルト名は `djxmssql` です。DataJoiner for UNIX では、Microsoft SQL Server のデータ・アクセス・モジュールのデフォルト名は `mssqlodbc` です。また、DataJoiner for UNIX には、DataDirect SequeLink ODBC ドライバーを使用する Microsoft SQL Server のデータ・アクセス・モジュールも含まれます。そのデータ・アクセス・モジュールの名前は `djxsqlnk` です。

`djxmssql`、`mssqlodbc`、および `djxsqlnk` データ・アクセス・モジュールを DataJoiner から DB2 Information Integrator に移行すると、これらの名前は `DJXMSSQL3` に変更されます。名前は変わっても、ラッパーは正しいライブラリーにリンクし、適正に機能します。

DB2 Information Integrator は、`DJXMSSQL3` および `MSSQLODBC3` の 2 つのデフォルト・ラッパー名をサポートしています。デフォルト・ラッパー名には、特定のオペレーティング・システムとの関連付けはなくなりました。Microsoft SQL Server ラッパーを作成したときには、どちらのデフォルト・ラッパー名でも使用できます。DB2 Information Integrator は、使用しているオペレーティング・システムを判別し、そのオペレーティング・システムに適したラッパー・ライブラリー・ファイルを作成します。

Microsoft SQL Server 用にラッパーを作成する場合は、デフォルト・ラッパー名 `MSSQLODBC3` を使用してください。デフォルト・ラッパー名 `DJXMSSQL3` は、DataJoiner からの移行をサポートするためだけに提供されています。

DataDirect SequeLink ODBC ドライバー

DataDirect SequeLink ODBC ドライバーは、DB2 Information Integrator ではサポートされていません。UNIX オペレーティング・システムの場合、DataDirect Technologies Connect ODBC Version 3.7 以降のドライバーを使用する必要があります。

Sybase サーバーのオプション

DB2 Information Integrator は、Sybase サーバー・オプションである `APPLY_BUFFER_SIZE` および `APPLY_PACKET_SIZE` をサポートしません。

抽象データ・タイプおよび拡張索引

抽象データ・タイプまたは拡張索引を含む DataJoiner データベース (DB2 Spatial Extender データを含むデータベースなど) は移行できません。抽象データ・タイプまたは拡張索引は、データベースを移行する前に削除する必要があります。

空間データ

DataJoiner データベースに空間データが含まれている場合は、すべての非空間データとは別個にこれらを移行する必要があります。

DB2 Information Integrator に移行する前に、以下の作業が必要になります。

- 空間データを SDE 転送ファイルに手動でエクスポートする。
- 空間データ列を含む表をドロップする。
- 空間データを参照するすべてのカタログ表を除去するために、`disable_db` ストアード・プロシージャを実行する。

非空間データの移行が完了した後で、以下の作業を行う必要があります。

- 処理する DB2 Spatial Extender データベースを使用可能にする。
- 地理情報をフェデレーテッド・データベースにインポートする。

このトピックの最後にある関連作業では、特定のステップを示しています。

前のバージョンの DB2 Spatial Extender でデータのエクスポートおよびインポートに使用されていたコマンドは変更されています。データをインポートおよびエクスポートする場合、必ず現行のコマンドを使用してください。現行の構文は、「*DB2 Spatial Extender* バージョン 8 ユーザーズ・ガイド」に説明されています。

コード・ページ・サポート

DB2 Universal Database for Linux, UNIX, Windows のコード・ページ・サポートは、DataJoiner のコード・ページ・サポートとは異なる場合があります。DB2 Universal Database for Linux, UNIX, Windows のコード・ページ・サポートは、『サポートされる DB2 インターフェース言語、ロケール、およびコード・ページ』のトピックで説明しています。

SQL DDL 構文の変更点

DataJoiner でサポートされている SQL DDL ステートメントおよび構文の一部は、DB2 Universal Database for Linux, UNIX, Windows バージョン 8 では異なっています。例えば、

- CREATE VIEW ステートメントの WITH CHECK OPTION 文節はもはやサポートされません。
- CREATE TYPE MAPPING ステートメントでは、CHAR データ・タイプで長さを指定しない場合、CHAR(1) と同等になります (1 は CHAR データ・タイプのデフォルトの長さ)。

DB2 Universal Database バージョン 8 でサポートされる SQL ステートメントは、「*IBM DB2 Universal Database: SQL* リファレンス」に記載されています。

関連概念:

- 「*IBM DB2 Spatial Extender and Geodetic Extender* ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス」の『地理情報データのインポートとエクスポートについて』

関連タスク:

- 56 ページの『DB2 Information Integrator への移行後のラージ・オブジェクト・データ・タイプに対する書き込み操作の許可』
- 49 ページの『DB2 Information Integrator に移行後の作業』
- 「*IBM DB2 Spatial Extender and Geodetic Extender* ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス」の『SDE 転送データを新規の表または既存の表にインポートする』

- 「IBM DB2 Spatial Extender and Geodetic Extender ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス」の『データを SDE 転送ファイルにエクスポートする』

関連資料:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『サポートされる DB2 インターフェース言語』

DB2 バージョン 7 フェデレーテッド・システムの移行の制約事項

このトピックでは、UNIX® および Windows® オペレーティング・システムの DB2® Universal Database バージョン 7 のフェデレーテッド・システムを DB2 Information Integrator に移行する場合の制約事項について説明します。

サポートされる DB2 Universal Database のバージョン

DB2 Information Integrator は、UNIX および Windows オペレーティング・システムでの DB2 Universal Database バージョン 7.1 およびバージョン 7.2 からのフェデレーテッド・システムの移行をサポートします。

Sybase サーバーのオプション

DB2 Information Integrator は、Sybase サーバー・オプションである APPLY_BUFFER_SIZE および APPLY_PACKET_SIZE をサポートしません。

LONG データ・タイプ

LONG データ・タイプは、DB2 Information Integrator ではサポートされていません。LONG データ・タイプを持つデータ・ソースは、デフォルトで DB2 LOB データ・タイプ (CLOB、DBCLOB、および BLOB) にマップされます。

LONG データ・タイプ情報が DB2 Information Integrator に移行されると、フェデレーテッド・データベース・システム・カタログのローカル列データ・タイプが変更されます。

- LONG VARCHAR 列のローカル列データ・タイプは、CLOB データ・タイプに変換されます。
- LONG VARCHAR 列のローカル列データ・タイプは、DBCLOB データ・タイプに変換されます。
- LONG VARCHAR FOR BIT DATA 列のローカル列データ・タイプは、BLOB データ・タイプに変換されます。

LONG データ・タイプに対して挿入、更新、または削除操作を実行するアプリケーションは、DB2 Information Integrator に移行するとエラーを戻すことがあります。ローカル列データ・タイプは LOB データ・タイプに変換されますが、Oracle NET8 ラッパーだけがリモート Oracle LOB データ・タイプ列に対する書き込み操作を実行できます。

ローカル LOB データ・タイプに対して挿入、更新、または削除操作を行う必要がある場合には、データのサイズ、およびアクセスするデータ・ソースに応じて、これらの LOB データ・タイプを VARCHAR データ・タイプに変更することができます。

関連タスク:

- 56 ページの『DB2 Information Integrator への移行後のラージ・オブジェクト・データ・タイプに対する書き込み操作の許可』

第 2 章 移行の考慮事項

DB2 Information Integrator に移行する前に、移行の制約事項と要件を理解しておく必要があります。

この章には、以下のトピックがあります。

- 『移行の制約事項』
- 16 ページの 『移行に関する推奨事項』
- 18 ページの 『移行スペースに関する推奨事項』
- 20 ページの 『逆移行の制約事項』

移行の制約事項

DB2 UDB バージョン 8 に移行する前に、以下の制約事項に注意してください。

- 移行は以下のものからのみサポートされます。
 - DB2 UDB バージョン 6.x またはバージョン 7.x。(バージョン 6.x およびバージョン 7.x でサポートされているすべてのプラットフォーム。Linux はバージョン 6 フィックスパック 2 でなければなりません。)
 - DB2 DataJoiner V2.1.1 (32 ビット) (AIX、Windows NT、および Solaris オペレーティング環境)
- DB2 UDB バージョン 8 クライアントから **migrate database** コマンドを発行して、データベースを DB2 バージョン 8 サーバーに移行することができます。ただし、DB2 UDB バージョン 6 またはバージョン 7 クライアントから移行コマンドを発行して、データベースを DB2 UDB バージョン 8 サーバーに移行することはできません。
- DB2 DataJoiner V2.1.1 から移行する場合は、IBM 以外のデータ・ソースをサポートするために DB2 Information Integrator が必要です。
- プラットフォーム間の移行はサポートされていません。例えば、Windows 上の DB2 サーバーから UNIX 上の DB2 サーバーへデータベースを移行することはできません。
- 複数のコンピューターを持つパーティション・データベース・システムを移行する場合、データベースの移行は、すべての参加コンピューター上に DB2 UDB バージョン 8 をインストールした後に実行する必要があります。すべての DB2 移行コマンドを、各参加コンピューターで実行することが必要です。
- Windows では、1 つのコンピューターにインストールできる DB2 UDB のバージョンは 1 つだけです。例えば、すでに DB2 UDB バージョン 7 がインストールされているところに DB2 UDB バージョン 8 をインストールすると、インストール中に DB2 UDB バージョン 7 は除去されます。Windows オペレーティング・システム上での DB2 のインストール中に、すべてのインスタンスが移行されます。

- ご使用のデータベース内のユーザー・オブジェクトは、DB2 UDB バージョン 8 の予約スキーマ名をオブジェクト修飾子として持つことはできません。これらの予約スキーマ名には SYSCAT、SYSSTAT、および SYSFUN があります。
- 名前 BIGINT、REAL、DATALINK、または REFERENCE を使用するユーザー定義特殊タイプは、データベースを移行する前に名前変更する必要があります。
- 以下のいずれかの状態にあるデータベースは、移行することができません。
 - バックアップ・ペンディング中
 - ロールフォワード・ペンディング中
 - 1 つ以上の表スペースが異常状態
 - トランザクション不整合
- バックレベル (DB2 バージョン 6.x またはバージョン 7.x) のデータベース・バックアップのリストアがサポートされていますが、バックレベル・ログのロールフォワードはサポートされていません。
- データベース・バックアップ時刻と DB2 UDB バージョン 8 移行の完了時刻との間に実行されたデータベース・トランザクションは、リカバリー不能です。

関連概念:

- 4 ページの『DataJoiner の移行の制約事項』
- 12 ページの『DB2 バージョン 7 フェデレーテッド・システムの移行の制約事項』

関連資料:

- 20 ページの『逆移行の制約事項』

移行に関する推奨事項

データベース移行を計画する際には、以下の推奨事項を考慮してください。

DB2[®] UDB がレプリケーションを使用する場合は、移行の前にログ・ファイルをバックアップする

DataJoiner[®] および DB2 UDB データのレプリケーションを使用する場合には、移行の前に、すべての DB2 ログ・ファイルをアーカイブする必要があります。

DB2 レプリケーション環境に関する完全な情報は、<http://www.ibm.com/software/data/integration/db2ii/support.html> の、「IBM[®] DB2 Information Integrator Migration Guide (IBM[®] DB2 Information Integrator マイグレーション・ガイド)」を参照してください。

DataJoiner インスタンスの移行

DB2 レプリケーション用のキャプチャーまたはアプライ・プログラムを実行している DataJoiner または DB2 UDB のインスタンスを移行する場合は、このインスタンスを移行する前に、レプリケーション環境の移行の準備を行う必要があります。

DB2 レプリケーション環境に関する完全な情報は、<http://www.ibm.com/software/data/integration/db2ii/support.html> の、「IBM DB2 Information Integrator Migration Guide (IBM DB2 Information Integrator マイグレーション・ガイド)」を参照してください。

ハードウェアおよびオペレーティング・システムのアップグレードは、DB2 UDBの移行とは別個に行う

ハードウェアおよびオペレーティング・システムのアップグレードを DB2 の移行とは別個に実行することで、移行時に問題が生じた場合の問題判別を単純化できます。DB2 の移行に先立ってソフトウェアまたはハードウェアをアップグレードする場合は、DB2 の移行を試行する前に、ご使用のシステムが正常に作動することを確認してください。

詳細デッドロック・イベント・モニターのドロップ

データベースが作成されると同時に、詳細デッドロック・イベント・モニターも作成されます。他のモニターと同様に、このイベント・モニターにも関連したオーバーヘッドがあります。詳細デッドロック・イベント・モニターを必要としない場合は、以下のコマンドを使用してイベント・モニターをドロップできます。

```
DROP EVENT MONITOR db2detaildeadlock
```

このイベント・モニターが消費するディスク・スペースの量を制限するために、出力ファイルの最大数に達すると、イベント・モニターが非アクティブになり、メッセージが管理通知ログに書き込まれます。必要のない出力ファイルを除去すると、イベント・モニターは次のデータベースの活動化時にアクティブになります。

バックレベルのサーバーのサポート

環境を DB2 バージョン 7 から DB2 バージョン 8 に変更するさい、すべての DB2 サーバーをバージョン 8 に移行する前に DB2 クライアントをバージョン 8 に移行する場合は、制約と制限がいくつかあります。既知の制約事項と制限事項を回避するために、すべての DB2 サーバーをバージョン 8 に移行してから、DB2 クライアントをバージョン 8 に移行してください。これらの制約と制限は DB2 Connect™ には関連しません。また、zSeries®、OS/390®、または iSeries™ データベース・サーバーにも関連しません。

ベンチマーク DB2 パフォーマンス

DB2 を移行する前に、いくつかのテスト照会を実行し、照会が実行されたときの正確な環境条件を記録してください。また、それぞれのテスト照会ごとの **db2expln** コマンド出力の記録を保存しておき、移行前後の結果を比較してください。このことは、性能低下を識別し修正するのに役立ちます。

移行をバックアウトするプランの考案

移行を逆行させるためのユーティリティーはありません。移行をバックアウトする必要がある場合には、システムから DB2 バージョン 8 コードを除去し、以前のバージョンの DB2 を再インストールして、バックレベルのインスタンスを再作成し、データベース・バックアップをリストアする必要があります。移行をバックアウトする必要がある場合には、現行のデータベース・バックアップおよびデータベースとデータベース構成設定値の明細レコードが不可欠です。

DB2 DataPropagator™ レプリケーションでの移行

DB2 DataPropagator 用のキャプチャーまたはアプライ・プログラムを実行している DataJoiner または DB2 UDB のインスタンスを移行する前に、DB2 DataPropagator バージョン 8 用の移行に関する資料をお読みください

い。DB2 または DataJoiner インスタンスを移行する前に、複製環境の移行の準備を行う必要があります。DB2 または DataJoiner インスタンスの移行後に直ちに実行しなければならない特定のタスクもあります。DB2 DataPropagator バージョン 8 用の移行に関する資料は、<http://www.ibm.com/software/data/dpropr/library.html> の Web サイトにあります。

関連概念:

- 「管理ガイド: パフォーマンス」の『ベンチマーク・テスト』
- 「管理ガイド: パフォーマンス」の『Explain ツール』

関連タスク:

- 34 ページの『DB2 UDB の移行 (Windows)』
- 36 ページの『DB2 UDB サーバーの移行 (UNIX)』

関連資料:

- 「管理ガイド: プランニング」の『DB2 Universal Database で計画されている非互換性』
- 「管理ガイド: プランニング」の『バージョン 8 と以前のリリースとの非互換性』
- 「管理ガイド: プランニング」の『バージョン 7 と以前のリリースとの非互換性』

移行スペースに関する推奨事項

このトピックは、DB2 移行のディスク・スペースの推奨事項についての情報を提供します。

表スペース

移行するデータベースのために十分な表スペースがあることを確認してください。移行中、新旧両方のデータベース・カタログのためのシステム・カタログ表スペースが必要です。必要なスペースの量は、データベースの複雑さ、およびデータベース・オブジェクトの数とサイズによって異なります。

システム・カタログ表スペース (SYSCATSPACE)

現在占めているスペースの 2 倍をお勧めします。

TEMPORARY 表スペース (TEMPSPACE1 はデフォルト名)

システム・カタログ表スペースの 2 倍をお勧めします。

以下のコマンドを使用して、表スペースのサイズを調べることができます。

```
db2 list database directory
db2 connect to database_alias
db2 list tablespaces show detail
```

システム・カタログ表スペースの場合、フリー・ページは使用ページと等しいかまたはそれより大きくなければなりません。TEMPORARY 表スペースの合計ページは、システム・カタログ表スペースの合計ページ量の 2 倍でなければなりません。コンテナーを追加することによって、DMS (データベース管理スペース) 表スペースに対するスペースの量を増やすことができます。

ログ・ファイル・スペース

移行プロセスでは、単一トランザクション中にデータベースに多数の変更が加えられます。これらの変更には、このトランザクションを含む適切なログ・スペースが必要です。ログ・スペースが不適切な場合は、このトランザクションはロールバックされ、移行は正常に完了しません。ログ・ファイル・スペースがなくならないようにするには、logfilsiz、logprimary、および logsecond のデータベース構成値を 2 倍にすることを考慮する必要があります。

インスタンスをバージョン 8.2 に移行する前に、これらのデータベース構成値を更新しなければなりません。データベースの移行を試行する前に、これらのデータベース構成パラメーターを更新することはできません。しかし、ログ・ファイル・スペースが足りずにデータベースの移行が失敗した場合は、logfilsiz、logprimary、および logsecond データベース構成パラメーターの設定値を大きくしてから、データベース移行コマンドを再発行することができます。移行の完了後にこれらの設定をリセットできます。

DataJoiner

DataJoiner からデータを移行する際には、必要なログ・ファイル・スペースは、移行しようとしているデータベースのサイズに応じて異なります。すべてのログ・ファイルの合計サイズは、データベース・バックアップ・ファイルのサイズの 2 倍である必要があります。以下の公式を使用して、DataJoiner システム上のログ・ファイル・スペースが十分かどうかを判別してください。

$$4096 \times \text{logfilsiz} \times (\text{logprimary} + \text{logsecond}) > 2 \times (\text{DataJoiner データベース・バックアップ・ファイルのサイズ})$$

4096 はログ・ファイルのページ・サイズです。logfilsiz、logprimary、および logsecond はデータベース構成パラメーターです。

例えば、DataJoiner データベースのバックアップ・ファイル・サイズが 117.5 MB の場合は、すべてのログ・ファイルの合計サイズは $2 \times 117.5 = 235$ MB である必要があります。

logfilsiz が 5000 に設定されており、DataJoiner データベースに 6 つの logprimary ファイルと 4 つの logsecond ファイルがある場合は、すべてのログ・ファイルのサイズは以下ようになります。

$$(4096 \times 5000 \times (6 + 4)) = 204.8 \text{ MB}$$

すべてのログ・ファイルの合計ファイル・サイズが DataJoiner データベースのバックアップ・ファイル・サイズの 2 倍未満なので、移行は失敗します。

移行の前に、logfilsiz ログ・ファイル・サイズを大きくするか、追加のログ・ファイルを作成すると、この失敗が起きないようにすることができます。これらの変更は、インスタンスを移行する前に行う必要があります。

関連タスク:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『DMS 表スペースへのコンテナの追加』
- 34 ページの『DB2 UDB の移行 (Windows)』

逆移行の制約事項

DB2 UDB バージョン 8 フィックスパック 1 以降、1 つのデータベースでサポートされる表スペースの最大数が 4096 から 32768 に増えました。

ほとんどの場合、データベースを DB2 UDB バージョン 8 から DB2 UDB バージョン 8 フィックスパック 1 に移動しても大きな変更点に気付くことはなく、新しい表スペース制限を使用するための特別な操作も必要ありません。

DB2 UDB バージョン 8 フィックスパック 1 (またはそれ以降の DB2 UDB バージョン 8 フィックスパック) から DB2 UDB バージョン 8 レベルにデータベースを戻す場合には、それに関連した以下の制約事項に注意してください。

- DB2 バージョン 8.2 から DB2 バージョン 8.1 に戻す場合は、DB2 バージョン 8.1 に戻す前に **db2demigdbd** コマンドを実行する必要があります。

db2demigdbd は、データベース・ディレクトリー・ファイル逆移行ツールの一種で、データベース・ディレクトリーをバージョン 8.1 の形式に復元します。

- 4096 より大きい表スペース ID を含むデータベースを、DB2 バージョン 8 フィックスパック 1 以降から DB2 バージョン 8 に移動することは、サポートされていません。これを行おうとすると、正常に動作せず、稼働が不適切になります。

- 4096 より大きい表スペース ID を含むデータベース・イメージを、DB2 バージョン 8 で復元することはサポートされていません。これを行おうとすると、正常に動作せず、稼働が不適切になります。

- DB2 UDB バージョン 8 フィックスパック 1 (またはそれ以降の DB2 UDB バージョン 8 フィックスパック) から DB2 UDB バージョン 8 に戻すと、DB2TSCHG.HIS ファイルを除去するまで、ログ・スキップ機能は使用不可になります。

関連概念:

- 16 ページの『移行に関する推奨事項』

関連タスク:

- 44 ページの『データベースの移行』
- 34 ページの『DB2 UDB の移行 (Windows)』
- 36 ページの『DB2 UDB サーバーの移行 (UNIX)』

関連資料:

- 15 ページの『移行の制約事項』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2demigdbd - Demigrate Database Directory Files コマンド』

第 3 章 移行の前に

DB2 Information Integrator バージョン 8.2 に移行する前に、いくつかの作業を行う必要があります。一部の作業は、どの移行においても必要とされます。データ・ソースまたはオペレーティング・システムに固有の作業もあります。

この章には、以下のトピックがあります。

- 『DB2 の移行の前のデータベースのバックアップ』
- 22 ページの 『DB2 の移行前のシステム構成設定の記録』
- 23 ページの 『移行前のデータベース情報の記録』
- 24 ページの 『移行前のインスタンス情報の記録』
- 25 ページの 『DB2 移行前の診断エラー・レベルの変更』
- 25 ページの 『DB2 レプリケーション使用時の DataJoiner サーバーの移行準備』
- 26 ページの 『DB2 Information Integrator への移行の準備をする』
- 28 ページの 『データベースが移行できる状態にあることの確認』
- 29 ページの 『移行のために DB2 UDB バージョン 6 または バージョン 7 サーバーをオフラインにする』

DB2 の移行の前のデータベースのバックアップ

移行プロセスを始動する前に、ご使用のデータベースのオフライン・バックアップを実行することをお勧めします。移行プロセス中にエラーが発生した場合には、リカバリーのためデータベース・バックアップが必要です。

このトピックでは、バックアップ・コマンドの構文を完全には示していません。

前提条件:

- データベースをバックアップするために、SYSADM、SYSCTRL、または SYSMANT 権限が必要です。
- データベースはカタログされていなければなりません。現在のインスタンスでカタログされているすべてのデータベースのリストを表示するには、以下のコマンドを入力します。

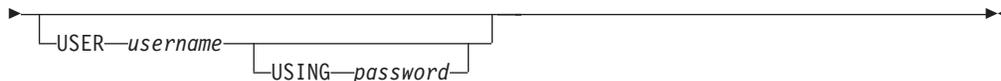
```
db2 list database directory
```

手順:

バックアップ・データベース・コマンドを入力して、ローカル・データベースのそれぞれをバックアップします。

BACKUP コマンド

```
▶▶—BACKUP—DATABASE—database-alias—▶▶  
          └──DB──┘
```



ここで、

DATABASE *database-alias*

バックアップするデータベースの別名を指定します。

USER *username*

データベースをその下にバックアップするユーザー名を指定します。

USING *password*

ユーザー名を認証するために使用するパスワードです。パスワードを省略した場合、それを入力するようプロンプトが出されます。

例えば、DB2 CLP プロンプトから以下のように入力します。

```
db2 backup database sample user pparker using auntmay
```

データベース別名は `sample`、ユーザー名は `pparker`、およびパスワードは `auntmay` です。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『システム管理権限 (SYSADM)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『BACKUP DATABASE コマンド』
- 18 ページの『移行スペースに関する推奨事項』

DB2 の移行前のシステム構成設定の記録

DB2 を移行する前に、データベースおよびデータベース・マネージャー構成の設定を記録しておくことをお勧めします。構成レコードを使用すれば、移行が成功したかどうか確認することができ、移行後に障害が生じた場合の問題判別にも役立ちます。

DB2 を移行した後、構成レコードを移行後の設定と比較して、設定が正常に移行されたことを確認するようお勧めします。

手順:

以下のようにして、システム構成設定を記録します。

1. ご使用のデータベース構成設定を記録します。

データベースの構成パラメーターは、パーティション・データベース・システム内のそれぞれのコンピューターで同じであるはずですが、そうでなければ、それぞれのパーティションのデータベース構成設定のコピーを保管してください。移行の前後の構成設定を比較して、移行が正常に実行されたかどうかを確認することができます。

データベース構成設定をリストするには、以下のコマンドを入力します。

```
db2 get database configuration for database_alias
```

ファイルとして保管するには、以下のコマンドを入力します。

```
db2 get database configuration for database_alias > c:%db_sample_cfg.txt
```

このタスクは、移行するそれぞれのデータベースごとに実行します。

2. ご使用のデータベース・マネージャー構成設定を記録します。データベース・マネージャー構成設定をリストするには、以下のコマンドを入力します。

```
db2 get database manager configuration
```

DB2 CLP ウィンドウからこの情報を切り貼りして、ファイルとして保管します。

3. 移行するそれぞれのデータベースごとに、表スペースを記録します。表スペースをリストするには、以下のコマンドを入力します。

```
db2 list tablespaces
```

4. 移行するそれぞれのデータベースごとに、パッケージのリストを記録します。パッケージのリストは、以下のコマンドを使用して検索することができます。

```
db2 list packages
```

5. DB2 バージョン 7 からの移行の場合は、DB2 プロファイル・レジストリー変数設定を記録する必要があります。必要な場合は、移行前に記録した情報を参照して、移行後に DB2 プロファイル・レジストリー変数設定の追加や変更を行います。

関連概念:

- ・ 「管理ガイド: パフォーマンス」の『構成パラメーター』

関連資料:

- ・ 「コマンド・リファレンス」の『GET DATABASE CONFIGURATION コマンド』
- ・ 「コマンド・リファレンス」の『GET DATABASE MANAGER CONFIGURATION コマンド』
- ・ 「コマンド・リファレンス」の『LIST PACKAGES/TABLES コマンド』
- ・ 「コマンド・リファレンス」の『LIST TABLESPACES コマンド』
- ・ 「管理ガイド: パフォーマンス」の『構成パラメーターのサマリー』

移行前のデータベース情報の記録

DB2 Information Integrator に移行する前に、データベース情報およびノード・ディレクトリー情報を記録する必要があります。

インスタンス移行で問題が発生した場合に必要なとされるデータベース情報を保存するには、以下のステップに従って作業してください。

手順:

データベース情報を記録するには、以下のようにします。

1. **list node directory** コマンドを発行します。

アクセスするデータベースのサーバー名をすべて記録します。さらに、ノード名、ホスト名、およびサービス名も記録します。

2. システム・データベース・ディレクトリーの内容をリストするために、 **list database directory** コマンドを発行します。

データベースの別名をすべて記録します。これらの名前は、リモート・サーバー上にあるアクセス対象のデータベースの別名です。

3. **list dcs directory** コマンドを発行します。

データベース接続サービス・ディレクトリーの内容を記録します。

4. 以下のいずれかのステートメントを発行します。

- DataJoiner から移行している場合には、以下の SQL ステートメントを発行します。

```
SELECT SERVER,  
       SERVER_TYPE,  
       NODE,  
       DBNAME  
FROM SYSCAT.SERVERS;
```

- DB2 UDB V7 または V8 から移行している場合には、以下のコマンドを発行します。

```
SELECT SERVERNAME,  
       SERVERTYPE,  
       OPTION,  
       SETTING  
FROM SYSCAT.SERVEROPTIONS  
WHERE OPTION IN ('NODE','DBNAME')  
ORDER BY SERVERNAME, OPTION;
```

カタログしたそれぞれの DB2 ファミリー・サーバー定義の、サーバー名、ノード名、およびデータベース別名を記録します。

関連タスク:

- 24 ページの『移行前のインスタンス情報の記録』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『LIST DATABASE DIRECTORY コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『LIST NODE DIRECTORY コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『LIST DCS DIRECTORY コマンド』

移行前のインスタンス情報の記録

DB2 Information Integrator に移行する前に、インスタンス情報を記録する必要があります。

インスタンス移行で問題が発生した場合に必要とされるインスタンス情報を保存するには、以下のステップに従って作業してください。

UNIX オペレーティング・システムでは、この作業を行うために root 許可が必要です。

手順:

インスタンス情報を記録するために、オペレーティング・システム・プロンプトで **db2ilist** コマンドを発行します。このコマンドは、システムで使用できるすべてのインスタンスをリストします。

関連タスク:

- 23 ページの『移行前のデータベース情報の記録』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2ilist - インスタンスのリスト・コマンド』

DB2 移行前の診断エラー・レベルの変更

移行アクティビティー中に、診断エラー・レベルを 4 に変更してください。診断エラー・レベル 4 は、すべてのエラー、警告、および通知メッセージを記録します。この情報は、移行上のエラーが生じた場合に、問題判別に使用することができます。diagpath 構成パラメーターは、diaglevel パラメーターの値に基づいて生成される、エラー・ファイル、イベント・ログ・ファイル (Windows のみ)、アラート・ログ・ファイル、およびダンプ・ファイルを入れるディレクトリーを指定します。

手順:

以下のようにして、DB2 移行前に診断エラー・レベルを変更します。

- 以下のコマンドを使用して、データベース・マネージャー構成ファイル内で診断エラー・レベルを設定します。

```
db2 update dbm configuration using diaglevel 4
```

- **db2stop** コマンドを入力します。
- **db2start** コマンドを入力します。

diagpath パラメーターは、以下のコマンドを使用して、データベース・マネージャー構成ファイル内で設定することができます。

```
db2 update dbm configuration using diagpath directory
```

directory は、ご使用のログ・ファイルを保管するためにユーザーが選択したロケーションを表します。

関連概念:

- 16 ページの『移行に関する推奨事項』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『UPDATE DATABASE CONFIGURATION コマンド』
- 15 ページの『移行の制約事項』

DB2 レプリケーション使用時の DataJoiner サーバーの移行準備

DB2 レプリケーションを使用している場合、移行のために DataJoiner サーバーを準備する必要があります。

DB2 レプリケーション環境の移行については、DB2 Information Integrator サポート Web ページの「*IBM DB2 Information Integrator 移行ガイド: SQL レプリケーションバージョン 8 への移行*」を参照してください。

関連タスク:

- 44 ページの『データベースの移行』
- 「*IBM DB2 Information Integrator SQL レプリケーション・ガイド*およびリファレンス」の『SQL レプリケーション環境の保守』

関連資料:

- 「*IBM DB2 Information Integrator SQL レプリケーション・ガイド*およびリファレンス」の『asnanalyze: アナライザーの操作』

DB2 Information Integrator への移行の準備をする

DB2 Information Integrator に移行する前に、以下の作業を完了する必要があります。

- 『構成設定のコピー』
- 27 ページの『LONG および LOB データ・タイプの書き込み操作をアプリケーションから除去または変更する』
- 27 ページの『WITH CHECK OPTION 文節を使用して作成されたローカル・ビューをドロップする』
- 28 ページの『DataJoiner PTF レベルの検証』

構成設定のコピー

現在システムで使用している環境変数の構成設定をコピーします。この情報をコピーする手順は、DataJoiner と DB2 Universal Database バージョン 7 フェデレーテッド・システムとは異なります。

DataJoiner 環境変数のコピー

アクセスするデータ・ソースの環境変数設定をコピーする必要があります。この情報をコピーしておけば、DB2 Information Integrator への移行後に構成設定を復元することができます。

手順:

オペレーティング・システムのコマンド行で、以下のコマンドを発行します。

```
set > djenv.log
```

このコマンドによって、環境変数設定が `djenv.log` ファイルにコピーされます。インスタンスおよびデータベースの移行後にこのファイルを取り出すために、ファイルを任意のディレクトリーに保管します。

このコマンドは、Windows および UNIX オペレーティング・システムで有効です。

DB2 UDB バージョン 7 db2dj.ini ファイルのコピー

db2dj.ini ファイルには、アクセスするデータ・ソースの環境変数の設定が含まれています。この情報をコピーしておけば、DB2 Information Integrator への移行後に構成設定を復元することができます。

db2dj.ini ファイルは `sqllib/cfg` ディレクトリーにあります。このファイルには、データ・ソースの構成情報が含まれています。

db2dj.ini ファイルをディレクトリーにコピーし、インスタンスおよびデータベースの移行後にそこからファイルを検索できるようにします。

推奨事項: インスタンスの移行ステップに従って移行する場合、db2dj.ini ファイルは必須ではありませんが、このファイルの情報を使用すれば、システム構成設定の移行が正しく実行されたことを確認できます。

Sybase interfaces ファイルのコピー

DB2 Information Integrator への移行後に Sybase データ・ソースにアクセスする予定の場合は、Sybase interfaces ファイルをコピーしてください。interfaces ファイルは、通常、`$HOME/sqllib` ディレクトリーにあります。移行後、このファイルのコピーをリストアする必要があります。

LONG および LOB データ・タイプの書き込み操作をアプリケーションから除去または変更する

LONG データ・タイプは、DB2 Information Integrator では現在サポートされていません。LONG データ・タイプを持つデータ・ソースは、デフォルトで DB2 LOB データ・タイプ (CLOB、DBCLOB、および BLOB) にマップされます。

LONG データ・タイプに対して挿入、更新、または削除操作を実行するアプリケーションは、DB2 Information Integrator に移行するとエラーを戻すことがあります。ローカル列データ・タイプは LOB データ・タイプに変換されますが、現在のところ Oracle® NET8 ラッパーだけが LOB 列に対する書き込み操作を実行できます。他のラッパーを使用して書き込み操作を試行しても、エラーが戻されます。

このようなエラーを避けるには、Oracle NET8 ラッパー以外のラッパーを使用するアプリケーションから LOB 列に対する書き込み操作を除去します。

WITH CHECK OPTION 文節を使用して作成されたローカル・ビューをドロップする

WITH CHECK OPTION 文節を使用してニックネームから作成されたローカル・ビューは、移行後に作動不能になります。この構文はサポートされなくなりました。たとえば、DataJoiner で作成された、以下の構文を持つビューは、移行後に作動不能になります。

```
CREATE VIEW my_view AS SELECT * FROM my_nickname
WHERE SCORE > 90 WITH CHECK OPTION
```

移行前に、WITH CHECK OPTION 文節を使用してニックネームから作成されたローカル・ビューをドロップしてください。それから、WITH CHECK OPTION 文節を使用しないで、再度ビューを作成します。

DataJoiner PTF レベルの検証

DataJoiner から移行する場合、DataJoiner データベースにインストールされている PTF レベルを検査してください。

推奨事項: DataJoiner データベースを DB2 Information Integrator に移行する前に、PTF 12 以降を DataJoiner データベースにインストールしてください。

AIX バージョン 4.1 の DataJoiner の移行

DB2 Information Integrator は AIX バージョン 4.1 をサポートしません。AIX バージョン 4.1 で DataJoiner を実行している場合、DataJoiner を DB2 Information Integrator に移行する前に、以下のステップを完了する必要があります。

1. AIX バージョン 4.1 から、AIX バージョン 4.3.3 保守レベル 9 以降にアップグレードします。
2. アップグレード後の AIX サーバーに、DB2 Information Integrator バージョン 8.2 をインストールします。「*DB2 Information Integrator* インストール・ガイド」を参照してください。

関連概念:

- 4 ページの『DataJoiner の移行の制約事項』
- 12 ページの『DB2 バージョン 7 フェデレーテッド・システムの移行の制約事項』

データベースが移行できる状態にあることの確認

このタスクは、**db2ckmig** コマンドを使用して、データベースが移行可能な状態にあることを確認する方法について説明します。

db2ckmig コマンドは、現行インスタンスによって所有されるデータベースが、移行可能な状態にあることを確認します。**db2ckmig** コマンドは、以下の事柄を確認します。

- データベースが不整合な状態にないこと
- データベースがバックアップ・ペンディング状態にないこと
- データベースがロールフォワード・ペンディング状態にないこと
- 表スペースが通常の状態にあること

手順:

1. 移行元のインスタンスにログオンします。
 - 旧バージョンの DB2 for Linux, UNIX, and Windows から移行する場合は、DB2 インスタンス所有者としてログオンします。
 - DataJoiner から移行する場合は、DataJoiner インスタンス所有者としてログオンします。
2. **db2stop** コマンドを発行して、インスタンスを停止します。
3. Windows では、DB2 バージョン 8 製品 CD を CD-ROM に挿入します。
4. DB2 コマンド行プロンプトから、該当するディレクトリーに変更します。
 - AIX では、このコマンドのパスは `/usr/opt/db2_08_01/bin/db2ckmig` です。

- Linux、HP-UX、および Solaris オペレーティング環境では、このコマンドのパスは /opt/IBM/db2/V8.1/bin/db2ckmig です。
- Windows では、CD 上の ¥db2¥Windows¥utilities ディレクトリーに変更します。

5. **db2ckmig db_alias // directory** コマンドを発行し、現行インスタンスによって所有されるデータベースが移行できる状態にあることを確認し、ログ・ファイルを生成します。

db2ckmig コマンドでエラーが検出されない場合は、以下のメッセージが表示されます。

```
db2ckmig was successful. Database(s) can be migrated.
```

6. **db2ckmig** コマンドがエラーを検出した場合は、移行する前に問題を訂正します。
7. インスタンス所有者のホーム・ディレクトリーにある migration.log ファイルに Version of DB2CKMIG being run: VERSION 8 というテキストが含まれていることを確認してください。

関連概念:

- 31 ページの『DB2 Information Integrator に移行するためのインストール手順』

関連タスク:

- 36 ページの『DB2 UDB サーバーの移行 (UNIX)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2ckmig - データベース事前移行ツール・コマンド』

移行のために DB2 UDB バージョン 6 または バージョン 7 サーバーをオフラインにする

このタスクは、DB2 移行のために DB2 UDB バージョン 6 またはバージョン 7 サーバーをオフラインにする方法を説明します。移行プロセスを継続する前に、DB2 ライセンス・サービスを停止し、すべてのコマンド行プロセッサ・セッションを停止し、アプリケーションおよびユーザーを切断し、データベース・マネージャーを停止する必要があります。

前提条件:

- 移行プロセスを開始する前に、ご使用のシステムが DB2 バージョン 8 のインストール要件を満たしていなければなりません。
- SYSADM 権限が必要です。

手順:

以下のようにして、ご使用のサーバーをオフラインにします。

1. **db2licd -end** コマンドを入力し、DB2 ライセンス・サービスを停止します。
2. Windows 2000 では、サービスに障害が起きた場合にそれを再始動するように、サービスのプロパティーを設定することができます。「障害時の再始動 (restart on failure)」オプションが任意の DB2 サービスに設定されている場合には、次に進む前に、それを停止する必要があります。

3. コマンド行プロセッサを実行していた各セッションで **db2 terminate** コマンドを入力して、すべてのコマンド行プロセッサ・セッションを停止します。
4. すべてのアプリケーションおよびユーザーを切断します。 **db2 list applications** コマンドを入力して、現行のインスタンスのすべてのデータベース接続のリストを取得します。すべてのアプリケーションが切断されたら、このコマンドにより、以下のメッセージが戻されます。

```
SQL1611W No data was returned by the Database System Monitor.  
SQLSTATE=00000
```

db2 force applications コマンドを発行して、アプリケーションおよびユーザーを切断することができます。

5. すべてのアプリケーションおよびユーザーを切断したならば、 **db2stop** コマンドを入力して、それぞれのデータベース・マネージャー・インスタンスを停止します。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2stop - DB2 の停止コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『FORCE APPLICATION コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『LIST APPLICATIONS コマンド』

第 4 章 DB2 Information Integrator への移行

DB2 Information Integrator に移行する手順は、ご使用のオペレーティング・システムに応じて異なります。この章では、DB2 Information Integrator のインストールに必要な一連のステップ、およびインスタンスとデータベースを移行するためのステップについて説明します。

DB2 Information Integrator に移行するためのインストール手順

DB2[®] Information Integrator に移行する前に、ソフトウェアを正しい順序でインストールする必要があります。この順序は、ご使用のオペレーティング・システムと、移行元の製品のバージョンによって異なります。

UNIX オペレーティング・システム上でインスタンスおよびデータベースを移行するためのインストール・シーケンス

ソフトウェアをインストールする前に、移行の事前作業を完了する必要があります (ただし、データベースの検証作業を除く)。

DataJoiner 2.1.1

DataJoiner[®] 2.1.1 から移行するには、「*IBM DB2 Information Integrator* インストール・ガイド」の説明に従って、DB2 Universal Database[™] Enterprise Server Edition および DB2 Information Integrator の最新バージョンをインストールします。アクセス対象のデータ・ソースに応じて、サーバーをセットアップするためのステップに従ってください。

同じコンピューター上で DataJoiner から DB2 Information Integrator に移行する場合:

- インスタンスを移行するために、**db2imigr** コマンドを発行します。
- データベースを移行するために、**db2 migrate database** コマンドを発行します。

1 つのコンピューターの DataJoiner から別のコンピューターの DB2 Information Integrator に移行する場合:

- データベースを移行するために、**db2 restore db <database_name>** コマンドを発行します。

DB2 UDB for Windows および for UNIX バージョン 7 (またはそれ以前)、DB2 Relational Connect バージョン 7、または DB2 Life Sciences Data Connect

DB2 UDB for Windows[®] および for UNIX[®] バージョン 7 (またはそれ以前)、DB2 Relational Connect バージョン 7、または DB2 Life Sciences Data Connect から移行するには、「*IBM DB2 Information Integrator* インストール・ガイド」の説明に従って、DB2 Universal Database Enterprise Server Edition および DB2 Information

Integrator の最新バージョンをインストールします。アクセス対象のデータ・ソースに応じて、サーバーをセットアップするためのステップに従ってください。

同じコンピューター上で **DB2 UDB** から **DB2 Information Integrator** に移行する場合:

インスタンスを移行するために、**db2imigr** コマンドを発行します。データベースを移行するために、**db2 migrate database** コマンドを発行します。

1 つのコンピューターの **DB2 UDB** から別のコンピューターの **DB2 Information Integrator** に移行する場合:

データベースを移行するために、**db2 restore db <database_name>** コマンドを発行します。

DB2 Information Integrator for UNIX バージョン 8

Information Integrator for UNIX バージョン 8 から移行するには、以下のようになります。

1. DB2 Information Integrator バージョン 8.1 がインストール済みの場合、DB2 Information Integrator をバージョン 8.2 にするために、フィックスパック 7 をインストールします。
2. DB2 Information Integrator バージョン 8.2 用の新しいラッパーをインストールしたい場合には、「*IBM DB2 Information Integrator インストール・ガイド*」の説明に従って DB2 Information Integrator をインストールします。アクセス対象のデータ・ソースに応じて、サーバーをセットアップするためのステップに従ってください。

Windows オペレーティング・システム上でインスタンスおよびデータベースを移行するためのインストール・シーケンス

DB2 Universal Database Enterprise Server Edition および DB2 Information Integrator をインストールする前に、移行の事前作業をすべて完了してください。これには、『データベースが移行可能状態にあることを検査する』のステップが含まれます。

DataJoiner 2.1.1

DataJoiner 2.1.1 から移行するには、以下のようになります。

1. 「*IBM DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール*」資料にある手順に従って、DB2 Universal Database Enterprise Server Edition の最新版をインストールします。
2. 「*IBM DB2 Information Integrator インストール・ガイド*」にある手順に従って、DB2 Information Integrator をインストールします。アクセス対象のデータ・ソースに応じて、サーバーをセットアップするためのステップに従ってください。

同じコンピューター上で **DataJoiner** から **DB2 Information Integrator** に移行する場合:

データベースを移行するために、**db2 migrate database** コマンドを発行します。

1 つのコンピューターの **DataJoiner** から別のコンピューターの **DB2 Information Integrator** に移行する場合:

データベースを移行するために、**db2 restore db <database_name>** コマンドを発行します。

Windows システムの場合、DB2 Information Integrator バージョン 8.2 をインストールするとき、インスタンスが自動的に移行されます。db2imigr コマンドを実行する必要はありません。

DB2 UDB for Windows および for UNIX バージョン 7 (またはそれ以前)、DB2 Relational Connect、または DB2 Life Sciences Data Connect

DB2 UDB for Windows および for UNIX バージョン 7 (またはそれ以前)、DB2 Relational Connect、または DB2 Life Sciences Data Connect から移行するには、以下のようにします。

1. 「*IBM DB2 Universal Database* サーバー機能 概説およびインストール」資料にある手順に従って、DB2 Universal Database Enterprise Server Edition の最新版をインストールします。
2. 「*IBM DB2 Information Integrator* インストール・ガイド」にある手順に従って、DB2 Information Integrator をインストールします。アクセス対象のデータ・ソースに応じて、サーバーをセットアップするためのステップに従ってください。

同じコンピューター上で **DB2 UDB** から **DB2 Information Integrator** に移行する場合:

データベースを移行するために、**db2 migrate database** コマンドを発行します。

1 つのコンピューターの **DB2 UDB** から別のコンピューターの **DB2 Information Integrator** に移行する場合:

データベースを移行するために、**db2 restore db <database_name>** コマンドを発行します。

DB2 Information Integrator バージョン 8

DB2 Information Integrator バージョン 8 から移行するには、以下のようにします。

1. DB2 Information Integrator バージョン 8.1 がインストール済みの場合、DB2 Information Integrator をバージョン 8.2 にするために、フィックスパック 7 をインストールします。
2. DB2 Information Integrator バージョン 8.2 用の新しいラッパーをインストールしたい場合には、「*IBM DB2 Information Integrator* インストール・ガイド」にある手順に従って、DB2 Information Integrator をインストールします。アクセス対象となる特定のデータ・ソース用にサーバーをセットアップするためのステップを使用してください。

関連概念:

- 「*DB2 Universal Database* サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 UDB Enterprise Server Edition』
- 「*IBM DB2 Information Integrator* インストール・ガイド」の『DB2 Information Integrator のインストール - 概要』

関連タスク:

- 28 ページの『データベースが移行できる状態にあることの確認』
- 44 ページの『データベースの移行』
- 37 ページの『インスタンスの移行 (UNIX)』
- 「*IBM DB2 Information Integrator* インストール・ガイド」の『DB2 Information Integrator のインストール (Windows)』

関連資料:

- 「*IBM DB2 Information Integrator* インストール・ガイド」の『DB2 Universal Database バージョン 8.2 がインストール済みの場合』
- 「*IBM DB2 Information Integrator* インストール・ガイド」の『クリーン・インストール』
- 「*IBM DB2 Information Integrator* インストール・ガイド」の『サポートされていない DB2 Universal Database のエディションまたはバージョンがインストールされている場合』

Windows サーバーの移行

このセクションでは、Windows サーバー上の DB2 Information Integrator の移行について説明します。

データベースの移行については、44 ページの『データベースの移行』 および 46 ページの『新規システムへのデータベースの移行』 を参照してください。

DB2 UDB の移行 (Windows)

このトピックでは、Windows 上で DB2 UDB バージョン 8 に移行するためのステップをリストします。

DB2 バージョン 6 またはバージョン 7 の既存のインスタンスおよびデータベースを DB2 バージョン 8 で使用したい場合には、移行が必要です。データベースが DB2 バージョン 8 フィックスパック・レベルにすでに移行済みの場合は、データベースを移行する必要はありません。Windows では、DB2 バージョン 8 のインストール時に既存のインスタンスはすべて自動的に移行されます。

前提条件:

移行する前に、以下を確認してください。

- 移行に関する推奨事項、制約事項、およびスペースの推奨事項を確認します。
- DB2 移行前の構成設定の記録を行います。
- 診断エラー・レベルの変更を実行します。
- DB2 データベースの移行の準備ができていることを確認します。
- データベースをバックアップします。
- レプリケーションを使用する場合には、すべての DB2 ログ・ファイルをアーカイブする必要があります。
- SYSADM 権限が必要です。
- DB2 の移行のために DB2 サーバーをオフラインにします。

手順:

以下のようにして、DB2 UDB を移行します。

1. DB2 サーバーをインストールします。Windows では、DB2 バージョン 8 のインストール時に既存のインスタンスがすべて移行されます。
2. データベースの移行を行います。
3. オプション: DB2 Explain 表の移行を行います。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『システム管理権限 (SYSADM)』
- 16 ページの『移行に関する推奨事項』

関連タスク:

- 22 ページの『DB2 の移行前のシステム構成設定の記録』
- 25 ページの『DB2 移行前の診断エラー・レベルの変更』
- 28 ページの『データベースが移行できる状態にあることの確認』
- 21 ページの『DB2 の移行の前のデータベースのバックアップ』
- 29 ページの『移行のために DB2 UDB バージョン 6 または バージョン 7 サーバーをオフラインにする』
- 44 ページの『データベースの移行』
- 42 ページの『Explain 表の移行』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『ARCHIVE LOG コマンド』
- 18 ページの『移行スペースに関する推奨事項』
- 15 ページの『移行の制約事項』

UNIX サーバーの移行

このセクションには、UNIX サーバーの移行に関する以下のトピックが含まれます。

- 36 ページの『DB2 UDB サーバーの移行 (UNIX)』
- 37 ページの『インスタンスの移行 (UNIX)』

UNIX サーバーを移行するとき、オプションで、32 ビット・サーバーから 64 ビット・サーバーに移行できます。64 ビット・サーバーに移行するためのステップは、以下のトピックで扱われます。

- 39 ページの『64 ビット DB2 バージョン 8 への移行 (UNIX)』
- 40 ページの『UNIX 32 ビット・システムの DataJoiner 2.1.1 から UNIX 64 ビット・システムの DB2 UDB バージョン 8 への移行』

データベースの移行については、44 ページの『データベースの移行』 および 46 ページの『新規システムへのデータベースの移行』 を参照してください。

DB2 UDB サーバーの移行 (UNIX)

このトピックでは、UNIX 上で DB2 バージョン 8 に移行するためのステップをリストします。

DB2 バージョン 6 またはバージョン 7 の既存のインスタンスおよびデータベースを DB2 バージョン 8 で使用したい場合には、移行が必要です。

データベースが DB2 バージョン 8 フィックスバック・レベルにすでに移行済みの場合は、データベースを移行する必要はありません。

前提条件:

- 移行に関する推奨事項、制約事項、およびスペースの推奨事項を確認します。
- DB2 移行前の構成設定の記録を行います。
- 診断エラー・レベルの変更を実行します。
- DB2 の移行のために DB2 サーバーをオフラインにします。
- データベースをバックアップします。
- レプリケーションを使用する場合には、すべての DB2 ログ・ファイルをアーカイブする必要があります。
- SYSADM 権限が必要です。

手順:

以下のようにして、DB2 UDB を移行します。

1. DB2 サーバーをインストールします。
2. インスタンスの移行を行います。
3. オプション: DB2 ツール・カタログを作成し、既存のバージョン 8 より前のスキーマおよびスケジュール (コントロール・センター用) を使用したい場合には、DB2 Administration Server の移行を行います。
4. データベースの移行を行います。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『システム管理権限 (SYSADM)』
- 16 ページの『移行に関する推奨事項』

関連タスク:

- 22 ページの『DB2 の移行前のシステム構成設定の記録』
- 25 ページの『DB2 移行前の診断エラー・レベルの変更』
- 29 ページの『移行のために DB2 UDB バージョン 6 または バージョン 7 サーバーをオフラインにする』
- 21 ページの『DB2 の移行の前のデータベースのバックアップ』
- 37 ページの『インスタンスの移行 (UNIX)』
- 38 ページの『DB2 Administration Server (DAS) の移行』
- 44 ページの『データベースの移行』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『ARCHIVE LOG コマンド』

- 18 ページの『移行スペースに関する推奨事項』
- 15 ページの『移行の制約事項』

インスタンスの移行 (UNIX)

db2imigr コマンドを使用して、既存の DB2 バージョン 6 または DB2 バージョン 7 インスタンスを移行することができます。インスタンスの移行は、DB2 バージョン 8 のインストール後に実行します。

db2imigr コマンドは、以下の事柄を行います。

- インスタンスによって所有される、カタログされたデータベースをチェックして、それらが移行の準備が整っているかを確認します。
- **db2icrt** コマンドを実行して、DB2 バージョン 8 インスタンスを作成します。
- システムおよびローカル・データベース・ディレクトリーを、バージョン 8 フォーマットに更新します。
- DB2 バージョン 6 および DB2 バージョン 7 のデータベース・マネージャー構成と、DB2 バージョン 8 データベース・マネージャー構成をマージします。

前提条件:

root 権限を持つユーザーとしてログインする必要があります。

db2imigr コマンドを実行する前に、以下の事柄が勧められています。

- /tmp フリー・スペースが 20 MB なければなりません。インスタンス移行トレース・ファイルが /tmp に書き込まれます。
- インスタンスに **db2imigr** コマンドを実行する前に、インスタンス中の個々のデータベースに対して **db2ckmig** を手動で実行してみて、問題があれば解決しておきます。 **db2ckmig** が問題を検出する限り、**db2imigr** は移行を実行しません。

制約事項:

移行は以下のものからのみサポートされます。

- DB2 バージョン 6.x またはバージョン 7.x。(バージョン 6.x およびバージョン 7.x でサポートされているすべてのプラットフォーム。Linux はバージョン 6 フォックスパック 2 でなければなりません。)
- DB2 DataJoiner V2.1.1 (AIX、Windows NT、および Solaris オペレーティング環境)

手順:

以下を行って、インスタンスを移行します。

1. **db2imigr** コマンドを使用して、インスタンスを移行します。

```
DB2DIR/instance/db2imigr [-u fencedID] InstName
```

ここで、

DB2DIR

AIX では /usr/opt/db2_08_01、他のすべての UNIX オペレーティング・システムでは /opt/IBM/db2/V8.1 です。

-u fencedID

fenced ユーザー定義関数 (UDF) およびストアード・プロシージャが

稼働するユーザー。このパラメーターが必要なのは、クライアント・インスタンスからサーバーに移行する場合だけです。

InstName

インスタンス所有者のログイン名です。

DB2 の単一パーティション・バージョンから DB2 Enterprise Server Edition のパーティション・データベース環境バージョンへ移行した場合は、**db2iupdt** コマンドを使用して、インスタンスをパーティション・フォーマットに更新する必要があります。

関連タスク:

- 28 ページの『データベースが移行できる状態にあることの確認』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2ckmig - データベース事前移行ツール・コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2imigr - インスタンスの移行コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2icrt - インスタンスの作成コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2iupdt - インスタンスの更新コマンド』

DB2 Administration Server (DAS) の移行

ご使用の DB2 バージョン 8 システムに DB2 ツール・カタログをすでに作成済みで、バージョン 8 より前の DB2 Administration Server (DAS) で作成したバージョン 8 より前の既存スクリプトおよびスケジュール (コントロール・センター用) を使用したい場合には、DAS をバージョン 8 に移行する必要があります。

Windows の場合、バージョン 8 のインストール中に DB2 ツール・カタログを作成した場合には、この移行は自動的に行われます。インストール後に DB2 ツール・カタログを作成した場合は、この移行は手動で行わなければなりません。

UNIX の場合、インストール中またはインストール後に DB2 ツール・カタログが作成された後、この移行を手動で行う必要があります。

前提条件:

以下が必要です。

- 既存の DB2 ツール・カタログ。
- Windows システムでは、バージョン 8 より前の情報を DB2 ツール・カタログに移行するための DASADM 権限。
- UNIX システムでは、バージョン 8 より前の情報を DB2 ツール・カタログに移行するための root 権限。

手順:

以下のコマンドを入力して、バージョン 8 より前の DAS を DB2 ツール・カタログに移行します。

```
dasmigr previous_das_name new_das_name
```

previous_das_name はバージョン 8 より前の DAS インスタンスの名前を、*new_das_name* は新規 DB2 バージョン 8 DAS の名前を表します。

関連タスク:

- 34 ページの『DB2 UDB の移行 (Windows)』
- 「*DB2 Universal Database Personal Edition 概説およびインストール*」の『DB2 Personal Edition の移行 (Windows)』
- 「*DB2 Universal Database Personal Edition 概説およびインストール*」の『DB2 Personal Edition の移行 (Linux)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『*dasmigr - DB2 Administration Server の移行コマンド*』

64 ビット DB2 バージョン 8 への移行 (UNIX)

このトピックでは、UNIX 64 ビット環境でデータベースを DB2 バージョン 8 に移行するステップを一覧で示します。DB2 バージョン 8 の 64 ビット・システムは、AIX、HP-UX、Linux、および Solaris オペレーティング環境でサポートされています。

前提条件:

- 64 ビット・システムの DB2 バージョン 8 に更新する前に、データベースを移行してください。このデータベース移行は、**db2imigr** コマンドを発行してから、**db2iupdt -w64** コマンドを発行するまでの間に行う必要があります。

制約事項:

- バージョン 8 の 64 ビット・インスタンスにいったん移行したインスタンスを、バージョン 7 の 32 ビット・インスタンスに戻すことはできません。
- このトピックの情報は Linux には適用されません。バックアップ・ユーティリティーとリストア・ユーティリティーを使って、Linux 32 ビット DB2 バージョン 8 データベースから、Linux 64 ビット DB2 バージョン 8 データベースに移動します。

手順:

DB2 バージョン 7 のデータベースを DB2 バージョン 8 の 64 ビット・システムに移行するには、以下のようにします。

1. 64 ビット・システムに DB2 バージョン 8 をインストールします。前のバージョンはアンインストールしないでください。
2. インスタンスの所有者として **DB2DIR/bin/db2ckmig** コマンドを実行し、データベースが移行可能であることを確認します。
3. 既存の DB2 バージョン 7 のデータベースをバックアップします。
4. DB2 バージョン 7 のインスタンスを停止させます。
5. **DB2DIR/instance/db2imigr <instance_name>** コマンドを実行します。
6. 既存のデータベースが、64 ビット・システム上の DB2 バージョン 7 の 32 ビット・インスタンスにある場合は、インスタンスを 64 ビット・インスタンスに更新する必要があります。バージョン 7 の 32 ビット・インスタンスをバージョン 7 の 64 ビット・インスタンスに更新するときは、**db2iupdt** コマンドを使用し、**-w** パラメーターに **64** の値を指定します。例えば、以下のようにします。

DB2DIR/instance/db2iupdt -w 64 db2inst1

ここで DB2DIR は、該当するプラットフォーム上の DB2 バージョン 8 のインストール・パスを表します。

7. インスタンスを再始動させます。

バックアップおよびリストア・ユーティリティーを使用してシステムを移行できます。バックアップとリストアの方式では、任意の AIX、HP-UX、Solaris オペレーティング環境の 32 ビット DB2 バージョン 8 データベースから、任意の AIX、HP-UX、Solaris オペレーティング環境の 64 ビット・バージョン 8 データベースへの移動、または Linux 32 ビット DB2 バージョン 8 データベースから、Linux 64 ビット・バージョン 8 データベース (Linux IA64 または Linux AMD64) への移動がサポートされます。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『BACKUP DATABASE コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『RESTORE DATABASE コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2icrt - インスタンスの作成コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2iupdt - インスタンスの更新コマンド』

UNIX 32 ビット・システムの DataJoiner 2.1.1 から UNIX 64 ビット・システムの DB2 UDB バージョン 8 への移行

UNIX 64 ビット・システムの DB2 Universal Database バージョン 8 は、AIX および Solaris オペレーティング環境でサポートされています。

前提条件:

1. アクセス対象のデータ・ソース用のラッパーが、64 ビット・モードで使用できることを確認してください。
2. すべてのデータ・ソース・クライアント・ソフトウェアが 64 ビット・システムにすでにインストールおよび構成されていることを確認してください。
3. ラッパーが 64 ビット・モードで使用可能な場合、64 ビット・ラッパー・ライブラリーを DB2 基本ディレクトリー内に作成するために、**djxlink** コマンドを実行してください。
4. DataJoiner から移行している場合、すべてのログ・ファイルの合計サイズとして、データベースのバックアップ・ファイル・サイズの 2 倍が必要です。十分なログ・ファイル・スペースが DataJoiner システムにあるかどうかを判別するには、以下の公式を使用します。

$$(4096 \times \text{logfilsiz} \times (\text{logprimary} + \text{logsecond})) > 2 \times (\text{DataJoiner database backup file size})$$

ここで、4096 はログ・ファイルのページ・サイズです。logfilsiz、logprimary、および logsecond は、データベース構成パラメーターです。

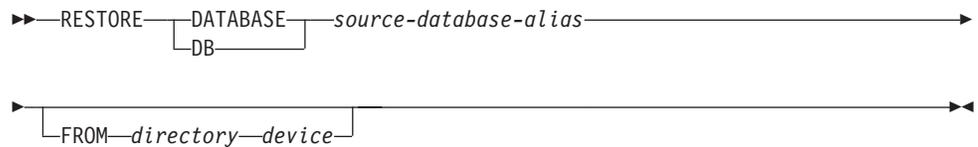
制約事項:

- DB2 Universal Database バージョン 8 の 64 ビット・インスタンスにいったん移行したインスタンスを、DataJoiner バージョン 2.1.1 の 32 ビット・インスタンスに戻すことはできません。
- UNIX 64 ビット・システムの DB2 Universal Database バージョン 8 は、Linux オペレーティング・システムではサポートされません。

手順:

DataJoiner 2.1.1 の 32 ビット・データベースを DB2 Universal Database バージョン 8 の 64 ビット・システムに移行するには、次のようにします。

1. DB2 Universal Database バージョン 8 および DB2 Information Integrator を DataJoiner システムにインストールします。前のバージョンは除去しないでください。
2. DataJoiner バージョン 2.1.1 のインスタンスを停止します。
3. データベースが移行可能であることを確認するために、DataJoiner 2.1.1 の 32 ビット・システムでインスタンス所有者として **/usr/opt/db2_08_01/bin/db2ckmig** コマンドを発行します。
4. DataJoiner バージョン 2.1.1 のデータベースをバックアップします。
5. DB2 Universal Database バージョン 8 および DB2 Information Integrator を 64 ビット・コンピューターにインストールします。
6. インストーラーを使用するか、**db2icrt -w 32 -u <instance_name>** コマンドを発行することによって、32 ビット・インスタンスを作成します。
7. **db2 restore database** コマンドを以下のように発行して、データベースを移行します。



DATABASE *source-database-alias* パラメーターは、すでにバックアップを取ったデータベースの別名です。FROM *directory/device* パラメーターは、バックアップ・イメージが保管されているディレクトリーまたは装置の完全修飾パス名です。FROM パラメーターを省略した場合、デフォルト値として、クライアント・コンピューターの現行作業ディレクトリーが指定されます。このターゲット・ディレクトリーまたは装置は、データベース・サーバー上に存在している必要があります。

8. **db2iupdt** コマンドを発行して、このインスタンスを DB2 Universal Database バージョン 8 の 64 ビット・インスタンスに更新します。その際、**-w** パラメーターを **64** に設定します。

たとえば、以下のようにします。

```
DB2DIR/instance/db2iupdt -w 64 db2inst1
```

DB2DIR は、該当するオペレーティング・システムでの DB2 Universal Database バージョン 8 のインストール・パスです。

9. インスタンスを再始動してください。

トラブルシューティング:

ここで、

- *dbname* はデータベース名を表しています。このパラメーターは必須です。
- *explain_schema* は、移行する Explain 表のスキーマ名を表しています。このパラメーターは必須です。
- *userid* と *password* は、現行ユーザーの ID とパスワードを表しています。これら 2 つのパラメーターは任意指定パラメーターです。

db2exmig を実行しているユーザー ID に属する Explain 表、またはそのデータベースに接続するのに使用したユーザー ID に属する Explain 表が移行されます。Explain 表移行ツールは、バージョン 6 またはバージョン 7 の表の名前を変更し、EXPLAIN.DDL を使用して表の新しいセットを作成するとともに、古い表の内容を新しい表にコピーします。さらに、古い表をドロップします。**db2exmig** コマンドは、ユーザーが Explain 表に追加した列を保存します。

関連概念:

- 「管理ガイド: パフォーマンス」の『Explain ツール』
- 「管理ガイド: パフォーマンス」の『Explain 表および Explain 情報の編成』

関連タスク:

- 44 ページの『データベースの移行』

アプリケーションの DB2 バージョン 8 への移行

DB2[®] バージョン 8 では以下の DB2 バージョンの移行がサポートされます。

- DB2 バージョン 6
- DB2 バージョン 7.1
- DB2 バージョン 7.2
- DataJoiner[®] バージョン 2.1.1

上記より後のバージョンの DB2 に移行すると、データベースとノードのディレクトリは自動的に移行されます。上記以外の旧バージョンの DB2 から移行するには、上記のサポート対象バージョンのいずれかにまず移行してから、そのバージョンから DB2 バージョン 8 に移行する必要があります。

HP-UX

HP-UX バージョン 10 または HP-UX バージョン 11 以前から DB2 を移行している場合、DB2 プログラムは HP-UX バージョン 11 (組み込み SQL がある場合) 上の DB2 で再びプリコンパイルして、再コンパイルしなければなりません。これには、すべての DB2 アプリケーション、ストアド・プロシージャ、ユーザー定義関数、およびユーザー出口プログラムが含まれます。さらに、HP-UX バージョン 11 上でコンパイルされた DB2 プログラムは、HP-UX バージョン 10 以前の上では実行できません。HP-UX バージョン 10 上でコンパイルされ実行される DB2 プログラムは、HP-UX バージョン 11 サーバーにリモートで接続することができます。

Micro Focus COBOL

DB2 バージョン 2.1.1 またはそれ以前を使用してプリコンパイルし、Micro Focus COBOL を使用してコンパイルした既存アプリケーションは、現行バージョンの

DB2 を使用して再プリコンパイルした後、Micro Focus COBOL を使用して再コンパイルする必要があります。IBM® プリコンパイラーの旧バージョンを使用して構築したアプリケーションを再プリコンパイルしないと、異常終了時にデータベースが破壊される恐れがあります。

関連概念:

- 16 ページの『移行に関する推奨事項』
- 「アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」の『Java アプリケーション、ルーチン、およびアプレットの移行』
- 「アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」の『2 つのバージョンの DB2 でのアプリケーションの実行』

関連タスク:

- 44 ページの『データベースの移行』
- 37 ページの『インスタンスの移行 (UNIX)』
- 34 ページの『DB2 UDB の移行 (Windows)』
- 36 ページの『DB2 UDB サーバーの移行 (UNIX)』
- 「アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」の『32 ビット環境から 64 ビット環境へのアプリケーションの移行』
- 「アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」の『アプリケーション移植性の確保』

関連資料:

- 「管理 API リファレンス」の『管理 API および アプリケーションの移行』
- 15 ページの『移行の制約事項』
- 「管理ガイド: プランニング」の『バージョン 8 と以前のリリースとの非互換性』

データベースの移行

前提条件:

SYSADM 権限が必要です。

制約事項:

移行は以下のものからのみサポートされます。

- DB2 バージョン 6.x またはバージョン 7.x。(バージョン 6.x およびバージョン 7.x でサポートされているすべてのプラットフォーム。)
- DB2 DataJoiner バージョン 2.1.1 (AIX、Windows NT、および Solaris オペレーティング環境)

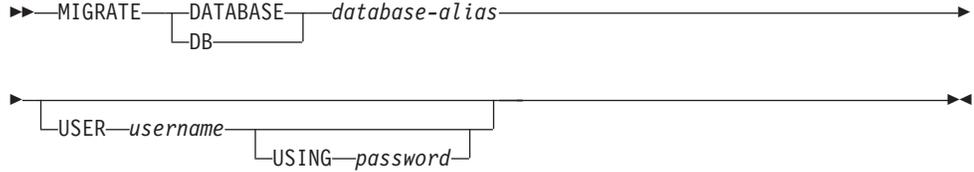
データベースが DB2 バージョン 8 フィックスパック・レベルにすでに移行済みの場合は、データベースを移行する必要はありません。

手順:

以下のようにして、DB2 データベースを移行します。

1. **db2 migrate database** コマンドを使用し、データベースを移行します。

DB2 MIGRATE DATABASE コマンド



各パラメーターの意味は以下のとおりです。

DATABASE *database-alias*

現在インストールされているデータベース・マネージャーのバージョンに移行される、データベースの別名を指定します。

USER *username*

データベースをその下に移行するユーザー名を指定します。

USING *password*

ユーザー名を認証するために使用するパスワード。パスワードを省略しても、ユーザー名が指定されている場合には、パスワードを入力するようプロンプトが出されます。

2. オプション: データベース中のローカル表の統計を更新します。データベース移行の完了時に、照会のパフォーマンスを最適化するために使用されていた旧統計は、カタログ内に保存されています。ただし、DB2 バージョン 8 には、改良された統計や DB2 バージョン 6 または DB2 バージョン 7 にはなかった統計もあります。これらの統計の利点を活用するために、表に対して **runstats** コマンドを実行するとよいかもしれません (とくに、SQL 照会のパフォーマンスに対して重大な影響を与える表に対して)。
3. オプション: パッケージを再バインドします。データベースを移行すると、既存のパッケージはすべて無効になります。移行プロセス後、各パッケージは、DB2 バージョン 8 データベース・マネージャーによって最初に使用されるたびに再作成されます。 **db2rbind** コマンドを実行し、データベースに格納されているすべてのパッケージを再作成することができます。
4. オプション: PUBLIC からの SQL データ・アクセスを含む、外部ストアド・プロシージャに対する EXECUTE 特権を取り消します。データベースの移行中には、既存のすべての関数、メソッド、および外部ストアド・プロシージャに関して、EXECUTE 特権が PUBLIC に付与されます。これにより、本来は特権を持たない SQL オブジェクトにユーザーがアクセスできるようになり、SQL データ・アクセスを含む外部ストアド・プロシージャの機密漏れが生じます。 **db2undgp - r** コマンドを入力して、特権を取り消します。
5. オプション: DB2 Explain 表の移行を行います。
6. オプション: 移行前に構成設定を記録しておけば、移行前の構成設定を現在の構成設定と比較して、移行が成功したかどうかを確認できます。以下の事柄を確認します。
 - データベース構成パラメーターの設定
 - データベース・マネージャー構成パラメーターの設定
 - 表スペース・レコード
 - パッケージ・レコード

注: 移行中に、データベース構成パラメーター *maxappls* は自動的に設定されます。これを別の値に設定したい場合は、手動で更新する必要があります。

関連タスク:

- 22 ページの『DB2 の移行前のシステム構成設定の記録』
- 42 ページの『Explain 表の移行』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『MIGRATE DATABASE コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『LIST DATABASE DIRECTORY コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『RESTORE DATABASE コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2rbind - すべてのパッケージの再バインド・コマンド』

新規システムへのデータベースの移行

このタスクを利用して DB2 Linux、UNIX、および Windows データベースを移行してください。

前提条件:

SYSADM 許可が必要です。

db2 backup database コマンドを使用してデータベースをバックアップしなければなりません。

DataJoiner から移行する場合は、ログ・ファイルの合計サイズは、DataJoiner のデータベースのバックアップ・サイズの 2 倍でなければなりません。

DataJoiner、DB2 Relational Connect、または DB2 Life Sciences Data Connect から移行する場合は、DB2 Information Integrator および DB2 Universal Database for Linux, UNIX, and Windows をターゲット・システム上にインストールしなければなりません。

制約事項:

移行は以下のものからのみサポートされます。

- DB2 バージョン 6.x またはバージョン 7.x。 (バージョン 6.x およびバージョン 7.x でサポートされているすべてのオペレーティング・システム。)
- DB2 DataJoiner V2.1.1 (AIX、Windows NT、および Solaris オペレーティング環境)

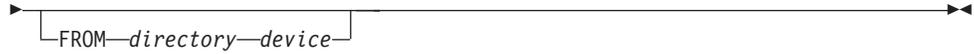
手順:

以下のようにして、データベースを新しいシステムに移行します。

1. **db2 restore database** コマンドを使用し、データベースを移行します。

DB2 RESTORE DATABASE コマンド

```
▶▶ RESTORE DATABASE source-database-alias
      └── DB ───┘
```



各パラメーターの意味は以下のとおりです。

DATABASE *source-database-alias*

バックアップが取得されるソース・データベースの別名を指定します。

FROM *directory/device*

バックアップ・イメージがあるディレクトリーまたは装置の完全修飾パス名。FROM パラメーターが省略される場合には、デフォルト値はクライアント・システム上の現行作業ディレクトリーです。このターゲット・ディレクトリーまたは装置は、データベース・サーバー上に存在している必要があります。

2. 以下のエラーが戻される場合は、データベースはリストアされましたが移行されていません。

```
SQL2519N The database was restored but the restored database was not migrated
to the current release. Error "-1704" with tokens "3" is returned.
SQLSTATE=57011
```

データベースを移行するには、以下のステップを完了しなければなりません。

- a. すべてのログ・ファイルの合計サイズを大きくします。

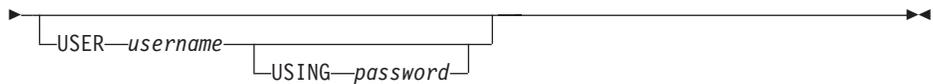
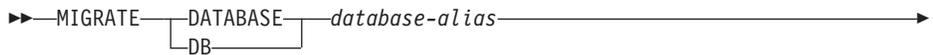
- DB2 バージョン 6 またはバージョン 7 から移行する場合は、logfilsiz、logprimary、および logsecond パラメーターの値を 2 倍にします。
- DataJoiner から移行する場合は、すべてのログ・ファイルの合計サイズは、データベースのバックアップ・ファイル・サイズの 2 倍である必要があります。以下の公式を使用して、DataJoiner システム上のログ・ファイル・スペースが十分かどうかを判別してください。

$$(4096 \times \text{logfilsiz} \times (\text{logprimary} + \text{logsecond})) > 2 \times (\text{DataJoiner データベース・バックアップ・ファイル・サイズ})$$

4096 はログ・ファイル logfilsiz のページ・サイズです。logfilsiz、logprimary、および logsecond はデータベース構成パラメーターです。

- b. **db2 migrate database** コマンドを使用し、データベースを移行します。

DB2 MIGRATE DATABASE コマンド



各パラメーターの意味は以下のとおりです。

DATABASE *database-alias*

現在インストールされているデータベース・マネージャーのバージョンに移行される、データベースの別名を指定します。

USER *username*

データベースをその下に移行するユーザー名を指定します。

USING *password*

ユーザー名を認証するために使用するパスワード。パスワードを省略しても、ユーザー名が指定されている場合には、パスワードを入力するようプロンプトが出されます。

- c. 依然としてログ・ファイルのサイズが足りない場合は、以下のエラーが戻されます。ログ・ファイルのサイズを大きくして、再度 **db2 migrate database** コマンドを発行しなければなりません。

SQL1704N Database migration failed. Reason code "3".

- d. 移行が完了したら、logfilsiz、logprimary、および logsecond パラメーターをリセットします。

3. オプション: パッケージを再バインドします。データベースを移行すると、既存のパッケージはすべて無効になります。移行プロセス後、各パッケージは、DB2 バージョン 8 データベース・マネージャーによって最初に使用されるたびに再作成されます。 **db2rbind** コマンドを実行し、データベースに格納されているすべてのパッケージを再作成することができます。
4. オプション: PUBLIC からの SQL データ・アクセスを含む、外部ストアド・プロシージャに対する EXECUTE 特権を取り消します。データベースの移行中には、既存のすべての関数、メソッド、および外部ストアド・プロシージャに関して、EXECUTE 特権が PUBLIC に付与されます。これにより、本来は特権を持たない SQL オブジェクトにユーザーがアクセスできるようになり、SQL データ・アクセスを含む外部ストアド・プロシージャの機密漏れが生じます。 **db2undgp - r** コマンドを入力して、特権を取り消します。
5. オプション: DB2 Explain 表の移行を行います。
6. オプション: 移行前に構成設定を記録しておけば、移行前の構成設定を現在の構成設定と比較して、移行が成功したかを確認します。以下のことを確認する必要があります。
- データベース構成パラメーターの設定
 - データベース・マネージャー構成パラメーターの設定
 - 表スペース・レコード
 - パッケージ・レコード

注: 移行中に、データベース構成パラメーター *maxappls* は自動的に設定されます。このパラメーターを別の値に設定したい場合は、*maxappls* パラメーターを手動で更新する必要があります。

第 5 章 移行の後に

この章では、DB2 Information Integrator from DataJoiner または DB2 バージョン 7 から DB2 Information Integrator に移行した後に必要なステップについて説明します。最初に一般的な作業を行った後、アクセス対象のデータ・ソースに特有の作業を行う必要があります。

この章には、以下のトピックがあります。

- 『DB2 Information Integrator に移行後の作業』
- 58 ページの『DB2 Information Integrator に移行後の DB2 ファミリーのデータ・ソースへのアクセス』
- 60 ページの『DB2 Information Integrator 移行後の Informix データ・ソースへのアクセス』
- 63 ページの『DB2 Information Integrator 移行後の Microsoft SQL Server データ・ソースへのアクセス』
- 65 ページの『DB2 Information Integrator 移行後の ODBC データ・ソースへのアクセス』
- 67 ページの『DB2 Information Integrator 移行後の Oracle データ・ソースへのアクセス』
- 70 ページの『DB2 Information Integrator 移行後の Sybase データ・ソースへのアクセス』
- 72 ページの『DB2 Information Integrator 移行後の AIX 上の Teradata データ・ソースへのアクセス』
- 74 ページの『DB2 Information Integrator に移行後の Documentum データ・ソースへのアクセス』

DB2 Information Integrator に移行後の作業

DB2 Information Integrator への移行後、データ・ソースにアクセスするために、以下の作業をすべて行う必要があります。

- 50 ページの『DataJoiner 構成設定の復元』
- 50 ページの『DB2 UDB バージョン 7 フェデレーテッド・システムの構成設定の復元』
- 50 ページの『データ・ソースのバージョンの変更』
- 50 ページの『タイプ 1 索引からタイプ 2 索引への変換』
- 51 ページの『DB2 ファミリー・データ・ソースへの接続の再作成』
- 51 ページの『パッケージの再バインド』
- 52 ページの『データ・ソースへのアクセスに使用されるラッパーの変更』
- 55 ページの『DB2 Information Integrator 移行後の XML データ・ソースへのアクセス』

DataJoiner 構成設定の復元

IBM DataJoiner から移行した場合には、インスタンスとデータベースを移行した後、DataJoiner 構成設定を復元する必要があります。

DB2 Information Integrator への移行前に作成した djenv.log ファイルを見つけます。djenv.log ファイル内に含まれる一連の変数と、(\$HOME/sqlib/cfg/ ディレクトリーにある) db2dj.ini ファイル内の変数とを比較します。db2dj.ini にいずれかの変数が欠落している場合、このファイルを編集して変数を追加する必要があります。

DB2 UDB バージョン 7 フェデレーテッド・システムの構成設定の復元

DB2 Universal Database バージョン 7 から移行した場合には、インスタンスとデータベースを移行した後、構成設定を復元する必要があります。

\$HOME/sqlib/cfg/ ディレクトリーへの移行前に作成した db2dj.ini ファイルのコピーをリストアします。

データ・ソースのバージョンの変更

IBM DataJoiner から移行した場合には、データ・ソースのバージョンを、DB2 Information Integrator によってサポートされるバージョンに変更することができます。以下のような場合に、データ・ソースのバージョンを変更できます。

- 無効なサーバー・バージョン、または DB2 Information Integrator によってサポートされないサーバー・バージョンを指定する DataJoiner サーバー・マッピングを移行した場合。
- リモート・サーバーを別のバージョンに変更した場合。

サーバー・バージョンを、DB2 Information Integrator によってサポートされるバージョンに変更するには、ALTER SERVER ステートメントを発行します。たとえば、以下のようにします。

```
ALTER SERVER server_name VERSION number
```

ここで *server_name* はデータ・ソースの名前、*number* は DB2 Information Integrator によってサポートされるデータ・ソースのバージョン番号です。

サーバーのバージョンを変更すれば、DB2 Information Integrator は、ラッパー用にセットアップされたサーバー名にアクセスできるようになります。指定するサーバー・バージョンは、リモート・サーバーのバージョンに一致しなければなりません。例えば、Informix サーバー定義を 9.3 に変更する場合、リモート Informix サーバーのバージョンは 9.3 でなければなりません。バージョンが一致しない場合、サーバー定義内のニックネームにアクセスしようとする、エラーを受け取る可能性があります。

タイプ 1 索引からタイプ 2 索引への変換

DB2 Information Integrator への移行後、次キーロックを最小限に抑えるために、DB2 Information Integrator データベース内のローカル表のタイプ 1 索引をタイプ 2 索引に変換することができます。

1. 索引タイプを判別するには、以下のコマンドを発行します。

```
db2 load query table <table_name>
```

<table_name> は、索引タイプを判別する対象の表の名前です。

索引がタイプ 1 の場合、表に関する出力は以下のようになります。

```
Tablestate:  
Normal  
Type-1 Indexes
```

索引がタイプ 2 の場合、表に関する出力は以下のようになります。

```
Tablestate:  
Normal
```

タイプ 2 の索引を変換する必要はありません。

2. 索引をタイプ 2 に変換するには、以下のコマンドを発行します。

```
db2 reorg indexes all for table <table_name> allow [write | read | no]  
access convert
```

別の方法として、表に対するすべての索引をドロップした後、再び作成することもできます。

DB2 ファミリー・データ・ソースへの接続の再作成

DB2 Universal Database バージョン 7 または DataJoiner バージョン 2.1.1 から DB2 Information Integrator に移行した後、DB2 ファミリーのリモート・データ・ソースにアクセスする必要がある場合には、バインド・ユーティリティーを使ってサーバーからリモート・データ・ソースへの接続を再作成する必要があります。DB2 ファミリーのリモート・データ・ソースには、DB2 Universal Database for UNIX および Windows、DB2 Universal Database for z/OS and OS/390、DB2 Universal Database for iSeries、および DB2 Server for VM and VSE が含まれます。

バインド・ユーティリティーを使って接続を再作成しない場合、-805 エラー・メッセージを受け取ります。

データ・ソースへの接続を再作成するには、以下のようになります。

1. リモート DB2 データ・ソースに接続します。
2. 以下のコマンドを発行します。

```
cd /home/instancename/sqllib/bnd  
db2 bind @db2cli.lst grant public
```

ここで、*instancename* はアクセスするインスタンスの名前です。

3. リモート・データ・ソースから切断します。

アクセス対象のそれぞれの DB2 ファミリー・リモート・データベースごとに、これらのコマンドを発行してください。

パッケージの再バインド

DataJoiner からデータベースだけを移行する場合は、パッケージを再バインドする必要はありません。

移行後に、パッケージを再バインドする必要があります。再バインドのコマンドは、以下のとおりです。

```
rebind package_name
```

DataJoiner for AIX または DataJoiner for Solaris からインスタンスおよびデータベースを移行し、パッケージを再バインドしない場合には、パッケージを実行するとエラー・メッセージを受け取る可能性があります。

データ・ソースへのアクセスに使用されるラッパーの変更

DB2 Information Integrator バージョン 8 は、Oracle データ・ソース用の SQLNET および NET8 ラッパー、Sybase データ・ソース用の DBLIB および CTLIB ラッパーなど、一部のデータ・ソース用に複数のラッパーをサポートしていました。DB2 Information Integrator バージョン 8.2 以降では、Oracle データ・ソース用の SQLNET ラッパー、および Sybase データ・ソース用の DBLIB ラッパーがサポートされなくなりました。

CT-Library プロトコルは SQL ステートメントの動的準備と実行をサポートします。動的準備および実行の機能を使用すれば、CT-Library プロトコルを使用するアプリケーションは、ステートメントを一度だけ作成して、その後はさまざまな入力パラメーターを使って何回でもそのステートメントを実行できます。ステートメントを一度だけ作成すればよいので、入力パラメーターが変わるたびにステートメントを再コンパイルする必要はありません。DB2 アプリケーションが動的 SQL の利点を活用することはありませんが、フェデレーテッド照会処理はもっぱら動的 SQL だけを使用します。

手順:

データ・ソースにアクセスするために使用するラッパーを変更したい場合には、移行後に変更することができます。

使用するラッパーを変更するには、以下のようになります。

1. **db2look** コマンドを実行します。ラッパーをドロップする前に **db2look** コマンドを実行する必要があります。
2. ラッパーをドロップします。
3. 新しいラッパーをフェデレーテッド・データベースに登録します。

ラッパーをドロップすると、そのラッパーに従属するその他のオブジェクトが以下のような影響を受けます。

- そのラッパーに従属するすべてのサーバー定義、ユーザー定義関数マッピング、およびユーザー定義データ・タイプ・マッピングもドロップされます。
- そのラッパーに従属するすべてのサーバー定義をドロップすると、そのサーバー定義に従属するオブジェクトが影響を受けます。ドロップされたサーバー定義に従属するユーザー定義関数マッピング、ユーザー定義データ・タイプ・マッピング、およびユーザー・マッピングもすべてドロップされます。
- ドロップされたサーバー定義に従属するニックネームもすべてドロップされます。そのサーバー定義に従属するすべてのニックネームをドロップすると、そのニックネームに従属するオブジェクトが以下のような影響を受けます。

- ドロップされたニックネームに従属する索引の指定はすべてドロップされま
す。
- ドロップされたニックネームに従属するフェデレーテッド・ビューは、すべて
作動不能としてマークされます。
- ドロップされたオブジェクトと作動不能ビューに従属するすべてのアプリケーシ
ョンは無効になります。

ラッパーを変更するには、すべての SQL ステートメントを手動で再度発行する
か、または **db2look** コマンドを使用して各データ・ソース構成ステートメントに
必要な正しい構文を取得します。

db2look コマンドは、DB2 カタログのメタデータから DDL ステートメントを生成
します。 **db2look** コマンドを使用する場合は、ユーザー固有の情報でステートメ
ントを編集できます。

データ・ソースのラッパーを変更するには、以下のようにします。

1. **db2look** コマンドを発行して、必要な DDL ステートメントを DB2 DDL から
生成します。たとえば、以下のようにします。

```
db2look -d database_name -wrapper wrapper_name -e -o federated.sql
```

このコマンドが作成する `federated.sql` という出力ファイルには、指定したラ
ッパーのすべてのフェデレーテッド・オブジェクトに関する DDL ステートメン
トが含まれます。

2. `federated.sql` ファイルの SQL ステートメントを編集して、新しいラッパー情
報を指定します。
 - 必要であれば、タイプ・マッピング、ニックネーム、および透過 DDL ステ
ートメントの順序を変更します。正しい順序は以下のとおりです。
 - a. ラッパーを作成する。
 - b. サーバー定義を作成する。
 - c. ユーザー・マッピングを作成する。
 - d. ニックネームを作成する (透過 DDL を使用して作成されたりリモート表の
ニックネームを含む)。
 - e. ニックネームを変更してデフォルト・マッピングをオーバーライドする。
 - ラッパー名を変更します。ラッパー名は、`CREATE WRAPPER` ステートメン
トと `CREATE SERVER` ステートメントの両方にあります。デフォルト・ラ
ッパー名を使用すれば、ライブラリー・ファイル名を指定する必要がありませ
ん。デフォルト・ラッパー名を使用しない場合、ラッパー・ライブラリー名が
正しいことを確認してください。ラッパー・ライブラリーはファイル・システ
ムにあります。

UNIX システムでは、ラッパー・ライブラリーはインスタンス所有者用の
`/sqllib/lib` ディレクトリーにあります。Windows システムでは、ラッパー・ラ
イブラリーは `¥SQLLIB¥BIN` ディレクトリーにあります。 `CREATE`
`WRAPPER` ステートメントは、ラッパーの基本ライブラリー、つまりライブ
ラリー名を指定する必要があります。基本ライブラリー名には、'F' (fenced)
や 'U' (unfenced) が含まれません。

- CREATE SERVER ステートメントで AUTHORIZATION および PASSWORD パラメーターが使用される場合、これらのパラメーターに関連付けられる値は、**db2look** コマンドによって生成された SQL では空です。これらのパラメーターには、正しい値を追加する必要があります。
 - 文字の大文字小文字を区別したい場合には、CREATE TYPE MAPPING ステートメントで、二重引用符 (") を使って手動でリモート・データ・タイプを囲みます。生成済みの CREATE TYPE MAPPING ステートメントでは、リモート・データ・タイプが二重引用符で囲まれていません。
 - DB2 Information Integrator バージョン 2 の特定のデータ・ソース用のタイプ・マッピングの中には、DB2 Information Integrator バージョン 1 でのタイプ・マッピングと同じでないものがあります。パラメーター化データ・タイプに関して、空の括弧を使用できるようになりました。移行されたデータベースに対して **db2look** を使用する場合、長さを持たないパラメーター化データ・タイプに対してだけでなく、非パラメーター化データ・タイプに対しても、空の括弧が追加されます。非パラメーター化データ・タイプが含まれる場合には、空の括弧を削除してください。
 - CREATE USER MAPPING ステートメントに正しいパスワードを挿入します。
 - SQL ステートメントをチェックして、WITH CHECK OPTION 文節を使って作成されるローカル・ビューがあるかどうかを確認します。この文節はサポートされなくなりました。federated.sql ファイルから、これらのローカル・ビューを作成する SQL ステートメントを除去します。
3. ドロップする予定のラッパーが、透過 DDL を使用して作成したリモート表にアクセスしている場合は、ラッパーをドロップしたときに、これらのリモート表のニックネームもドロップされます。リモート表のニックネームはもう一度作成しなければなりません。それらのニックネーム用の SQL を federated.sql ファイルに追加できます。
 4. ラッパーをドロップします。
 5. デフォルトでは、GRANT 許可はデータベースに接続されているユーザーのユーザー ID に関連付けられます。このユーザー ID はフェデレーテッド・データベース・システム・カタログに表示されます。別のユーザー ID がカタログに表示されるようにするには、GRANT ステートメントを発行する前に、正しいユーザー ID でデータベースに接続する必要があります。それから、GRANT ステートメントを発行します。
 6. 以下のステップを実行して、クライアント・パスが含まれるように db2dj.ini ファイルを追加または変更します。
 - a. 移行後、データ・ソースへのアクセスを始める前に、新しいライブラリーを DB2 基本ディレクトリーに作成するために djxlink スクリプトを発行し、インスタンスを更新するために **db2iupdt** コマンドを発行する必要があります。
 - b. DB2 Universal Database を再始動します。
 - c. 使用するデータ・ソースのクライアント・パスが含まれるように、db2dj.ini を変更します。
 7. federated.sql ファイルの SQL ステートメントを出して、データ・ソースへのアクセスを構成します。たとえば、以下のようになります。

db2 -tvf federated.sql

8. ラッパーをドロップしたときに無効化されたアプリケーション・パッケージをバインドします。無効化されるパッケージには、ドロップされて再作成されたニックネームを参照する静的 SQL が含まれます。
9. ラッパーをドロップしたときに無効化されたすべてのフェデレーテッド・ビューを再作成します。無効化されたビューは、ドロップされて再作成されたニックネームを参照します。

DB2 Information Integrator 移行後の XML データ・ソースへのアクセス

DB2 コントロール・センターの発見機能によって生成される XML ニックネーム用のデフォルト列名は、DB2 UDB Information Integrator バージョン 8.2 で変更されました。バージョン 8.2 より前のリリースで作成された XML データ・ソース用のニックネームをドロップした後、バージョン 8.2 でニックネームを再び作成した場合、デフォルト列名が異なります。元の列名を参照するように、ニックネーム列名、または他のオブジェクト (例えば SQL 照会) を変更する必要があるかもしれません。

関連タスク:

- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『ニックネームの変更』
- 58 ページの『DB2 Information Integrator に移行後の DB2 ファミリーのデータ・ソースへのアクセス』
- 74 ページの『DB2 Information Integrator に移行後の Documentum データ・ソースへのアクセス』
- 60 ページの『DB2 Information Integrator 移行後の Informix データ・ソースへのアクセス』
- 63 ページの『DB2 Information Integrator 移行後の Microsoft SQL Server データ・ソースへのアクセス』
- 65 ページの『DB2 Information Integrator 移行後の ODBC データ・ソースへのアクセス』
- 67 ページの『DB2 Information Integrator 移行後の Oracle データ・ソースへのアクセス』
- 70 ページの『DB2 Information Integrator 移行後の Sybase データ・ソースへのアクセス』
- 72 ページの『DB2 Information Integrator 移行後の AIX 上の Teradata データ・ソースへのアクセス』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2iupdt - インスタンスの更新コマンド』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『データ・ソース・オブジェクトのローカル・タイプの変更の例』

DB2 Information Integrator への移行後のラージ・オブジェクト・データ・タイプに対する書き込み操作の許可

DB2 Information Integrator に移行した後、リモート・データ・ソースのラージ・オブジェクト・データ・タイプは、アクセス対象のデータ・ソースに応じて CLOB、BLOB、または DBCLOB データ・タイプにマップされます。

Oracle NET8 ラッパーを除いて、フェデレーテッド・サーバーは DB2 CLOB、BLOB、または DBCLOB データ・タイプにニックネームで書き込むことはできません。

DB2 Information Integrator への移行後にこれらのラージ・オブジェクト・データ・タイプに書き込む必要がある場合には、ローカルの CLOB および BLOB データ・タイプ列を VARCHAR および VARCHAR FOR BIT DATA データ・タイプに変更することができます。

CLOB および BLOB データ・タイプを、長さが 32,672 文字以内の VARCHAR データ・タイプに変更できます。32,672 文字を超えるデータが CLOB、BLOB、または DBCLOB データ・タイプに含まれる場合、データは切り捨てられます。

ラージ・オブジェクト・データ・タイプのレプリケーションを使用可能にするには、これらのラージ・オブジェクト・データ・タイプ列に対する書き込み操作を許可する必要があります。DB2 レプリケーションでは、ターゲット表に複製する対象の列値に対する挿入特権および更新特権が必要です。

手順:

ラージ・オブジェクト・データ・タイプに対する書き込み操作を許可するには、ALTER NICKNAME ステートメントを発行します。

たとえば、以下のようになります。

```
ALTER NICKNAME nickname1
ALTER COLUMN column1
LOCAL TYPE VARCHAR(32672)
```

データのサイズ、およびアクセスするデータ・ソースに応じて、ラージ・オブジェクト・データ・タイプを変更しようとする SQL ステートメント警告を受け取る可能性があります。

以下のようにデータ・ソースを変更した場合、ラージ・オブジェクト・データ・タイプへの書き込み操作を許可して、レプリケーションを使用可能にすることができます。

DB2 UDB

DRDA ラッパーは、デフォルトで、リモート LONG VARCHAR および LONG VARCHAR FOR BIT DATA データ・タイプをローカル CLOB、BLOB、および DBCLOB データ・タイプにマップします。これらのローカル CLOB、BLOB、および DBCLOB データ・タイプ列を、長さ 32,672 文字以内の VARCHAR および VARCHAR FOR BIT データ・タイプに変更できます。

Oracle

NET8 ラッパーは、デフォルトで、リモート LONG および LONG RAW データ・タイプをローカル CLOB、BLOB、および DBCLOB データ・タイプにマップします。これらのローカル CLOB、BLOB、および DBCLOB データ・タイプ列を、長さ 32,672 文字以内の VARCHAR および VARCHAR FOR BIT DATA データ・タイプに変更できます。

Informix

INFORMIX ラッパーは、デフォルトで、TEXT データ・タイプと BYTE データ・タイプをローカル CLOB、BLOB、および DBCLOB データ・タイプにマップします。これらのローカル CLOB、BLOB、および DBCLOB データ・タイプ列を、長さ 32,672 文字以内の VARCHAR および VARCHAR FOR BIT DATA データ・タイプに変更できます。

Sybase

CTLIB ラッパーは、デフォルトで、TEXT データ・タイプと IMAGE データ・タイプをローカル CLOB、BLOB、および DBCLOB データ・タイプにマップします。これらのローカル CLOB、BLOB、および DBCLOB データ・タイプ列を、長さ 32,672 文字以内の VARCHAR および VARCHAR FOR BIT DATA データ・タイプに変更できます。

Microsoft SQL Server

DJXMSSQL3 ラッパーと MSSQLODBC3 ラッパーは、TEXT データ・タイプと IMAGE データ・タイプをローカル CLOB、BLOB、および DBCLOB データ・タイプにマップします。これらのローカル CLOB、BLOB、および DBCLOB データ・タイプ列を、長さ 32,672 文字未満の VARCHAR および VARCHAR FOR BIT DATA データ・タイプに変更できます。

Teradata

長さが 32,672 文字を超えるリモート CHAR および VARCHAR データ・タイプは、デフォルトで、ローカル CLOB、BLOB、および DBCLOB データ・タイプにマップされます。32,672 文字を超えるリモート BYTE および VARBYTE データ・タイプはデフォルトで、ローカル BLOB データ・タイプにマップされます。これらのローカル CLOB、BLOB、および DBCLOB データ・タイプ列を、長さ 32,672 文字以内の VARCHAR および VARCHAR FOR BIT DATA データ・タイプに変更できます。

例えば、EMP というリモート表がリモート DB2 Universal Database データ・ソースに存在するとします。EMP 表には、リモート・データ・タイプ LONG VARCHAR の EMP_INFO という列が含まれているとします。リモート表を使用するには、DB2 表 EMP を参照する EMPLOYEE というニックネームを作成します。

このリモート表のニックネームを作成するとき、DRDA ラッパーはデフォルトで、EMP_INFO 列のデータ・タイプをローカル CLOB データ・タイプにマップします。

EMP_INFO 列内のローカル・データに対する書き込み操作を許可してレプリケーションを使用可能にするには、この列のデータ・タイプを CLOB から VARCHAR に変更します。たとえば、以下のようにします。

```
ALTER NICKNAME EMPLOYEE
ALTER COLUMN EMP_INFO
LOCAL TYPE VARCHAR(32672)
```

関連資料:

- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの順方向データ・タイプ・マッピング』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピング』

DB2 Information Integrator に移行後の DB2 ファミリーのデータ・ソースへのアクセス

IBM DataJoiner または DB2 Universal Database バージョン 7 から DB2 Information Integrator に移行した後、以下の手順に従ってください。

前提条件:

DB2 Information Integrator への移行前にアクセスしていたデータベースのサーバー名およびデータベース別名を書き留めてください。

DB2 Information Integrator バージョン 8 DRDA ラッパーは NODE サーバー・オプションを無視しますが、リモート・データベースをデータベース・ディレクトリーにカタログするには、ノード項目がノード・ディレクトリーにカタログされなければなりません。

DataJoiner および DB2 UDB バージョン 7 フェデレーテッド・サーバーは、ローカル・ノード・ディレクトリー項目を DBNAME オプションと突き合わせるために、NODE オプションを使用します。これらのオプションは、リモート・データ・ソースのデータベース別名、ロケーション、またはリモート・データベース名を突き合わせます。DB2 Information Integrator バージョン 8 フェデレーテッド・サーバーは DBNAME オプションだけを使用します。このオプションは、ローカル・データベース・ディレクトリー内のデータベース別名を突き合わせます。

手順:

DB2 Information Integrator への移行後に、DB2 ファミリーのデータ・ソースにアクセスするには、以下のようにします。

1. **list database directory** コマンドを発行して、フェデレーテッド・サーバー・システム・データベース・ディレクトリーに定義されているデータベースの名前を表示します。
2. **list node directory** コマンドを発行して、ノード・ディレクトリーの内容を表示します。
3. **list database directory** コマンドを発行したときに表示されるリモート・ノード名が、ノード・ディレクトリー内の有効なノード項目であることを確認します。
4. データベースだけを移行した場合は、**catalog tcpip node** コマンドを発行します。このコマンドはノード・ディレクトリーに TCP/IP ノード項目を追加して、リモート・ノードにアクセスできるようにします。

たとえば、以下のようにします。

```
CATALOG TCPIP NODE NODENAME1 REMOTE stlxxx1.abc.ibm.com SERVER 10110
```

NODENAME1 はリモート・ノードの名前です。 *stlxxx1.abc.ibm.com* はターゲット・データベースのあるホストの名前です。 *10110* はサーバー・データベース・マネージャー・インスタンスのポート番号です。

5. インスタンスとデータベースを移行したか、それともデータベースだけを移行したかにかかわらず、以下のようにしてデータベースのカタログを作成します。
 - a. **catalog database** コマンドを発行して、フェデレーテッド・システム・データベース・ディレクトリーにリモート・データベース情報をカタログおよび保管します。

たとえば、以下のようにします。

```
CATALOG DATABASE DB_NAME AS ALIAS1 AT NODE NODENAME1
```

DB_NAME は、フェデレーテッド・サーバー・システム・データベース・ディレクトリーにカタログするリモート・データベースの名前です。 *ALIAS1* はカタログするデータベースの別名です。 *NODENAME1* は、このリモート・データベースがあるノードの名前です。

指定するノードの名前は、 **catalog tcpip node** コマンドで追加したノード名と一致している必要があります。

- b. リモート・データベース名が 8 文字より長い場合は、 **catalog dcs database** コマンドを発行します。このコマンドは DCS ディレクトリー項目を作成します。

たとえば、以下のようにします。

```
CATALOG DCS DATABASE ALIAS2 AS DB2_DATABASE_NAME
```

この例で、別名の名前 *ALIAS2* は、カタログするデータベース別名の名前と一致している必要があります。 *DB2_DATABASE_NAME* はターゲット・ホスト・データベースの名前です。

DB2 UDB for z/OS および DB2 UDB for iSeries のデータ・ソースのデータベース名の長さは、通常は 8 文字を超えます。

6. フェデレーテッド・データベース・システム・カタログのサーバー定義を変更して、データベース名を登録します。
 - a. SYSCAT.SERVERS カatalog・ビューで、移行したサーバーの名前を確認します。
 - b. ALTER SERVER ステートメントを発行します。

たとえば、以下のようにします。

```
ALTER SERVER alias_server_name OPTIONS (SET DBNAME 'ALIAS1')
```

alias_server_name は、カatalog・ビューでのリモート・サーバーの別名です。 *ALIAS1* は、カatalogしたデータベースの別名です。

7. 以下のようにして、正常に移行されたことを確認します。
 - a. データベースに接続します。
 - b. データを表示および変更できることを確認するために、ニックネームを使って、SELECT、INSERT、UPDATE、および DELETE ステートメントを発行します。

また、リモート・データベースへのパススルー・セッションを開いて、リモート表に対して SELECT ステートメントを発行することもできます。

DB2 レプリケーション環境の移行についての詳細は、
(<http://www.ibm.com/software/data/integration/db2ii/support.html>) の「*IBM DB2 Information Integrator* 移行ガイド: *SQL* レプリケーション バージョン 8 への移行」を参照してください。

関連タスク:

- 「*IBM DB2 Information Integrator* データ・ソース構成ガイド」の『フェデレーテッド・サーバーへの DB2 ファミリー・データ・ソースの追加』
- 23 ページの『移行前のデータベース情報の記録』

関連資料:

- 77 ページの『DataJoiner の用語およびそれに相当する DB2 Information Integrator の用語』
- 80 ページの『DB2 ファミリーのデータ・ソースについての移行参照情報』
- 81 ページの『DB2 for z/OS and OS/390 データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点』
- 82 ページの『DB2 for iSeries (AS/400) データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点』
- 83 ページの『DB2 for Linux、UNIX、Windows データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点』
- 84 ページの『DB2 for VM and VSE データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点』

DB2 Information Integrator 移行後の Informix データ・ソースへのアクセス

インスタンスとデータベース、またはデータベースのみを移行した場合は、以下の手順に従ってください。

データベースのみを移行した場合には、以下のすべての手順に従ってください。

UNIX オペレーティング・システムのインスタンスとデータベースを移行した場合には、以下の手順の一部のステップだけを実行する必要があるかもしれません。

- INFORMIXDIR 環境変数を設定します。
- djxlink スクリプトまたは djxlinkInformix スクリプトを実行します。
- DB2 UDB インスタンスを再始動します。
- 移行の検査を行います。

インスタンスとデータベースを移行した場合には、システムで変数をどのように設定したか、および DB2 Information Integrator インストール時に djxlink スクリプトまたは djxlinkInformix スクリプトが実行されたかどうかに応じて、以下のステップの一部だけを実行する必要があるかもしれません。

手順:

DataJoiner または DB2 UDB バージョン 7 から DB2 Information Integrator への移行後に Informix データ・ソースにアクセスするには、以下のようになります。

1. Informix サーバーへの接続を検査します。接続情報は、以下の sqlhosts ファイルに入っています。
 - UNIX オペレーティング・システムでは、構成情報は \$INFORMIXDIR/etc/sqlhosts ファイルに保管されています。
 - Windows オペレーティング・システムでは、sqlhosts ファイルは Windows レジストリー HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Informix\SQLHOSTS にあります。
2. 以下のようにして、Informix 環境変数の設定を検査します。
 - a. 以下の場所にある db2dj.ini ファイルを見つけます。
 - UNIX オペレーティング・システムでは、db2dj.ini ファイルは /sqllib/cfg サブディレクトリーにあります。
 - Windows オペレーティング・システムでは、db2dj.ini ファイルは %sqllib%\cfg サブディレクトリーにあります。
 - b. 必要に応じて、db2dj.ini ファイル内の環境変数を設定します。これらの変数は以下のとおりです。

INFORMIXDIR

Informix Client SDK ソフトウェアがインストールされたディレクトリー・パス。たとえば、

```
INFORMIXDIR=/informix/csdk
```

INFORMIXSERVER

デフォルト Informix サーバーの名前。たとえば、

```
INFORMIXSERVER=inf93
```

INFORMIXSERVER 設定値は、sqlhosts ファイル (UNIX) または SQLHOSTS レジストリー・キー (Windows) 内の有効な項目でなければなりません。INFORMIXSERVER 変数の値を決定するには、sqlhosts ファイルを調べて、いずれか 1 つの dbservername 値を選択します。dbservername は、sqlhosts ファイルの各項目の最初の値です。Informix ラッパーはこの変数の値を使用しませんが、Informix クライアントにとっては、この変数が設定されている必要があります。

INFORMIXSQLHOSTS

sqlhosts ファイルのあるパス。sqlhosts ファイルで使用しているパスがデフォルト・パスとは異なる場合に限り、INFORMIXSQLHOSTS 環境変数を設定してください。

- UNIX オペレーティング・システムでは、デフォルト・パスは \$INFORMIXDIR/etc です。
- Windows オペレーティング・システムでは、SQLHOSTS レジストリー・キーがローカル・コンピューターにない場合、INFORMIXSQLHOSTS 値は、そのレジストリーを保管している Windows コンピューターの名前です。

この変数を別のパスに設定する例は、以下のとおりです。

```
INFORMIXSQLHOSTS=/informix/csdk/etc/my_sqlhosts
```

- c. オプションとして、Informix コード・ページ変換のデフォルト値を変更したい場合には、以下の環境変数を設定してください。

- CLIENT_LOCALE 環境変数を Informix のロケールに設定します。たとえば、

```
CLIENT_LOCALE=informix_client_locale_value
```

- DB_LOCALE 環境変数を Informix データベースのロケール名に設定します。たとえば、

```
DB_LOCALE=informix_db_locale_value
```

- この環境変数は、Informix データベースでクライアント・ロケールと異なるコード・ページが使用されており、Informix に 2 つのコード・ページの間の変換を行わせたい場合に設定します。

- DB_LOCALE 設定値が Informix データベースの実際のロケールと一致しているかどうかを Informix ソフトウェアに検証させるには、DBNLS 環境変数を 1 に設定します。たとえば、

```
DBNLS=1
```

3. DB2 Information Integrator を UNIX にインストールしたとき、djxlink スクリプトまたは djxlinkInformix スクリプトが実行されなかった場合には、djxlink スクリプトまたは djxlinkInformix スクリプトを実行する必要があります。djxlink スクリプトの実行についての詳細は、「*IBM DB2 Information Integrator* インストール・ガイド」を参照してください。

4. ステップ 2 で db2dj.ini ファイル内のいずれかの環境変数を変更した場合、またはステップ 3 で djxlink スクリプトまたは djxlinkInformix スクリプトを実行した場合には、以下のように DB2 インスタンスを再始動します。

- a. **db2stop** コマンドを発行します。
- b. djxlink スクリプトまたは djxlinkInformix スクリプトを発行した場合には、**db2iupdt** コマンドを発行します。
- c. **db2start** コマンドを発行します。

DB2 インスタンスを再始動することにより、環境変数の変更内容が適切にフェデレーテッド・サーバーに設定されます。

5. 以下のようにして、正常に移行されたことを確認します。

- a. データベースに接続します。
- b. データを表示および変更できることを確認するために、ニックネームを使って、SELECT、INSERT、UPDATE、および DELETE ステートメントを発行します。

また、リモート・データベースへのパススルー・セッションを開いて、リモート表に対して SELECT ステートメントを直接発行することもできます。

DB2 レプリケーション環境の移行についての詳細は、

(<http://www.ibm.com/software/data/integration/db2ii/support.html>) の「*IBM DB2 Information Integrator* マイグレーション・ガイド」を参照してください。

関連タスク:

- 「*IBM DB2 Information Integrator* データ・ソース構成ガイド」の『フェデレーテッド・サーバーへの Informix データ・ソースの追加』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2iupdt - インスタンスの更新コマンド』
- 77 ページの『DataJoiner の用語およびそれに相当する DB2 Information Integrator の用語』
- 88 ページの『Informix データ・ソースについての移行参照情報』

DB2 Information Integrator 移行後の Microsoft SQL Server データ・ソースへのアクセス

インスタンスとデータベース、またはデータベースのみを移行した場合は、以下の手順に従ってください。データベースのみを移行した場合には、以下のすべての手順に従ってください。UNIX オペレーティング・システムのインスタンスとデータベースを移行した場合には、この手順の一部のステップだけを実行する必要があるかもしれません。以下のステップを実行する必要があるかもしれません。

- djxlink スクリプトまたは djxlinkMssql スクリプトを実行します。
- DB2 インスタンスを再始動します。
- 移行の検査を行います。

インスタンスとデータベースを移行した場合、DB2 Information Integrator インストール時に djxlink スクリプトまたは djxlinkMssql スクリプトが実行されなかったならば、以下のステップを実行する必要があるかもしれません。

DB2 Information Integrator バージョン 1 から移行されるデータ・タイプ・マッピング: DB2 Information Integrator バージョン 2 での Microsoft SQL Server データ・ソース用のデータ・タイプ・マッピングの中には、DB2 Information Integrator バージョン 1 と同じでないものがあります。Unicode フェデレーテッド・データベース内の以下のデータ・タイプ・マッピングが変更されました。

- NCHAR
- NVARCHAR
- NTEXT

DB2 Information Integrator バージョン 1 のすべてのデータ・タイプ・マッピングは、DB2 Information Integrator バージョン 1 での現状のまま DB2 Information Integrator バージョン 2 に移行されます。ただし、DB2 Information Integrator バージョン 1 で作成された Microsoft SQL Server データ・ソース用のニックネームをドロップした後、DB2 Information Integrator バージョン 2 を使ってニックネームを再作成した場合には、データ・タイプ・マッピングが新しくなります。DB2 Information Integrator バージョン 1 の NCHAR、NVARCHAR、または NTEXT のデータ・タイプ・マッピングを使用する必要がある場合には、順方向データ・タイプ・マッピングを作成するか、ニックネームの列データ・タイプを変更する必要があります。

手順:

DataJoiner または DB2 UDB バージョン 7 から DB2 Information Integrator への移行後に Microsoft SQL Server データ・ソースにアクセスするには、以下のようになります。

1. 以下のようにして、Microsoft SQL Server データ・ソース用の環境変数の設定を
チェックします。
 - a. 以下の場所にある db2dj.ini ファイルを見つけます。
 - UNIX オペレーティング・システムでは、db2dj.ini ファイルは /sqllib/cfg
サブディレクトリーにあります。
 - Windows オペレーティング・システムでは、db2dj.ini ファイルは
¥sqllib¥cfg サブディレクトリーにあります。
 - b. 必要に応じて、db2dj.ini ファイル内の環境変数を設定します。これらの変数
は以下のとおりです。

ODBCINI

ODBC データ・ソース構成ファイルへの絶対パス (.odbc.ini)。
.odbc.ini ファイルには、アクセス対象となる ODBC データ・ソース
のリスト、各データ・ソース用に使用される ODBC ドライバー・ラ
イブラリー、および各データ・ソース用の接続情報 (たとえば
hostname/ipaddress やリスナー・ポート) が含まれます。たとえば、
ODBCINI=/home/db2inst1/.odbc.ini

DJX_ODBC_LIBRARY_PATH

ODBC ライブラリー・ファイルが格納されているディレクトリー・
パス。たとえば、
DJX_ODBC_LIBRARY_PATH=ODBC_home_directory/lib

ODBC_home_directory は、ODBC ドライバーがインストールされて
いるディレクトリー・パスです。

LD_LIBRARY_PATH

Solaris オペレーティング環境で、ODBC ライブラリー・ファイルが
格納されているディレクトリー・パス。たとえば、
LD_LIBRARY_PATH=ODBC_home_directory/lib

SHLIB_PATH

HP-UX オペレーティング・システムで、ODBC ライブラリー・フ
ァイルが格納されているディレクトリー・パス。たとえば、
SHLIB_PATH=ODBC_home_directory/lib

2. UNIX オペレーティング・システムの場合、DB2 プロファイル・レジストリー
変数を設定します。変数を設定するには、**db2set** コマンドを発行します。

たとえば、

```
db2set DB2LIBPATH=ODBC_home_directory/lib
db2set DB2ENVLIST=LIBPATH
```

ODBC_home_directory は、ODBC ドライバーがインストールされているディレ
クトリー・パスです。

3. 以下のようにして、Microsoft SQL Server 構成を確認します。
 - UNIX オペレーティング・システムの場合、/opt/odbc/odbc.ini ファイルが適切
にセットアップされていることを確認します。Microsoft SQL Server データ・
ソースへの接続をテストするには、DataDirect Connect に付属の demoodbc ツ
ールを使用してください。

- Windows オペレーティング・システムの場合、ODBC システム DSN が適切にセットアップされていることを確認します。Microsoft SQL Server データ・ソースへの接続をテストするには、ODBC データ・ソースにアクセス可能な照会ツールを使用するか、Microsoft SQL Server ODBC ドライバー・データ・ソース構成ウィンドウ内の接続テストを使用してください。

4. 以下のようにして、正常に移行されたことを確認します。

- a. データベースに接続します。
- b. データを表示および変更できることを確認するために、ニックネームを使って、SELECT、INSERT、UPDATE、および DELETE ステートメントを発行します。

また、リモート・データベースへのパススルー・セッションを開いて、リモート表に対して SELECT ステートメントを発行することもできます。

DB2 レプリケーション環境の移行についての詳細は、

(<http://www.ibm.com/software/data/integration/db2ii/support.html>) の「*IBM DB2 Information Integrator* 移行ガイド: *SQL* レプリケーション バージョン 8 への移行」を参照してください。

関連タスク:

- 「*IBM DB2 Information Integrator* データ・ソース構成ガイド」の『フェデレーテッド・サーバーへの Microsoft SQL Server データ・ソースの追加』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2iupdt - インスタンスの更新コマンド』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『Unicode のデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピング - Microsoft SQL Server ラッパー』
- 77 ページの『DataJoiner の用語およびそれに相当する DB2 Information Integrator の用語』
- 90 ページの『Microsoft SQL Server データ・ソースについての移行参照情報』

DB2 Information Integrator 移行後の ODBC データ・ソースへのアクセス

アクセス対象のデータ・ソース固有のラッパー (たとえば Oracle データ・ソース用の NET8) が存在しない場合、ODBC ラッパーを使用してデータ・ソースにアクセスすることができます。

インスタンスとデータベース、またはデータベースのみを移行した場合は、以下の手順に従ってください。

UNIX オペレーティング・システムで ODBC データ・ソースにアクセスする場合にのみ、以下の手順に従ってください。Windows オペレーティング・システムで ODBC データ・ソースにアクセスする場合は、移行後のステップを行う必要はありません。

DB2 Information Integrator バージョン 1 から移行されるデータ・タイプ・マッピング: DB2 Information Integrator バージョン 2 での ODBC データ・ソース用の

データ・タイプ・マッピングの中には、DB2 Information Integrator バージョン 1 と同じでないものがあります。Unicode フェデレーテッド・データベース内の以下のデータ・タイプ・マッピングが変更されました。

- SQL_WCHAR
- SQL_WVARCHAR
- SQL_WLONGVARCHAR

DB2 Information Integrator バージョン 1 のすべてのデータ・タイプ・マッピングは、DB2 Information Integrator バージョン 1 での現状のまま DB2 Information Integrator バージョン 2 に移行されます。ただし、DB2 Information Integrator バージョン 1 で作成された ODBC データ・ソース用のニックネームをドロップした後、DB2 Information Integrator バージョン 2 を使ってニックネームを再作成した場合には、データ・タイプ・マッピングが新しくなります。DB2 Information Integrator バージョン 1 の SQL_WCHAR、SQL_WVARCHAR、または SQL_WLONGVARCHAR のデータ・タイプ・マッピングを使用する必要がある場合には、順方向データ・タイプ・マッピングを作成するか、ニックネームの列データ・タイプを変更する必要があります。

前提条件:

DataJoiner で透過 DDL を使用して ODBC データ・ソース上にリモート表を作成していた場合、DB2 Information Integrator への移行後に SELECT ステートメントに関するエラーを受け取る可能性があります。DataJoiner でリモート ODBC 表を作成するとき、DataJoiner の DATE データ・タイプは ODBC DATETIME データ・タイプにマップされます。このようなエラーを防ぐには、移行後に、フェデレーテッド・データベース・システム・カタログでローカル・データ・タイプを DATE から TIMESTAMP に変更してください。

手順:

DataJoiner または DB2 Universal Database バージョン 7 から DB2 Information Integrator への移行後に、ODBC データ・ソースにアクセスするには、以下のようになります。

1. データベースのみを移行した場合には、sqllib/cfg/db2dj.ini ファイル内で適切な環境変数を設定します。

たとえば、Data Direct Connect for ODBC を使用してデータ・ソースを構成する場合には、以下の環境変数を設定します。

- ODBCINI
- LD_LIBRARY_PATH (Solaris オペレーティング環境のみ)
- SHLIB_PATH (HP-UX オペレーティング・システムのみ)

AIX では、**db2set** コマンドを発行して DB2LIBPATH 環境変数を設定します。

2. ALTER WRAPPER ステートメントを発行して MODULE オプションを指定します。UNIX オペレーティング・システムで ODBC ラッパーを使用可能にするには、MODULE オプションを指定する必要があります。AIX オペレーティング・システムの場合、共有オブジェクト・メンバー名を括弧で囲みます。たとえば、

```
ALTER WRAPPER ODBC
OPTIONS ( add MODULE '/opt/odbc/lib/libodbc.a(odbc.so)' );
```

この例の `libdb2codbc.a` は、ラッパー・モジュールを含むファイルです。
`/opt/odbc/lib/libodbc.a` は、ODBC Driver Manager ライブラリーが入っている
AIX 上のディレクトリーの完全修飾パスです。`(odbc.so)` は、ライブラリー内の
適切なメンバーです。ラッパー・オプション `MODULE` は、ODBC Driver
Manager ライブラリーの絶対パスを指定します。

3. 以下のようにして、正常に移行されたことを確認します。
 - a. データベースに接続します。
 - b. データを表示および変更できることを確認するために、ニックネームを使っ
て、`SELECT`、`INSERT`、`UPDATE`、および `DELETE` ステートメントを発行
します。

また、リモート・データベースへのパススルー・セッションを開いて、リモート
表に対して `SELECT` ステートメントを発行することもできます。

関連タスク:

- 「*IBM DB2 Information Integrator データ・ソース構成ガイド*」の『フェデレーテ
ッド・サーバーへの ODBC データ・ソースの追加』

関連資料:

- 「*コマンド・リファレンス*」の『`db2look` - DB2 統計および DDL 抽出ツール・
コマンド』
- 「*フェデレーテッド・システム・ガイド*」の『Unicode のデフォルトの順方向デ
ータ・タイプ・マッピング - ODBC ラッパー』
- 77 ページの『`DataJoiner` の用語およびそれに相当する DB2 Information Integrator
の用語』
- 92 ページの『ODBC データ・ソースについての移行参照情報』

DB2 Information Integrator 移行後の Oracle データ・ソースへのアクセ ス

インスタンスとデータベース、またはデータベースのみを移行した場合は、以下の
手順に従ってください。

データベースのみを移行した場合には、以下のすべての手順に従ってください。

UNIX オペレーティング・システムのインスタンスとデータベースを移行した場合
には、以下の手順の一部のステップだけを実行する必要があるかもしれません。実
行すべきステップは、たとえば以下のとおりです。

- `djxlink` スクリプトまたは `djxlinkOracle` スクリプトの実行
- DB2 インスタンスの再始動
- 移行の検証

インスタンスとデータベースを移行した場合、DB2 Information Integrator インスト
ール時に `djxlink` スクリプトまたは `djxlinkOracle` スクリプトが実行されなかったな
らば、以下のステップを実行する必要があるかもしれません。

手順:

DataJoiner または DB2 UDB バージョン 7 から DB2 Information Integrator への移行後に、NET8 ラッパーまたは SQLNET ラッパーを使用して Oracle データ・ソースにアクセスするには、以下のようにします。

1. 以下のようにして、Oracle 環境変数の設定をチェックします。
 - a. 以下の場所にある db2dj.ini ファイルを見つけます。
 - UNIX オペレーティング・システムでは、db2dj.ini ファイルは /sqllib/cfg サブディレクトリーにあります。
 - Windows オペレーティング・システムでは、db2dj.ini ファイルは %sqllib%\cfg サブディレクトリーにあります。
 - b. 必要に応じて、db2dj.ini ファイル内の環境変数を設定します。これらの変数は以下のとおりです。

ORACLE_HOME

Oracle クライアント・ソフトウェアがインストールされている完全修飾ディレクトリー・パス。たとえば、

```
ORACLE_HOME=/usr/oracle/8.1.7
```

/usr/oracle/8.1.7 は、Oracle ホーム・ディレクトリーの完全修飾パスです。この環境変数は必須です。

ORACLE_BASE

Oracle クライアント・ディレクトリー・ツリーのルート。たとえば、

```
ORACLE_BASE=oracle_root_directory
```

ORA_NLS

使用中の Oracle バージョンのロケーション固有データが保管されているディレクトリー。たとえば、

```
ORACLE_NLS33=oracle_root_directory/ocommon/nls/admin/data
```

この例では、Oracle 8.1 データ・ソースにアクセスする UNIX フェデレーテッド・サーバー上の

oracle_root_directory/ocommon/nls/admin/data ディレクトリーにロケーション固有データが保管されています。

TNS_ADMIN

tnsnames.ora ファイルが保管されているディレクトリー。

tnsnames.ora の場所がデフォルトの場所と異なる場合にのみ、このパラメーターを設定してください。

- UNIX オペレーティング・システムでは、tnsnames.ora ファイルのデフォルトの場所は /etc ディレクトリーです。このパラメーターが必要とされるのは、使用される tnsnames.ora ファイルが /etc ディレクトリーの \$ORACLE_HOME/network/admin ディレクトリー内に存在しない場合だけです。
- Windows オペレーティング・システムでは、tnsnames.ora ファイルのデフォルトの場所は %NETWORK%\ADMIN ディレクトリーです。

たとえば、

TNS_ADMIN=tnsnames.ora_directory

2. UNIX オペレーティング・システムのみ: 以下のコマンドを発行することにより、Oracle 環境変数を使って DB2 インスタンスの .profile ファイルの内容を更新します。

```
export ORACLE_HOME=oracle_home_directory
```

oracle_home_directory は、Oracle クライアント・ソフトウェアがインストールされているディレクトリーです。

3. 以下のように入力して、DB2 インスタンス .profile を実行します。

```
..profile
```

4. DB2 Information Integrator を UNIX オペレーティング・システムにインストールしたとき、djxlink スクリプトまたは djxlinkOracle スクリプトが実行されなかった場合には、djxlink スクリプトまたは djxlinkOracle スクリプトを実行する必要があります。

5. ここまでのステップでいずれかの環境設定を変更した場合、またはステップ 4 で djxlink スクリプトまたは djxlinkOracle スクリプトだけを実行した場合には、以下のようにして、DB2 インスタンスを再始動します。

- a. **db2stop** コマンドを発行します。
- b. djxlink スクリプトまたは djxlinkOracle スクリプトを発行した場合には、**db2iupdt** コマンドを発行します。
- c. **db2start** コマンドを発行します。

DB2 インスタンスを再始動することにより、環境変数の変更内容が適切にフェデレーテッド・サーバーに設定されます。

6. Oracle クライアント構成ファイル (tnsnames.ora および sqlnet.ora) をセットアップしてテストします。Oracle サーバーとの接続をテストするには、Oracle sqlplus を使用します。

7. 以下のようにして、正常に移行されたことを確認します。

- a. データベースに接続します。
- b. データを表示および変更できることを確認するために、ニックネームを使って、SELECT、INSERT、UPDATE、および DELETE ステートメントを発行します。

また、リモート・データベースへのパススルー・セッションを開いて、リモート表に対して SELECT ステートメントを発行することもできます。

DB2 レプリケーション環境の移行についての詳細は、

(<http://www.ibm.com/software/data/integration/db2ii/support.html>) の「*IBM DB2 Information Integrator 移行ガイド: SQL レプリケーション バージョン 8 への移行*」を参照してください。

関連タスク:

- 「*IBM DB2 Information Integrator データ・ソース構成ガイド*」の『フェデレーテッド・サーバーへの Oracle データ・ソースの追加』

関連資料:

- 「*コマンド・リファレンス*」の『db2iupdt - インスタンスの更新コマンド』

- 77 ページの『DataJoiner の用語およびそれに相当する DB2 Information Integrator の用語』
- 85 ページの『Oracle データ・ソースについての移行参照情報』
- 86 ページの『Oracle SQLNET のデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点』
- 87 ページの『Oracle NET8 のデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点』

DB2 Information Integrator 移行後の Sybase データ・ソースへのアクセス

インスタンスとデータベース、またはデータベースのみを移行した場合は、以下の手順に従ってください。

データベースのみを移行した場合には、以下のすべての手順に従ってください。

UNIX システムのインスタンスおよびデータベースを移行した場合には、`interfaces` ファイルをリストアするためにステップ 1 を実行する必要があります。さらに、追加のステップを実行する必要があるかもしれません。

インスタンスとデータベースの両方を移行した場合には、`SYBASE_OCS` 環境変数の設定後、または `djxlink` スクリプトか `djxlinkSybase` スクリプトの実行後に、ステップ 6 でインスタンスを再始動して、ステップ 7 で移行を検証する必要があります。

手順:

DataJoiner または DB2 Universal Database バージョン 7 から DB2 Information Integrator への移行後に、Sybase データ・ソースにアクセスするには、以下のようになります。

1. フェデレーテッド・データベース・インスタンスから、DB2 Information Integrator への移行前にコピーした `interfaces` ファイルをリストアします。このリストアしたファイルを、`$HOME/sqllib` ディレクトリーに保管します。
2. 以下のようにして、Sybase データ・ソース用の環境変数の設定をチェックします。
 - a. 以下の場所にある `db2dj.ini` ファイルを見つけます。
 - UNIX システムでは、`db2dj.ini` ファイルは `/sqllib/cfg` サブディレクトリーにあります。
 - Windows オペレーティング・システムでは、`db2dj.ini` ファイルは `¥sqllib¥cfg` サブディレクトリーにあります。
 - b. 必要に応じて、`db2dj.ini` ファイル内の環境変数を設定します。これらの変数は以下のとおりです。

SYBASE

Sybase Open Client ソフトウェアがインストールされているディレクトリー・パス。たとえば、

`SYBASE=/sybase`

SYBASE_OCS

Sybase Open Client バージョン 12 以上を使用している場合、SYBASE_OCS 環境変数として OCS ディレクトリーの名前を設定します。たとえば、

```
SYBASE_OCS=OCS-12_5
```

3. 以下のコマンドを発行することにより、SYBASE および SYBASE_OCS 環境変数を使って DB2 インスタンスの .profile ファイルの内容を更新します。

```
export SYBASE=sybase_home_directory
export SYBASE_OCS=sybase_ocs_directory
export PATH=$SYBASE/$SYBASE_OCS/bin:$PATH
```

sybase_home_directory は、Sybase Open Client ソフトウェアがインストールされているディレクトリーです。 *sybase_ocs_directory* は OCS ディレクトリーの名前です。Sybase Open Client バージョン 12 以降を使用する場合には、これが必要です。

4. 以下のように入力して、DB2 インスタンス .profile を開始します。

```
..profile
```

5. DB2 Information Integrator を UNIX システムにインストールしたとき、djxlink スクリプトまたは djxlinkSybase スクリプトが実行されなかった場合には、djxlink スクリプトまたは djxlinkSybase スクリプトを実行する必要があります。

6. ここまでのステップでいずれかの環境設定を変更した場合、またはステップ 5 で djxlink スクリプトまたは djxlinkSybase スクリプトだけを実行した場合には、以下のようにして、DB2 インスタンスを再始動します。

- a. **db2stop** コマンドを発行します。
- b. djxlink スクリプトまたは djxlinkSybase スクリプトを発行した場合には、**db2iupdt** コマンドを発行します。
- c. **db2start** コマンドを発行します。

DB2 インスタンスを再始動することにより、環境変数の変更内容が適切にフェデレーテッド・サーバーに設定されます。

7. 以下のようにして、正常に移行されたことを確認します。

- a. データベースに接続します。
- b. データを表示および変更できることを確認するために、ニックネームを使って、SELECT、INSERT、UPDATE、および DELETE ステートメントを発行します。

また、リモート・データベースへのパススルー・セッションを開いて、リモート表に対して SELECT ステートメントを発行することもできます。

DB2 レプリケーション環境の移行についての詳細は、

(<http://www.ibm.com/software/data/integration/db2ii/support.html>) の「*IBM DB2 Information Integrator 移行ガイド: SQL レプリケーション バージョン 8 への移行*」を参照してください。

関連タスク:

- 「*IBM DB2 Information Integrator データ・ソース構成ガイド*」の『フェデレーテッド・サーバーへの Sybase データ・ソースの追加』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2iupdt - インスタンスの更新コマンド』
- 77 ページの『DataJoiner の用語およびそれに相当する DB2 Information Integrator の用語』
- 89 ページの『Sybase データ・ソースについての移行参照情報』

DB2 Information Integrator 移行後の AIX 上の Teradata データ・ソースへのアクセス

インスタンスとデータベース、またはデータベースのみを移行した場合は、以下の手順に従ってください。

データベースのみを移行した場合には、以下のすべての手順に従ってください。

インスタンスとデータベースの両方を移行した場合には、以下の手順の一部のステップだけを実行する必要があるかもしれません。実行すべきステップは、たとえば以下のとおりです。

- djxlink スクリプトまたは djxlinkTeradata スクリプトの実行
- DB2 インスタンスの再始動
- 移行の検証

インスタンスとデータベースを移行した場合、DB2 Information Integrator インストール時に djxlink スクリプトまたは djxlinkTeradata スクリプトが実行されなかったならば、以下のステップを実行する必要があるかもしれません。

前提条件:

Teradata ラッパーをすでに使用している場合、以下のいずれかの手順に従って、Teradata リリース V2R5 にアップグレードできます。

- 既存の Teradata ラッパー構成を変更する。
- サーバー、ユーザー・マッピング、タイプ・マッピング、関数マッピング・およびニックネームに関する Teradata ラッパー構成全体を再作成する。

既存の Teradata ラッパー構成を変更するには、以下のようになります。

1. 以下のように ALTER SERVER を使用することにより、すべての Teradata サーバーで Teradata サーバー製品バージョンを 2.5 に変更します。

```
ALTER SERVER MYTERASERVER VERSION 2.5
```

2. 以下のように ALTER NICKNAME を使用することにより、すべての Teradata ニックネームの TUPLE_ID_TYPE ニックネーム・オプションを除去します。

```
ALTER NICKNAME TERANICKNAME OPTIONS (DROP TUPLE_ID_TYPE)
```

変更する必要があるすべてのニックネームをリストするために、以下の SQL ステートメントを使用します。すると、TERADATA サーバー・タイプに関連付けられたすべてのニックネームのニックネーム・オブジェクト名、サーバー・オブジェクト名、およびサーバー・バージョンが戻されます。

```
SELECT T.tabname, S.servername, S.serverversion
FROM syscat.servers AS S, syscat.taboptions AS T
WHERE T.option = 'SERVER' AND S.servername = T.setting
AND S.servertype = 'TERADATA' AND S.serverversion
IN ( '2.3', '2.4', '3', '4' )
```

Teradata ラッパー構成の全体を再作成するには、以下のようにします。

1. **db2look** コマンドを使用して、それぞれのデータ・ソース構成ステートメントの正しい構文を表示します。 **db2look** コマンドは、DB2 カタログ内のメタデータから DDL ステートメントを生成します。
2. **db2look** コマンドの出力ファイル内で、すべてのサーバー・オブジェクトに関する Teradata 製品バージョンを 2.5 に変更します。
3. Teradata ラッパーをドロップします。

ラッパーをドロップすると、そのラッパーに従属するすべてのサーバー定義、ユーザー定義関数マッピング、およびユーザー定義データ・タイプ・マッピングがドロップされます。さらに、ドロップされたサーバー定義に従属するユーザー定義関数マッピング、ニックネーム、ユーザー定義データ・タイプ・マッピング、およびユーザー・マッピングもすべてドロップされます。ドロップされたオブジェクトと作動不能ビューに従属するすべてのパッケージは、無効になります。

4. 必要に応じて、ドロップされたラッパーに関連したタイプ・マッピングおよび関数マッピングをドロップしてください。 **DROP** ステートメントは、ラッパーに明示的または暗黙的に関連付けられたオブジェクトだけをドロップします。ドロップされたラッパーの名前にその他のオブジェクトが関連付けられている場合、これらのオブジェクトを手動でドロップする必要があります。
5. Teradata へのアクセスを再構成するために、**db2look** 出力ファイル内の SQL ステートメントを発行します。たとえば、出力ファイルの名前が `teradata.sql` であれば、以下のコマンドを発行します。

```
db2 -tvf teradata.sql
```

6. ラッパーをドロップしたときに無効になったアプリケーション・パッケージをバインドします。

手順:

DataJoiner から DB2 Information Integrator への移行後に Teradata データ・ソースにアクセスするには、以下のようにします。

1. 以下のようにして、Teradata データ・ソース用の環境変数の設定をチェックします。
 - a. `sqllib/cfg` サブディレクトリーにある `db2dj.ini` ファイルを見つけます。
 - b. 必要に応じて、`db2dj.ini` ファイル内の環境変数を設定します。これらの変数は以下のとおりです。

COPERR

`errmsg.txt` ファイルが保管されているディレクトリー。たとえば、
`COPERR=coperr_directory`

COPLIB

Teradata 共有ライブラリー・ファイル `libcliv2.so` が保管されているディレクトリー。たとえば、
`COPLIB=coplib_directory`

`libcliv2.so` ファイルと `errmsg.txt` ファイルは、通常は同じディレクトリーにあります。デフォルト・ディレクトリーは、AIX オペレーティング・システムでは `/usr/lib` です。

2. DB2 Information Integrator のインストール時に djxlink スクリプトまたは djxlinkTeradata スクリプトが実行されなかった場合には、djxlink スクリプトまたは djxlinkTeradata スクリプトを実行する必要があります。
3. ステップ 1 で db2dj.ini ファイル内のいずれかの環境変数を変更した場合、またはステップ 2 で djxlink スクリプトまたは djxlinkTeradata スクリプトを実行した場合には、以下のようにして DB2 インスタンスを再始動します。
 - a. **db2stop** コマンドを発行します。
 - b. djxlink スクリプトまたは djxlinkTeradata スクリプトを発行した場合には、**db2iupdt** コマンドを発行します。
 - c. **db2start** コマンドを発行します。DB2 インスタンスを再始動することによって、環境変数の変更内容が適切にフェデレーテッド・サーバーに設定されます。
4. Teradata BTEQ 照会ツールを使用して、Teradata サーバーへの接続をテストします。
5. 以下のようにして、正常に移行されたことを確認します。
 - a. データベースに接続します。
 - b. データを表示および変更できることを確認するために、ニックネームを使って、SELECT、INSERT、UPDATE、および DELETE ステートメントを発行します。また、リモート・データベースへのパススルー・セッションを開いて、リモート表に対して SELECT ステートメントを発行することもできます。

関連タスク:

- 「*IBM DB2 Information Integrator データ・ソース構成ガイド*」の『フェデレーテッド・サーバーへの Teradata データ・ソースの追加』

関連資料:

- 「*コマンド・リファレンス*」の『db2iupdt - インスタンスの更新コマンド』
- 77 ページの『DataJoiner の用語およびそれに相当する DB2 Information Integrator の用語』
- 94 ページの『Teradata データ・ソースについての移行参照情報』

DB2 Information Integrator に移行後の Documentum データ・ソースへのアクセス

DB2 Information Integrator への移行後、Documentum データ・ソースにアクセスするには、まず環境設定を確認し、フェデレーテッド・サーバーが Documentum ライブラリーを使用できるようにする必要があります。

手順:

DB2 Information Integrator への移行後に、Documentum データ・ソースにアクセスするには、以下のようにします。

1. db2dj.ini ファイル内の DOCUMENTUM または DMCL_CONFIG 環境変数設定が、移行前の設定と同じであることを確認してください。

2. 以下の例は、UNIX オペレーティング・システムを使用するフェデレーテッド・サーバーでのこれらの変数の設定を示しています。

```
DOCUMENTUM=<path>  
DMCL_CONFIG=<path>/dmcl.ini
```

<path> は、使用する dmcl.ini ファイルを含む完全修飾ディレクトリーです。

Documentum dmcl.ini ファイルの場所のデフォルト・パスは /pkgs/documentum です。両方の行が含まれる場合、DMCL_CONFIG 設定が使用されます (Windows オペレーティング・システムでは、dmcl.ini ファイルの場所の定義には、スラッシュではなく円記号が使用されます)。

AIX および Solaris オペレーティング環境では、db2dj.ini ファイルは \$HOME/sql1lib/cfg にあります。Windows では、db2dj.ini ファイルは x:%sql1lib %cfg にあります。

3. クライアント・ライブラリーを適切なディレクトリーにコピーして、Documentum クライアント・ライブラリーをフェデレーテッド・サーバーが使用できるようにします。さらに、クライアント・ライブラリーを適切なディレクトリーにリンクさせるシンボリック・リンクを作成することもできます。

関連タスク:

- 「*IBM DB2 Information Integrator* データ・ソース構成ガイド」の『フェデレーテッド・サーバーへの Documentum データ・ソースの追加』

関連資料:

- 「*IBM DB2 Information Integrator* データ・ソース構成ガイド」の『Documentum ラッパーのライブラリー・ファイル』

第 6 章 DataJoiner バージョン 2.1.1 からの移行参照情報

この章では、DataJoiner バージョン 2.1.1 から DB2 Information Integrator への移行後に利用できる参照情報を示します。以下のトピックがあります。

- 『一般的な移行参照情報』
- 80 ページの『DB2 ファミリーのデータ・ソースについての移行参照情報』
- 85 ページの『Oracle データ・ソースについての移行参照情報』
- 88 ページの『Informix データ・ソースについての移行参照情報』
- 89 ページの『Sybase データ・ソースについての移行参照情報』
- 90 ページの『Microsoft SQL Server データ・ソースについての移行参照情報』
- 91 ページの『Microsoft SQL Server データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点』
- 92 ページの『ODBC データ・ソースについての移行参照情報』
- 93 ページの『ODBC データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点』
- 94 ページの『Teradata データ・ソースについての移行参照情報』

一般的な移行参照情報

このセクションでは、DataJoiner と DB2 Information Integrator 製品の間で概念上、および用語上の相違点を示します。これには以下のトピックがあります。

- 『DataJoiner の用語およびそれに相当する DB2 Information Integrator の用語』
- 78 ページの『DataJoiner カタログの変換』

DataJoiner の用語およびそれに相当する DB2 Information Integrator の用語

以下の表は、DataJoiner の用語およびそれに相当する DB2 Information Integrator の用語を示しています。

表 2. DataJoiner の用語およびそれに相当する DB2 Information Integrator の用語

DataJoiner の用語	DB2 Information Integrator の用語
データ・アクセス・モジュール (DAM)	ラッパー
DataJoiner カタログ	グローバル・カタログ (フェデレーテッド・データベース・システム・カタログと呼ばれることもある)
DataJoiner データベース	フェデレーテッド・データベース
DataJoiner サーバー	フェデレーテッド・サーバー
プロトコル	ラッパー
リモート表	データ・ソース・オブジェクト (表、ビュー、シノニム、およびその他の非リレーショナル・オブジェクトを含む)
サーバー・マッピング	サーバー定義

関連概念:

- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『フェデレーテッド・データベース』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『ラッパーおよびラッパー・モジュール』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『サーバー定義およびサーバー・オプション』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『フェデレーテッド・サーバー』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『フェデレーテッド・データベース・システム・カタログ』

DataJoiner カタログの変換

DataJoiner 環境では、DataJoiner カタログの表に、データ・ソース・オブジェクトに関する情報が入っています。

DB2 Information Integrator では、フェデレーテッド・データベース・システム・カタログの表に、データ・ソース・オブジェクトに関する情報が入っています。DB2 フェデレーテッド・データベース・システム・カタログは、グローバル・カタログと呼ばれます。

以下の表では、DataJoiner と DB2 Information Integrator におけるすべてのデータ・ソース・オブジェクト、および DataJoiner とグローバル・カタログにある対応する表の場所を示しています。

表3. DataJoiner と DB2 Information Integrator にあるデータ・ソース・オブジェクトおよびカタログ情報表

データ・ソース・オブジェクト	DataJoiner カタログ表	グローバル・カタログ表
列	syscat.columns	syscat.columns
列オプション	該当なし	syscat.coloptions
関数マッピング ¹	syscat.server_functions	syscat.funcmappings
ニックネームに関する索引	syscat.indexes	syscat.indexes
ニックネーム	syscat.tables	syscat.tables
ニックネーム・オプション	該当なし	syscat.taboptions
パススルー特権	syscat.passthru_auth	syscat.passthruauth
パッケージ	syscat.packages	syscat.packages
パッケージ従属関係	syscat.packagedep	syscat.packagedep
逆方向タイプ・マッピング	syscat.revtypemappings	syscat.revtypemappings
サーバー	syscat.servers	syscat.servers
サーバー・オプション	syscat.server_options	syscat.serveroptions
ストアド・プロシージャのニックネーム	syscat.procedures	該当なし
タイプ・マッピング	syscat.server_datatypes	syscat.typemappings

表3. DataJoiner と DB2 Information Integrator にあるデータ・ソース・オブジェクトおよびカタログ情報表 (続き)

データ・ソース・オブジェクト	DataJoiner カタログ表	グローバル・カタログ表
ユーザー・マッピング	syscat.remoteusers	syscat.useroptions
ラッパー	該当なし	syscat.wrappers

1

DataJoiner カタログ内の 1 つの表に保管されているすべての情報が、グローバル・カタログ内の対応する 1 つの表にあるわけではありません。グローバル・カタログでは、データ・ソース・オブジェクト情報を、同じデータ・ソース・オブジェクトに関連付けられる複数の表に保管することができます。たとえば、DataJoiner カタログでは、すべてのサーバー情報は syscat.servers 表に保管されます。グローバル・カタログでは、すべてのサーバー情報は syscat.servers 表および syscat.serveroptions 表に保管されます。

データ・ソース・オブジェクト ID の最大長も、DataJoiner と DB2 Information Integrator とでは異なります。以下の表では、DataJoiner と DB2 Information Integrator における、すべてのデータ・ソース・オブジェクト ID とそれらの最大長を示しています。

表4. DataJoiner および DB2 Information Integrator におけるデータ・ソース・オブジェクト ID の長さ

データ・ソース・オブジェクト ID	DataJoiner の長さ	DB2 Information Integrator の長さ
列名	18	30
関数マッピング名	18	128
索引名	8	18
ニックネーム	18	128
パッケージ名	8	8
サーバー名	18	128
スキーマ名	8	128
タイプ・マッピング名	18	18
ラッパー名	該当なし	128

関連概念:

- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『ラッパーおよびラッパー・モジュール』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『サーバー定義およびサーバー・オブション』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『ユーザー・マッピング』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『ニックネームとデータ・ソース・オブジェクト』

1. DB2 Information Integrator では、特定のソース・タイプに関するデフォルト関数マッピングがラッパー・ライブラリーに保管されます。DataJoiner では、特定のソース・タイプに関するデフォルト関数マッピングが syscat.server_functions カタログ表に保管されます。

- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『ニックネーム列オプション』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『データ・タイプ・マッピング』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『関数マッピング』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『索引の指定』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『フェデレーテッド・データベース・システム・カタログ』

DB2 ファミリーのデータ・ソースについての移行参照情報

このトピックでは、DB2 Information Integrator でサポートされているすべての DB2 ファミリーのデータ・ソースについて、DataJoiner プロトコルとそれに対応する DB2 Information Integrator ラッパーとの違いを説明します。

DB2 Information Integrator は、以下の DB2 ファミリーのデータ・ソースをサポートします。

- DB2 for Linux、UNIX、Windows
- DB2 for z/OS and OS/390
- DB2 for iSeries (AS/400)
- DB2 for VM and VSE

DataJoiner では、以下の 3 つのプロトコルで DB2 ファミリーのすべてのデータ・ソースをサポートします。

- drda
- drdaIP
- db2ra

DB2 Information Integrator では、3 つの DataJoiner プロトコルが 1 つの DRDA ラッパーに相当します。その DRDA ラッパーは、DB2 ファミリーのすべてのデータ・ソースに使用されます。

関連資料:

- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの順方向データ・タイプ・マッピング』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピング』
- 81 ページの『DB2 for z/OS and OS/390 データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点』
- 82 ページの『DB2 for iSeries (AS/400) データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点』
- 83 ページの『DB2 for Linux、UNIX、Windows データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点』
- 84 ページの『DB2 for VM and VSE データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点』

DB2 ファミリー・データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点

このセクションでは、DataJoiner と DB2 Information Integrator の間に存在する、各 DB2 ファミリー・データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの相違点について、特定の情報を示します。

DB2 for z/OS and OS/390 データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点

以下の表は、DB2 for z/OS and OS/390 データ・ソースのデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングにおける、DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。2 つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。

表 5. DB2 for z/OS and OS/390 のデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングの変更点

DB2 データ・タイプ	DataJoiner データ・タイプ	フェデレーテッド・データ・タイプ
BLOB	-	BLOB
CHAR	LONG VARCHAR	-
CHAR	-	VARCHAR
CLOB	-	CLOB
DBCLOB	-	DBCLOB
LONGVAR	LONG VARCHAR	CLOB
LONGVARG	LONG VARGRAPHIC	DBCLOB
VARCHAR	LONG VARCHAR	-
VARCHAR	-	VARCHAR
VARGRAPHIC	LONG VARGRAPH	-
VARGRAPHIC	-	VARGRAPHIC

以下の表は、DB2 for z/OS and OS/390 データ・ソースのデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングにおける、DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。2 つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。

表 6. DB2 for z/OS and OS/390 のデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングの変更点

フェデレーテッド・データ・タイプ	DataJoiner で使用される DB2 データ・タイプ	フェデレーテッド・システムで使用される DB2 データ・タイプ
BLOB	LONGVAR	BLOB
CLOB	LONGVAR	CLOB
DBCLOB	-	DBCLOB
LONG VARCHAR	LONG VAR	-
LONG VARGRAPHIC	LONG VARG	-

関連資料:

- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの順方向データ・タイプ・マッピング』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピング』
- 80 ページの『DB2 ファミリーのデータ・ソースについての移行参照情報』

DB2 for iSeries (AS/400) データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点

以下の表は、DB2 for iSeries (AS/400) データ・ソースのデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングにおける、DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。2 つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。

表7. DB2 for iSeries (AS/400) のデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングの変更点

DB2 データ・タイプ	DataJoiner データ・タイプ	フェデレーテッド・データ・タイプ
BLOB	-	BLOB
CHAR	LONG VARCHAR	-
CHAR	-	VARCHAR
CLOB	-	CLOB
DBCLOB	-	DBCLOB
LONGVARCH	-	CLOB
LONGVARG	LONG VARGRAPHIC	DBCLOB
VARCHAR	LONG VARCHAR	-
VARCHAR	-	VARCHAR
VARGRAPHIC	LONG VARG	-
VARGRAPHIC	-	VARGRAPHIC

以下の表は、DB2 for iSeries (AS/400) データ・ソースのデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングにおける、DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。2 つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。

表8. DB2 for iSeries (AS/400) のデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングの変更点

フェデレーテッド・データ・タイプ	DataJoiner で使用される DB2 データ・タイプ	フェデレーテッド・システムで使用される DB2 データ・タイプ
BLOB	BLOB	BLOB
CLOB	CLOB	CLOB
DBCLOB	DBCLOB	DBCLOB
LONG VARCHAR	LONG VARCH	CLOB
LONG VARGRAPHIC	LONG VARG	DBCLOB

関連資料:

- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの順方向データ・タイプ・マッピング』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピング』
- 80 ページの『DB2 ファミリーのデータ・ソースについての移行参照情報』

DB2 for Linux、UNIX、Windows データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点

以下の表は、DB2 for Linux、UNIX、Windows データ・ソースのデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングにおける、DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。2 つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。

表 9. DB2 for UNIX、Windows のデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングの変更点

DB2 データ・タイプ	DataJoiner データ・タイプ	フェデレーテッド・データ・タイプ
BLOB	-	BLOB
CHAR	LONG VARCHAR	-
CHAR	VARCHAR	-
CHAR	-	CHAR
CLOB	-	CLOB
DBCLOB	-	DBCLOB
LONG VARCHAR	LONG VARCHAR	CLOB
LONG VARGRAPHIC	LONG VARGRAPHIC	DBCLOB
VARCHAR	LONG VARCHAR	-
VARCHAR	-	VARCHAR
VARGRAPHIC	LONG VARGRAPHIC	-
VARGRAPHIC	-	VARGRAPHIC

以下の表は、DB2 for UNIX、Windows データ・ソースのデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングにおける、DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。2 つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。

表 10. DB2 for UNIX、Windows のデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングの変更点

フェデレーテッド・データ・タイプ	DataJoiner で使用される DB2 データ・タイプ	フェデレーテッド・システムで使用される DB2 データ・タイプ
BLOB	BLOB	BLOB
CLOB	CLOB	CLOB
DBCLOB	DBCLOB	DBCLOB
LONG VARCHAR	LONG VAR	CLOB
LONG VARGRAPHIC	LONG VARGRAPHIC	DBCLOB

関連資料:

- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの順方向データ・タイプ・マッピング』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピング』
- 80 ページの『DB2 ファミリーのデータ・ソースについての移行参照情報』

DB2 for VM and VSE データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点

以下の表は、DB2 for VM and VSE データ・ソースのデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングにおける、DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。2 つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。

表 11. DB2 for VM and VSE のデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピング (すべての列が示されているわけではない)

DB2 データ・タイプ	DataJoiner データ・タイプ	フェデレーテッド・データ・タイプ
BLOB	-	BLOB
CLOB	-	CLOB
DBCLOB	-	DBCLOB
CHAR	VARCHAR	-
CHAR	LONG VARCHAR	-
VARCHAR	LONG VARCHAR	-
VARCHAR	-	VARCHAR
LONGVARCHAR	LONG VARCHAR	CLOB
VARGRAPH	LONG VARGRAPHIC	-
LONGVARG	LONG VARGRAPHIC	DBCLOB
VARGRAPHIC	-	VARGRAPHIC

以下の表は、DB2 for VM and VSE データ・ソースのデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングにおける、DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。2 つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。

表 12. DB2 for VM and VSE のデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピング (すべての列が示されているわけではない)

フェデレーテッド・データ・タイプ	DataJoiner で使用される DB2 データ・タイプ	フェデレーテッド・システムで使用される DB2 データ・タイプ
BLOB	-	BLOB
CLOB	-	CLOB
DBCLOB	-	DBCLOB

表 12. DB2 for VM and VSE のデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピング (すべての列が示されているわけではない) (続き)

フェデレーテッド・データ・タイプ	DataJoiner で使用される DB2 データ・タイプ	フェデレーテッド・システムで使用される DB2 データ・タイプ
LONG VARCHAR	LONG VARCHAR	-
VARGRAPHIC	LONG VARG	-
VARGRAPHIC	-	-

関連資料:

- ・ 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの順方向データ・タイプ・マッピング』
- ・ 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピング』
- ・ 80 ページの『DB2 ファミリーのデータ・ソースについての移行参照情報』

Oracle データ・ソースについての移行参照情報

このトピックでは、Oracle データ・ソースについて、DataJoiner プロトコルとそれに対応する DB2 Information Integrator ラッパーとの相違点を説明します。

以下の表は、Oracle データ・ソースおよびそれに対応する DB2 Information Integrator ラッパー名にアクセスするための DataJoiner プロトコルを示しています。

表 13. Oracle データ・ソース・プロトコル名およびそれに対応するラッパー名

DataJoiner プロトコル名	DB2 Information Integrator ラッパー名
sqlnet	SQLNET
net8	NET8

関連資料:

- ・ 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの順方向データ・タイプ・マッピング』
- ・ 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピング』
- ・ 86 ページの『Oracle SQLNET のデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点』
- ・ 87 ページの『Oracle NET8 のデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点』

Oracle データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点

このセクションでは、DataJoiner と DB2 Information Integrator の間に存在する、Oracle データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの相違点について、特定の情報を示します。

Oracle SQLNET のデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点

重要: このトピックの情報は、DB2 Information Integrator 8.2 以降には適用されません。DB2 Information Integrator バージョン 8.2 では、Oracle データ・ソースにアクセスするための SQLNET ラッパーはサポートされません。

以下の表は、Oracle SQLNET ラッパーのデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングにおける、DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。2 つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。

表 14. Oracle SQLNET のデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングの変更点

Oracle データ・タイプ	DataJoiner データ・タイプ	フェデレーテッド・データ・タイプ
FLOAT	DOUBLE	REAL

以下の表は、Oracle SQLNET ラッパーのデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングにおける、DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。2 つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。

表 15. Oracle SQLNET のデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングの変更点

フェデレーテッド・データ・タイプ	DataJoiner で使用される Oracle データ・タイプ	フェデレーテッド・システムで使用される Oracle データ・タイプ
LONG VARCHAR	LONG	-
LONG VARCHAR	LONG RAW	-
REAL	-	FLOAT (長さ: 63)
VARCHAR*	LONG RAW	RAW
VARCHAR*	LONG RAW	-
VARCHAR	LONG	VARCHAR2

* 上限および下限の長さは、これら 2 つのデータ・タイプ・マッピングではそれぞれ異なります。この長さについては別のトピックで説明しています。以下の関連資料のリンクを参照してください。

関連資料:

- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの順方向データ・タイプ・マッピング』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピング』
- 85 ページの『Oracle データ・ソースについての移行参照情報』

Oracle NET8 のデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点

以下の表は、Oracle NET8 ラッパーのデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングにおける、DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。2つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。

表 16. Oracle NET8 のデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングの変更点

Oracle データ・タイプ	DataJoiner データ・タイプ	フェデレーテッド・データ・タイプ
BLOB	-	BLOB
CLOB	-	CLOB
LONG	CLOB	CLOB
LONG RAW	BLOB	BLOB
NCHAR(1-127)*	-	GRAPHIC
NCHAR(128-2000)**	-	VARGRAPHIC
NCLOB **	-	DBCLOB
NVARCHAR2**	-	VARGRAPHIC
TIMESTAMP	-	TIMESTAMP

* Oracle クライアントおよびサーバーのバージョン 9 以降が必要

** Oracle クライアントおよびサーバーのバージョン 9 以降、およびローカル UNICODE コード・ページが必要

以下の表は、Oracle NET8 ラッパーのデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングにおける、DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。2つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。

表 17. Oracle NET8 のデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングの変更点

フェデレーテッド・データ・タイプ	DataJoiner で使用される Oracle データ・タイプ	フェデレーテッド・システムで使用される Oracle データ・タイプ
BLOB	LONG RAW	BLOB
CLOB	LONG	CLOB
DBCLOB**	-	NCLOB
FLOAT	-	FLOAT
GRAPHIC**	-	NCHAR
LONG VARCHAR	LONG	-
LONG VARCHAR	LONG RAW	-
REAL	-	FLOAT (長さ: 63)
VARCHAR*	LONG RAW	RAW
VARCHAR*	LONG RAW	-
VARCHAR	LONG	VARCHAR2
VARGRAPHIC**	-	NVARCHAR2

表 17. Oracle NET8 のデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングの変更点 (続き)

フェデレーテッド・データ・タイプ	DataJoiner で使用される Oracle データ・タイプ	フェデレーテッド・システムで使用される Oracle データ・タイプ
------------------	----------------------------------	------------------------------------

* 上限および下限の長さは、これら 2 つのデータ・タイプ・マッピングではそれぞれ異なります。この長さについては別のトピックで説明しています。以下の関連資料のリンクを参照してください。

** Oracle クライアントおよびサーバーのバージョン 9 以降、およびローカル UNICODE コード・ページが必要

関連資料:

- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの順方向データ・タイプ・マッピング』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピング』
- 85 ページの『Oracle データ・ソースについての移行参照情報』

Informix データ・ソースについての移行参照情報

このトピックでは、Informix データ・ソースについて、DataJoiner プロトコルとそれに対応する DB2 Information Integrator ラッパーとの相違点を説明します。

以下の表は、DB2 Information Integrator でサポートされている Informix データ・ソース、各データ・ソースの DataJoiner プロトコル名、および対応する DB2 Information Integrator ラッパー名を示しています。

表 18. Informix データ・ソース・プロトコル名およびそれに対応するラッパー名

データ・ソース	DataJoiner プロトコル名	DB2 Information Integrator ラッパー名
Informix バージョン 7	informix7	INFORMIX
Informix バージョン 9	informix9	INFORMIX

このトピックの残りの部分では、DataJoiner と DB2 Information Integrator の間のデータ・タイプ・マッピングの相違点について、特定の情報を示します。

以下の表は、すべての Informix データ・ソースのデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングにおける、DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。2 つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。

表 19. Informix のデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングの変更点

Informix データ・タイプ	DataJoiner データ・タイプ	フェデレーテッド・データ・タイプ
CHAR	LONG VARCHAR	VARCHAR
NCHAR	LONG VARCHAR	VARCHAR
SMALLFLOAT	DOUBLE	REAL

以下の表は、すべての Informix データ・ソースのデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングにおける、DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。2 つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。

表 20. Informix のデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングの変更点

フェデレーテッド・データ・タイプ	DataJoiner で使用される Informix データ・タイプ	フェデレーテッド・システムで使用される Informix データ・タイプ
VARCHAR	TEXT ¹	TEXT ²
VARCHAR	-	LVARCHAR ³
VARCHAR	-	TEXT ⁴

注:

1. このタイプ・マッピングの長さの範囲は 255 ~ 4000 です。
2. このタイプ・マッピングは Informix バージョン 7 でのみ有効で、長さの範囲は 255 ~ 32672 です。
3. このタイプ・マッピングは Informix バージョン 8 および 9 でのみ有効で、長さの範囲は 255 ~ 2048 です。
4. このタイプ・マッピングは Informix バージョン 8 および 9 でのみ有効で、長さの範囲は 2049 ~ 36672 です。

関連資料:

- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの順方向データ・タイプ・マッピング』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピング』

Sybase データ・ソースについての移行参照情報

DataJoiner でサポートされる Sybase データ・ソース・プロトコルの名前は、DB2 Information Integrator で変更されません。ctlib プロトコルは CTLIB ラッパーになります。dblib プロトコルは、DB2 Information Integrator バージョン 8.2 以降ではサポートされません。

このトピックの残りの部分では、DataJoiner と DB2 Information Integrator の間のデータ・タイプ・マッピングの相違点について、特定の情報を示します。

以下の表は、Sybase データ・ソースのデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングにおける、DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。2 つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。

表 21. Sybase のデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングの変更点

Sybase データ・タイプ	DataJoiner データ・タイプ	フェデレーテッド・データ・タイプ
BINARY	LONG VARCHAR	VARCHAR
CHAR	LONG VARCHAR	VARCHAR

表 21. Sybase のデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングの変更点 (続き)

Sybase データ・タイプ	DataJoiner データ・タイプ	フェデレーテッド・データ・タイプ
NCHAR	LONG VARCHAR	VARCHAR
NVARCHAR	LONG VARCHAR	VARCHAR
REAL	DOUBLE	REAL
VARBINARY	LONG VARCHAR	VARCHAR
VARCHAR	LONG VARCHAR	VARCHAR

以下の表は、 Sybase データ・ソースのデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングにおける、 DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。 2 つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。

表 22. Sybase のデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングの変更点

フェデレーテッド・データ・タイプ	DataJoiner で使用される Sybase データ・タイプ	フェデレーテッド・システムで使用される Sybase データ・タイプ
VARCHAR	CHAR	VARCHAR
VARCHAR	BINARY	VARBINARY
VARCHAR	BINARY	IMAGE
LONG VARCHAR	TEXT	-
LONG VARCHAR	IMAGE	-

関連資料:

- ・ 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの順方向データ・タイプ・マッピング』
- ・ 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピング』

Microsoft SQL Server データ・ソースについての移行参照情報

このトピックでは、 Microsoft SQL Server データ・ソースについて、 DataJoiner プロトコルとそれに対応する DB2 Information Integrator ラッパーとの相違点を説明します。

以下の表は、 Microsoft SQL Server データ・ソースおよびそれに対応する DB2 Information Integrator ラッパー名にアクセスするための DataJoiner プロトコルを示しています。

表 23. Microsoft SQL Server データ・ソース・プロトコル名およびそれに対応するラッパー名

データ・ソース	DataJoiner プロトコル名	デフォルトの DB2 Information Integrator ラッパー名
Microsoft SQL Server (UNIX の場合)	<ul style="list-style-type: none"> AIX の場合: mssqlodbc および djxsqlnk Solaris オペレーティング環境の場合: mssqlodbc または djxsqlnk 	MSSQLODBC3
Microsoft SQL Server (Windows の場合)	djxmssql	DJXMSSQL3

関連資料:

- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの順方向データ・タイプ・マッピング』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピング』
- 91 ページの『Microsoft SQL Server データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点』
- 92 ページの『ODBC データ・ソースについての移行参照情報』

Microsoft SQL Server データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点

以下の表は、すべての Microsoft SQL Server データ・ソースのデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングにおける、DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。同じリモート・データ・タイプが別々の DB2 データ・タイプにマップするデータ・タイプの場合、使用されるマッピングは長さに応じて異なります。

2 つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。

表 24. Microsoft SQL Server のデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングの変更点

Microsoft SQL Server データ・タイプ	DataJoiner データ・タイプ	フェデレーテッド・データ・タイプ
binary	LONG VARCHAR	VARCHAR
char	LONG VARCHAR	VARCHAR
float	DOUBLE	REAL
floatn	DOUBLE	REAL
nchar	CHARACTER	CHARACTER
nchar	CHARACTER	VARCHAR
nchar	VARCHAR	VARCHAR
nchar	LONG VARCHAR	-
nvarchar	VARCHAR	VARCHAR
nvarchar	LONG VARCHAR	-

表 24. Microsoft SQL Server のデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングの変更点 (続き)

Microsoft SQL Server データ・タイプ	DataJoiner データ・タイプ	フェデレーテッド・ データ・タイプ
real	DOUBLE	REAL
varbinary	LONG VARCHAR	VARCHAR
varchar	LONG VARCHAR	VARCHAR

以下の表は、すべての Microsoft SQL Server データ・ソースのデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングにおける、DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。2 つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。

表 25. Microsoft SQL Server のデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングの変更点

フェデレーテッド・データ・タイプ	DataJoiner で使用される Microsoft SQL server データ・タイプ	フェデレーテッド・システムで 使用される Microsoft SQL server データ・タイプ
LONG VARCHAR ビット・データ: N	text	-
VARCHAR ビット・データ: N	char	varchar
VARCHAR ビット・データ: N	text	varchar
VARCHAR ビット・データ: N	-	varchar
VARCHAR ビット・データ: N	-	text
VARCHAR ビット・データ: Y	image	varbinary
VARCHAR ビット・データ: Y	-	varbinary
VARCHAR ビット・データ: Y	-	image

関連資料:

- ・ 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの順方向データ・タイプ・マッピング』
- ・ 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピング』
- ・ 90 ページの『Microsoft SQL Server データ・ソースについての移行参照情報』

ODBC データ・ソースについての移行参照情報

このトピックでは、ODBC データ・ソースについて、DataJoiner プロトコルとそれに対応する DB2 Information Integrator ラッパーとの相違点を説明します。

ODBC ドライバー 3.0 以降を使用できるデータ・ソースは、ODBC データ・ソースである可能性があります。たとえば、Microsoft SQL Server は ODBC ドライバーを使用できます。

DataJoiner プロトコル Generic は ODBC データ・ソースをサポートします。DB2 Information Integrator では、Generic プロトコルが ODBC ラッパーになります。

関連資料:

- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの順方向データ・タイプ・マッピング』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピング』
- 91 ページの『Microsoft SQL Server データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点』
- 93 ページの『ODBC データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点』

ODBC データ・ソースのデフォルトのデータ・タイプ・マッピングの変更点

以下の表は、ODBC データ・ソースのデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングにおける、DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。2 つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。

表 26. ODBC のデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングの変更点

ODBC データ・タイプ	DataJoiner データ・タイプ	フェデレーテッド・データ・タイプ
SQL_BIGINT	DECIMAL	BIGINT
SQL_CHAR	LONG VARCHAR	VARCHAR
SQL_CHAR	LONG VARCHAR	-
SQL_BINARY	LONG VARCHAR	VARCHAR FOR BIT DATA
SQL_BINARY	LONG VARCHAR	-
SQL_VARCHAR	LONG VARCHAR	VARCHAR
SQL_VARCHAR	LONG VARCHAR	-
SQL_VARBINARY	LONG VARCHAR	VARCHAR FOR BIT DATA
SQL_VARBINARY	LONG VARCHAR	-
SQL_WCHAR	-	CHAR
SQL_WCHAR	-	VARCHAR
SQL_WVARCHAR	-	VARCHAR
SQL_WLONGVARCHAR	-	CLOB

以下の表は、ODBC データ・ソースのデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングにおける、DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。2 つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。

表 27. ODBC のデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングの変更点

フェデレーテッド・データ・タイプ	DataJoiner で使用される ODBC データ・タイプ	フェデレーテッド・システムで使用される ODBC データ・タイプ
BLOB	-	SQL_LONGVARBINARY
BIGINT	-	SQL_BIGINT

表 27. ODBC のデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングの変更点 (続き)

フェデレーテッド・データ・タイプ	DataJoiner で使用される ODBC データ・タイプ	フェデレーテッド・システムで使用される ODBC データ・タイプ
CHAR	-	SQL_CHAR
CHAR FOR BIT DATA	-	SQL_BINARY
CLOB	-	SQL_LONGVARCHAR
DATE	-	SQL_TYPE_DATE
DECIMAL	-	SQL_DECIMAL
DOUBLE	-	SQL_DOUBLE
FLOAT	-	SQL_FLOAT
INTEGER	-	SQL_INTEGER
NUMERIC	-	SQL_DECIMAL
REAL	-	SQL_REAL
SMALLINT	-	SQL_SMALLINT
TIME	-	SQL_TYPE_TIME
TIMESTAMP	-	SQL_TYPE_TIMESTAMP
VARCHAR	-	SQL_VARCHAR
VARCHAR FOR BIT DATA	-	SQL_VARBINARY

関連資料:

- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの順方向データ・タイプ・マッピング』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピング』
- 92 ページの『ODBC データ・ソースについての移行参照情報』

Teradata データ・ソースについての移行参照情報

このトピックでは、Teradata データ・ソースについて、DataJoiner プロトコルとそれに対応する DB2 Information Integrator ラッパーとの相違点を説明します。

DataJoiner プロトコル teradata は、対応する DB2 Information Integrator ラッパー teradata になります。

このトピックの残りの部分では、DataJoiner と DB2 Information Integrator の間のデータ・タイプ・マッピングの相違点について、特定の情報を示します。

以下の表は、Teradata データ・ソースのデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングにおける、DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。2 つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。各データ・タイプ・マッピングごとの詳細情報 (たとえば、長さ) については、別のトピックで説明しています。以下の関連資料のリンクを参照してください。

表 28. Teradata のデフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングの変更点

Teradata データ・タイプ	DataJoiner データ・タイプ	フェデレーテッド・データ・タイプ
BYTE	VARCHAR / LONG VARCHAR FOR BIT DATA	VARCHAR FOR BIT DATA / BLOB
CHAR	VARCHAR / LONG VARCHAR	VARCHAR / CLOB
VARBYTE	VARCHAR FOR BIT DATA / LONG VARCHAR FOR BIT DATA	VARCHAR FOR BIT DATA / BLOB
VARCHAR	VARCHAR / LONG VARCHAR	VARCHAR / CLOB
VARGRAPHIC	VARGRAPHIC / LONG VARGRAPHIC	VARGRAPHIC / DBCLOB

以下の表は、Teradata データ・ソースのデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングにおける、DataJoiner と DB2 Information Integrator との相違点を示しています。2 つの製品の間で変わらないデータ・マッピングは示していません。各データ・タイプ・マッピングごとの詳細情報 (たとえば、長さ) については、別のトピックで説明しています。以下の関連資料のリンクを参照してください。

表 29. Teradata のデフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングの変更点

フェデレーテッド・タイプ名	DataJoiner で使用される Teradata データ・タイプ	フェデレーテッド・システムで使用される Teradata データ・タイプ
BLOB	-	VARCHAR
CLOB	-	VARBYTE
DBCLOB	-	VARGRAPHIC
LONG VARCHAR	VARCHAR	-
LONG VARCHAR FOR BIT DATA	VARBYTE	-
LONG VARGRAPHIC	VARGRAPHIC	-

関連資料:

- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの順方向データ・タイプ・マッピング』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピング』

第 7 章 DB2 バージョン 7 からの移行参照情報

この章では、DB2 バージョン 7 から DB2 Information Integrator への移行後に利用できる参照情報を示します。

DB2 バージョン 7 の移行参照情報

このトピックでは、バージョン 7 から DB2 Information Integrator に移行する場合のラッパー・ライブラリー名の変更点、関連するライブラリー、およびデータ・タイプ・マッピングの相違点について説明します。

ラッパー・ライブラリー名の変更点

DB2 Information Integrator のラッパー・ライブラリー名は、DB2 バージョン 7 のラッパー・ライブラリー名とは異なります。以下の表は、DB2 Information Integrator ラッパー・ライブラリー名の一覧です。

表 30. DB2 Information Integrator ラッパー・ライブラリー名および関連ライブラリー

ラッパー	Windows ラッパー・ライブラリー名 (関連ライブラリー)	AIX ラッパー・ライブラリー名 (関連ライブラリー)
NET8	db2net8.dll (db2net8F.dll、 db2net8U.dll)	libdb2net8.a (libdb2net8F.a、 libdb2net8U.a)
CTLIB	db2ctlib.dll	libdb2ctlib.a
MSSQLODBC3	db2mssql3.dll (db2mssql3F.dll、 db2mssql3U.dll)	libdb2mssql3.a (libdb2mssql3F.a、 libdb2mssql3U.a)
DRDA	db2drda.dll (db2drdaF.dll、 db2drdaU.dll)	libdb2drda.a (libdb2drdaF.a、 libdb2drdaU.a)
INFORMIX	db2informix.dll (db2informixF.dll、 db2informixU.dll)	libdb2informix.a (libdb2informixF.a、 libdb2informixU.a)
OLEDB	db2oledb.dll	

DB2 バージョン 7 と DB2 Information Integrator との間のデータ・タイプ・マッピング

DB2 バージョン 7 と DB2 Information Integrator バージョン 8 では、デフォルト・データ・タイプ・マッピングが多少異なります。デフォルトの順方向および逆方向データ・タイプ・マッピングの詳細については、「デフォルトの順方向データ・タイプ・マッピング」および「デフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピング」のトピックを参照してください。

デフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングの変更点は、以下の表に示しています。

表 31. デフォルトの順方向データ・タイプ・マッピングの変更点

データ・ソース	データ・タイプ	DB2 バージョン 7 データ・タイプ	DB2 Information Integrator データ・タイプ
DB2 for z/OS and OS/390	ビット・データ用 CHAR(255)	VARCHAR	
DB2 for iSeries	GRAPHIC(127)	VARGRAPHIC	GRAPHIC
Informix	interval	DEC(19,5)	VARCHAR(25)
	ブール	SMALLINT	CHAR(1)

デフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングの変更点は、以下の表に示しています。

表 32. デフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピングの変更点

データ・ソース	フェデレーテッド・ データ・タイプ	DB2 バージョン 7 でのデータ・ソー ス・データ・タイプ	DB2 Information Integrator でのデータ・ソース・デー タ・タイプ
Sybase	GRAPHIC	nchar	サポートされません
	VARGRAPHIC	nvarchar	サポートされません

関連資料:

- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの順方向データ・タイプ・マッピング』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『デフォルトの逆方向データ・タイプ・マッピング』

DB2 Information Integrator technical 技術文書

以下のトピックについて説明します。

- DB2 Information Integrator PDF 資料
- DB2 Information Integrator リリース情報およびインストール要件
- DB2 Information Integrator 資料のフィックスパック

DB2 Information Integrator の資料

DB2 PDF ドキュメンテーション CD には、DB2 Information Integrator ライブラリーと DB2 Universal Database ライブラリーの資料の PDF ファイルが収録されています。DB2 PDF ドキュメンテーション CD の構造は、以下のようになっています。

- Windows オペレーティング・システムの場合: `x:\doc\%L`
- UNIX オペレーティング・システムの場合: `/cdrom/doc/%L`

各部分の意味は以下のとおりです。

- `x` は Windows の CD ドライブ名を表します。
- `cdrom` は CD のマウント・ポイントを表します (UNIX)。
- `%L` は使用する資料のロケールです (en_US など)。

次の表には、PDF 文書へのアクセスに使用できる言語 ID がリストされています。

表 33. 言語ロケールおよび ID

言語	ロケール	ID	言語	ロケール	ID
アラビア語	ar_AA	w	日本語	ja_JP	j
ブラジル・ポルトガル語	pt_BR	b	韓国語	ko_KR	k
ブルガリア語	bg_BG	u	ノルウェー語	no_NO	n
クロアチア語	hr_HR	9	ポーランド語	pl_PL	p
チェコ語	cs_CZ	x	ポルトガル語	pt_PT	v
デンマーク語	da_DK	d	ルーマニア語	ro_RO	8
オランダ語	nl_NL	q	ロシア語	ru_RU	r
英語	en_US	e	中国語 (簡体字)	zh_CN	c
フィンランド語	fi_FI	y	スロバキア語	sk_SK	7
フランス語	fr_FR	f	スロベニア語	sl_SI	l
ドイツ語	de_DE	g	スペイン語	es_ES	z
ギリシャ語	el_GR	a	スウェーデン語	sv_SE	s
ハンガリー語	hu_HU	h	中国語 (繁体字)	zh_TW	t
イタリア語	it_IT	i	トルコ語	tr_TR	m

各 PDF ファイル名の 6 番目の文字は資料の言語を示しています (以下の表をご覧ください)。たとえば、ファイル名 `iiyige80` は「*IBM DB2 Information Integrator* インストール・ガイド」の英語版を示しており、ファイル名 `iiyigg80` は同じ資料のドイツ語版を示しています。

次の表には、DB2 Information Integrator 用の利用可能な PDF 資料がリストされています。

表 34. DB2 Information Integrator 資料

資料名	資料番号	PDF ファイル名
<i>IBM DB2 Information Integrator</i> アプリケーション開発者向けガイド	SC88-9609	iiyfsx81
<i>IBM DB2 Information Integrator</i> ラッパー開発における C++ API リファレンス	SC88-9921	iiywrx80
<i>IBM DB2 Information Integrator</i> データ・ソース構成ガイド	オンラインでのみ入手可能	
<i>IBM DB2 Information Integrator</i> フェデレーテッド・システム・ガイド	SC88-9164	iiyfp81
<i>IBM DB2 Information Integrator</i> インストール・ガイド	GC88-9562	iiyigx81
<i>IBM DB2 Information Integrator</i> レプリケーションとイベント・パブリッシング入門	GC88-9895	db2gpx80
<i>IBM DB2 Information Integrator</i> ラッパー開発における Java API リファレンス	SC88-9922	iiyjrx80
<i>IBM DB2 Information Integrator</i> マイグレーション・ガイド	SC88-9610	iiymgx81
<i>IBM DB2 Information Integrator</i> レプリケーションとイベント・パブリッシング ガイドおよびリファレンス	SC88-9893	db2qrx80
<i>IBM DB2 Information Integrator</i> SQL レプリケーション・ガイドおよびリファレンス	SC88-9163	db2e0x82
<i>IBM DB2 Information Integrator</i> ラッパー開発者向けガイド	SC88-9923	iiywdx80

リリース情報およびインストール要件

リリース情報およびインストール要件では、製品のリリースおよびフィックスパックのレベルに固有の情報を提供します。また、各リリースおよびフィックスパックに組み込まれているドキュメンテーション更新のサマリーも提供します。

リリース情報およびインストール要件は、テキスト形式および HTML 形式で製品 CD から入手できます。

- Windows オペレーティング・システムの場合: `x:\doc%\L`
- UNIX オペレーティング・システムの場合: `/cdrom/doc/%L/`

各部分の意味は以下のとおりです。

- `x` は Windows の CD ドライブ名を表します。
- `cdrom` は CD のマウント・ポイントを表します (UNIX)。
- `%L` は使用する資料のロケールです (en_US など)。

次の表は、リリース情報およびインストール要件のロケーションを示しています。

表 35. リリース情報およびインストール要件

資料名	ファイル名	位置
<i>IBM DB2 Information Integrator</i> リリース・ノート	ReleaseNotes	<ul style="list-style-type: none">DB2 インフォメーション・センターにあるリリース情報Web 上で http://www.ibm.com/software/data/integration/db2ii/support.html にアクセスします。
<i>IBM DB2 Information Integrator</i> インストール要件	Prereqs	<ul style="list-style-type: none">製品 CDDB2 Information Integration Installation Launchpad

DB2 Information Integrator ドキュメンテーション・フィックスパック

IBM は、DB2 インフォメーション・センターの資料のフィックスパックやその他の資料更新を定期的に発行しています。DB2 インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) にアクセスすれば、常に最新の情報が掲載されます。DB2 インフォメーション・センターをローカル・インストールしている場合、更新記事を表示するには、まず手動で更新をインストールしてください。新しい情報が発表されたときに資料を更新することにより、DB2 インフォメーション・センター CD からインストールした情報を更新することができます。

インフォメーション・センターの方が、PDF 資料やハードコピー資料よりも頻繁に更新されます。DB2 の最新の技術情報を入手するには、資料更新が発行されたときにそれをインストールするか、または www.ibm.com サイトの DB2 インフォメーション・センターにアクセスしてください。

アクセス支援

アクセス支援機能は、身体に障害のある（身体動作が制限されている、視力が弱いなど）ユーザーがソフトウェア製品を十分活用できるように支援します。DB2[®] バージョン 8 製品に備わっている主なアクセス支援機能は、以下のとおりです。

- すべての DB2 機能は、マウスの代わりにキーボードを使ってナビゲーションできます。詳細については、『キーボードによる入力およびナビゲーション』を参照してください。
- DB2 ユーザー・インターフェースのフォント・サイズおよび色をカスタマイズすることができます。詳細については、104 ページの『アクセスしやすい表示』を参照してください。
- DB2 製品は、Java[™] Accessibility API を使用するアクセス支援アプリケーションをサポートします。詳細については、104 ページの『支援テクノロジーとの互換性』を参照してください。
- DB2 資料は、アクセスしやすい形式で提供されています。詳細については、104 ページの『アクセスしやすい資料』を参照してください。

キーボードによる入力およびナビゲーション

キーボード入力

キーボードだけを使用して DB2 ツールを操作できます。マウスを使って実行できる操作は、キーまたはキーの組み合わせによっても実行できます。標準のオペレーティング・システム・キー・ストロークを使用して、標準のオペレーティング・システム操作を実行できます。

キーまたはキーの組み合わせによって操作を実行する方法について、詳しくは キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help を参照してください。

キーボード・ナビゲーション

キーまたはキーの組み合わせを使用して、DB2 ツールのユーザー・インターフェースをナビゲートできます。

キーまたはキーの組み合わせによって DB2 ツールをナビゲートする方法の詳細については、キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help を参照してください。

キーボード・フォーカス

UNIX[®] オペレーティング・システムでは、アクティブ・ウィンドウの中で、キー・ストロークによって操作できる領域が強調表示されます。

アクセスしやすい表示

DB2 ツールには、視力の弱いユーザー、その他の視力障害をもつユーザーのためにアクセシビリティを向上させる機能が備わっています。これらのアクセシビリティ拡張機能には、フォント・プロパティのカスタマイズを可能にする機能も含まれています。

フォントの設定

「ツール設定」ノートブックを使用して、メニューおよびダイアログ・ウィンドウに使用されるテキストの色、サイズ、およびフォントを選択できます。

フォント設定に関する詳細情報は、メニューおよびテキストのフォントを変更する: [Common GUI help](#) を参照してください。

色に依存しない

本製品のすべての機能を使用するために、ユーザーは必ずしも色を識別する必要はありません。

支援テクノロジーとの互換性

DB2 ツールのインターフェースは、Java Accessibility API をサポートします。これによって、スクリーン・リーダーその他の支援テクノロジーを DB2 製品で利用できるようになります。

アクセスしやすい資料

DB2 形式は、ほとんどの Web ブラウザーで表示可能な XHTML 1.0 形式で提供されています。XHTML により、ご使用のブラウザに設定されている表示設定に従って資料を表示できます。さらに、スクリーン・リーダーや他の支援テクノロジーを使用することもできます。

シンタックス・ダイアグラムはドット 10 進形式で提供されます。この形式は、スクリーン・リーダーを使用してオンライン・ドキュメンテーションにアクセスする場合にのみ使用できます。

関連概念:

- 「*Infrastructure Topics (DB2 Common Files)*」の『ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム』

関連タスク:

- 『キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: [Common GUI help](#)』
- 『メニューおよびテキストのフォントを変更する: [Common GUI help](#)』

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものであり、本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032
東京都港区六本木 3-2-31
IBM World Trade Asia Corporation
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。 IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
J46A/G4
555 Bailey Avenue
San Jose, CA 95141-1003
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケ

ーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生した創作物には、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。© Copyright IBM Corp. _年を入れる_. All rights reserved.

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

IBM
AIX
DataJoiner
DB2
DB2 Universal Database
DRDA
IMS
Informix
iSeries
Lotus
OS/390
UNIX
Windows
z/OS

以下は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標および登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT、および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

MMX および Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は、The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アクセシビリティ

機能 103

移行

アプリケーション 43

移行前の一般的な作業

インスタンス情報の記録 24

データベース情報の記録 23

DB2 レプリケーション環境の準備 25

以前のリリース 20

インスタンス

UNIX 37

インストール手順 31

サポートされる DataJoiner のバージョン 4

サポートされるデータ・ソース 2
準備 28

新規システムへのデータベースの 46
データベース 44

64 ビット

AIX 39, 40

HP-UX 39

Solaris 39, 40

DataJoiner

概要 1

DB2

推奨事項 16

スペースの考慮事項 18

制約事項 15

データベース 44

EXPLAIN 表 42

UNIX 36

Windows での 34

DB2 Administration Server (DAS) 38

DB2 Information Integrator に移行されるオブジェクト 2

DB2 Life Sciences Data Connect

概要 1

DB2 Relational Connect

概要 1

DB2 バージョン 7 のサポートされるバージョン 12

移行 (続き)

DB2 バージョン 7 フェデレーテッド・システムから Information

Integrator へ 97

EXPLAIN 表 42

インスタンス

移行

UNIX 37

移行前の情報の記録 24

インストール

DB2 Information Integrator 移行の手順 31

インターフェース・ファイル 26, 70

オペレーティング・システム

DB2 インストール・パス 43

[カ行]

書き込み操作

ラージ・オブジェクト・データ・タイプ 56

拡張索引

制約事項 4

カタログ変換

DataJoiner 78

環境変数

DB2 Information Integrator への移行 26

関数マッピング

移行でサポートされない 2

キーボード・ショートカット

サポート 103

コード・ページ

DB2 Information Integrator でのサポート 4

構成設定

移行後の復元 49

コマンド

バックアップ 21

db2ckmig 28

db2iupdt 37, 39

[サ行]

再バインド

パッケージ

インスタンスとデータベースを移行した後 49

システム構成

DB2 の移行前の設定の記録 22

身体障害 103

診断エラー・レベル

DB2 移行前の変更 25

ストアド・プロシージャ

ニックネームの制約事項 4

制約事項

DB2 UDB バージョン 7 の移行 12

[タ行]

データベース

移行 44

移行前の情報の記録 23

検査

移行できる状態にあることの 28

新規システムへの移行 46

DB2 移行前のバックアップ 21

データベース・オブジェクト

DB2 Information Integrator への移行 2

データ・ソース

移行でサポートされる 2

データ・タイプ・マッピング

移行後のドロップ 49

移行でサポートされない 2

DB2 for iSeries 82

DB2 データ・ソース

Linux, UNIX, Windows 83

VM and VSE 84

z/OS および 390 81

DB2 バージョン 7 からの変更点 97

Microsoft SQL Server 91

ODBC データ・ソース 93

Oracle データ・ソース

NET8 87

SQLNET 86

透過 DDL 65

ドロップ

ラッパー 49

[ハ行]

パッケージ

再バインド 49

表スペース

移行の制約事項 20

フェデレーテッド・ビュー

移行の制約事項 2

[マ行]

無効なデータ・タイプ・マッピング
制約事項 4

[ヤ行]

要約データ・タイプ
DataJoiner の制約事項 4

[ラ行]

ラッパー
ドロップ 49
ライブラリー名の変更点 97
レプリケーション
移行のための DataJoiner サーバーの準備 25
制約事項 4
ラージ・オブジェクト・データ・タイプ 4
ラージ・オブジェクト・データ・タイプに対する使用可能化 56
ロードマップ
DB2 Information Integrator への移行 1
ログ・ファイル・スペース
DataJoiner からの移行前の検査 26

[数字]

2 フェーズ・コミット
トランザクション 4

A

AIX
64 ビット
移行 39

C

CTLIB ラッパー
移行による変更 49
レプリケーション 4

D

DataDirect SequeLink ODBC ドライバー 4
DataJoiner
移行インストール手順 31
移行後の参照情報 77

DataJoiner (続き)
移行後のステップ
DB2 ファミリー・データ・ソース 58
Informix 60
Microsoft SQL Server 63
ODBC 65
Oracle 67
Sybase 70
Teradata 72
移行参照情報
DB2 ファミリー・データ・ソース 80
Informix データ・ソース 88
Microsoft SQL Server データ・ソース 90
ODBC データ・ソース 92
Oracle データ・ソース 85
Sybase データ・ソース 89
Teradata データ・ソース 94
移行のための DB2 レプリケーション環境の準備 25
カタログ変換情報 78
からの移行
32 ビットから 64 ビット UNIX 環境へ 40
環境変数の移行 26
構成設定の復元 49
サポートされるバージョン 4
データ・ソースのバージョン・レベルの検査 49
ログ・ファイル・スペースの検査 26, 40
DB2 Information Integrator での対応する用語 77
PTF レベルの検証 26
DB2
移行
概要 44
サーバーのオフライン化 29
システム構成設定 22
診断エラー・レベルの変更 25
推奨事項 16
スペースの考慮事項 18
制約事項 15
データベースのバックアップ 21
移行後のステップ
DB2 ファミリー・データ・ソース 58
Documentum データ・ソース 74
Informix 60
Microsoft SQL Server 63
ODBC 65
Oracle 67
Sybase 70
Teradata 72

DB2 Administration Server (DAS)
移行 38
DB2 Life Sciences Data Connect
からの移行 2
DB2 Relational Connect
からの移行 2
DB2 サーバー
オフライン化 29
DB2 データ・ソース
iSeries、AS/400
データ・タイプ・マッピング 82
Linux、UNIX、Windows
データ・タイプ・マッピング 83
VM and VSE
データ・タイプ・マッピング 84
z/OS および 390
データ・タイプ・マッピング 81
DB2 バージョン 7 フェデレーテッド・システム
移行インストール手順 31
移行の制約事項 12
環境変数の移行 26
構成設定の復元 49
サポートされるバージョン 12
DB2 Information Integrator への移行 97
DB2 ファミリー・データ・ソース
移行後のアクセス 58
移行後の接続の再作成 49
DataJoiner 移行参照情報 80
db2dj.ini
移行のためのコピー 26
db2look コマンド 49
DB2RA プロトコル 4
DBLIB
移行後、CTLIB に変更 49
DBLIB ラッパー
レプリケーション 4
DDL ステートメント
DataJoiner 構文からの変更点 4
Documentum データ・ソース
移行後のアクセス 74

E

EXPLAIN 表
移行 42

H

HP-UX
64 ビット移行 39

I

Informix

移行後のアクセス 60

Informix データ・ソース

DataJoiner 移行参照情報 88

L

LOB (ラージ・オブジェクト) データ・タイプ

書き込み操作の許可 4, 12, 56

制約事項 4, 12

LONG データ・タイプ

移行エラー 26

制約事項 4, 12

M

Microsoft SQL Server

移行後のアクセス 63

ラッパー名の変更 4

Microsoft SQL Server データ・ソース

データ・タイプ・マッピング 91

DataJoiner 移行参照情報 90

N

NET8 ラッパー

移行後の変更 49

O

ODBC

移行後のアクセス 65

ODBC データ・ソース

データ・タイプ・マッピング 93

DataJoiner 移行参照情報 92

Oracle

LONG データ・タイプの移行 4, 12

Oracle データ・ソース

移行後のアクセス 67

DataJoiner 移行参照情報 85

NET8

データ・タイプ・マッピング 87

SQLNET

データ・タイプ・マッピング 86

S

SDE 転送ファイル

データのエクスポート 4

Solaris オペレーティング環境

64 ビット移行 39

SQL 構文

DataJoiner からの DDL 変更点 4

SQLNET ラッパー

移行後、NET8 に変更 49

Sybase

移行後のアクセス 70

インターフェース・ファイル 26, 70

サーバー・オプションの制約事項 12

Sybase データ・ソース

サーバー・オプションの制約事項 4

DataJoiner 移行参照情報 89

T

Teradata

移行後のアクセス 72

Teradata データ・ソース

DataJoiner 移行参照情報 94

U

UNIX

移行

インスタンス 37

DB2 36

DB2 Information Integrator への移行
31

W

Windows

移行

DB2 34

DB2 Information Integrator への移行
31

WITH CHECK OPTION 文節

使用するビュー 2

ビューのドロップ 26

IBM と連絡を取る

技術上の問題がある場合は、お客様サポートにご連絡ください。

製品情報

DB2 Information Integrator についての情報は、電話または Web から入手することができます。

米国にお住まいの場合は、以下のいずれかの番号にお問い合わせください。

- 製品の注文または一般情報の入手: 1-800-IBM-CALL (1-800-426-2255)
- 資料の注文: 1-800-879-2755

Web 上で <http://www.ibm.com/software/data/integration/db2ii/support.html> にアクセスします。このサイトには、最新のテクニカル・ライブラリーに関する情報、資料の注文、クライアントのダウンロード、ニュースグループ、フィックスパック、ニュース、および Web リソースのリンクが含まれています。

お住まいの国や地域の IBM 事務所の所在地を調べる場合は、Web 上で IBM Directory of Worldwide Contacts (www.ibm.com/planetwide) を参照してください。

資料についてのコメント

お客様のフィードバックは IBM が良質な情報を提供する助けになります。この資料や他の DB2 Information Integrator の資料についてのコメントをお送りください。コメントの送付には、以下のいずれかの方法を利用することができます。

- www.ibm.com/software/data/rcf で、オンラインの読者コメント・フォームを使用して送信する。
- 電子メール (E メール) で comments@us.ibm.com に送信する。お送りいただく情報には、製品の名前、製品のバージョン番号、および資料の名前と部品番号 (該当する場合) を必ず含めてください。特定の本文についてコメントする場合は、本文の位置 (たとえば、タイトル、表の番号、またはページ番号) を含めてください。



Printed in Japan

SC88-9610-01



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12